

Title	ローマ字本キリシタン資料に基づく日本語拗音節の研究
Author(s)	竹村, 明日香
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47013
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平成 24 年度
大阪大学大学院 博士学位申請論文

ローマ字本キリシタン資料に基づく
日本語拗音節の研究

竹村 明日香

凡例

[本文, 引用]

- ・ 傍線, 「 」, (), “ ”, 【 】, 傍点は, 特記していない限り稿者が付したものである。
- ・ 旧字体は, 適宜, 新字体に改めた。

[用語]

- ・ 言語学用語は次のように邦訳して用いることがある。
coronal : 前舌子音 dorsal : 舌背子音 labial : 唇音子音
- ・ coronals, dorsals, labials の類を, それぞれ次の子音で代表させて言及することがある。
coronal : 歯茎音 (alveolar), dorsal : 軟口蓋音 (velar), labial : 唇音 (labial)
- ・ 表示の便宜を図るため, 次のように代用させて用いる。
[c] → [ʃ], [z] → [ʒ]

目次

凡例

序章	1
本研究の目的	1
本稿の構成	2
第 I 部　ローマ字本キリシタン資料のオ段拗長音	4
第 1 章　研究の枠組み	6
1 はじめに	6
2 先行研究概観	6
2.1 日本語拗音節における硬口蓋化	6
2.2 世界の諸言語における硬口蓋化	9
2.2.1 Chen (1973), Bhat (1978)	9
2.2.2 Kochetov (2002・2011)	10
2.2.3 Bateman (2007・2011)	10
3 本研究での用語の定義	13
3.1 「硬口蓋化」の定義	13
3.2 「拗音」に関わる用語の定義	14
4 キリシタン資料研究史概観——拗音節を中心に——	15
5 主要調査対象資料一覧	18
第 2 章　開拗長音	19
1 はじめに	19
2 『日葡辞書』における開拗長音の扱い	20
2.1 表記数と書中での現れ方	20
2.2 例言内容	23
3 先行研究——同音異表記説——	24
3.1 森田 (1955・1980・1993)	24
3.2 問題点	26
4 調査結果	28
4.1 『日葡辞書』	28

4.2	他のローマ字本キリシタン資料	32
5	解釈	34
5.1	-eö 出現の音声的要因	34
5.2	-eö の出現と多寡の要因	35
5.3	-eö の正体	36
6	-eö と-iö を異なる発音とみなしうる諸点	37
6.1	拗短音の -eo, -ea	37
6.2	略号「l」の機能の統一	39
6.3	合拗長音表記 -eô・iô との平行的な分布	42
7	なぜ『日葡辞書』は異音を収載したのか	44
8	まとめ	45
第3章	合拗長音	47
1	はじめに	47
2	-eô と-iô の表記でゆれる箇所	47
3	先行研究の整理と問題点の指摘	48
3.1	先行研究の整理	48
3.2	先行研究の問題点	51
4	調査結果	54
4.1	ローマ字本キリシタン資料の合拗長音表記	54
4.1.1	『日葡辞書』	54
4.1.2	他のローマ字本キリシタン資料	58
4.2	抄物の合拗長音表記	59
4.2.1	成篁堂本『論語抄』	59
4.2.1.1	調査方法	59
4.2.1.2	調査結果	60
4.2.2	『杜詩統翠抄』	63
5	解釈	64
6	まとめ	65
第4章	バレット写本の拗音節表記	66
1	はじめに	66
2	書誌情報と調査方法	67
2.1	書誌情報	67
2.2	調査方法	68
3	調査結果	68

3.1	開拗長音	68
3.2	合拗長音	71
3.3	ア段・オ段拗短音	72
4	構成からの考察	73
5	まとめ	75
第Ⅱ部	硬口蓋化の諸現象	77
第5章	中近世日本語のエ段音節における硬口蓋化	79
1	はじめに	79
2	問題の所在	79
3	先行研究	80
3.1	朝鮮資料とエ段音節の通時的変化について	80
3.2	問題点	82
4	文献および音声資料における様相	83
4.1	文献	83
4.1.1	近世期資料	83
4.1.2	近代期資料	85
4.1.3	小結 1	85
4.2	音声資料	86
4.2.1	調査方針	86
4.2.2	調査結果	87
4.2.3	小結 2	90
5	考察	91
5.1	硬口蓋化の非対称性——通言語的傾向——	91
5.2	硬口蓋化の非対称性——キリシタン資料での現れ——	91
6	まとめ	93
第6章	音声と形態の相克——deô, teô, neô を中心に——	95
1	はじめに	95
2	出現箇所と先行研究での解釈	96
2.1	本則ではない eô の出現箇所	96
2.2	先行研究とその問題点	96
3	調査結果	99
3.1	『天草版平家物語』	99
3.2	『日葡辞書』	100

4. 本則ではない・eô に音声を認め得る証拠	101
4.1 『日葡辞書』での niù, niû 表記	101
4.2 九州方言での動詞の未来形	102
4.3 形態音韻論的解釈	103
5. 本則ではない・eô の音節の変遷	104
6. 下二段動詞における助動詞「ヨウ」の成立	106
6.1 先行研究——助動詞ヨウの成立について——	106
6.2 調査方法	107
6.3 調査結果	107
6.3.1 近世前期	107
6.3.2 近世後期	108
7. 解釈——脱硬口蓋化の関与について——	110
8. まとめ	111
第7章 拗音節の体系的整理と派生する問題について	112
1 はじめに	112
2 拗音節における諸現象の体系的整理	112
3 派生問題——上代特殊仮名遣いイ列・エ列との表記区分の近似性——	115
3.1 表記区分の対照	115
3.2 書き分けの要因	116
3.3 相違点	118
3.4 解釈——表記区分が共通する理由——	119
5. まとめ	120
終章	121
参考文献	124
調査資料	129
初出一覧	132

序章

1. 本研究の目的

本研究の目的は、ローマ字本キリシタン資料に見える日本語拗音節の調査を通して、中世末期日本語の拗音節に、「完全硬口蓋化」と「不完全硬口蓋化」の2種が反映されていることを明らかにすることである。とりわけ、上記の硬口蓋化の2種が子音の調音点の差に基づいて生じていることを明らかにし、この規則性によって中近世日本語での硬口蓋化の関わる諸現象が体系的に把握できることを指摘する。

従来、日本語の拗音節研究は、主に漢字音研究の枠組みの中で行われてきた(石井 1977, 高松 1971・1993, 肥爪 2001・2010 等)。字音、音節構造、表記など、様々な観点から考究がなされてきたが、近年では、拗音節をもつ字音に特化した研究(肥爪 2005・2009)も行われており、日本語では拗音節の分布に偏りがあることなどが明らかにされつつある。

また漢字音研究以外でも、拗音節は、音節構造、表記、そして音声・音韻の観点から種々の検討が加えられてきた。音節構造に着目した研究(高山 1992, 柳田 2004)では、古来CV¹構造を基本としてきた日本語でCSVという拗音節がいかに受容されてきたかが論じられ、また一方で、表記研究では、和文資料での拗音表記(迫野 1968・1975, 長谷川 1997)や、片仮名による字音語の拗音表記(小林 1963, 榎木 1993)などを扱った研究があり、拗音節研究は、それぞれの研究分野で重要な位置を占めているといえる。

音声・音韻研究においても、拗音節は主要なテーマの一つとなっている。現代日本語の拗音節を音声学的・音韻論的に分析する研究(橋本 1984, 城田 1993)はもちろん、オノマトペ研究(Mester and Itô 1989, Schourup and Tamori 1992, 那須 2005)や、日本語諸方言の音声研究(矢野 1955, 木部 1992, 多和田 2004)の中においても、拗音節の現れ方に注目したものは多い。また、音声・音韻史研究では、特にサ行エ段音節の変化²を扱った研究(浜田 1964, 蛭沼 2010)の中で、特に注目される傾向があるように思われる。

しかし、上記のように多岐にわたる拗音節研究があるものの、「拗音節が硬口蓋化という音声現象といかに関連しているのか」、また、「文献上ではそれらがいかに現れているのか」、といった観点から拗音節を深く追究した研究は、これまで行われてこなかった。

日本語の音声・音韻史研究では、中世末期に刊行されたローマ字本キリシタン資料を用いた研究が重要な一角をなしているが、従来の研究では、じ・ぢ・ず・づの四つ仮名や、撥音、促音などに関心が集まり、こと拗音に関しては、表記の観点からの考察が中心で、音声学的な考察はほとんど行われてこなかった。近年でも、キリシタン資料における拗音節に関しては、ローマ字表記の全体像を提示する中で部分的に扱われたり(根岸 2003・

¹ 以下、Cはconsonants(子音)、Vはvowels(母音)、SはSemi-Vowels(半母音)を指す。

² セ・ゼの音節が、中世中期から近世中期にかけて、[je] [ze]から[se] [ze]と発音されるようになった現象を特に指す。

2004, 溝口 2000), 表記者の表記規範と関連付けて論じたり (菅原 1984・1989), 資料中における表記率を明らかにしたり (岡田 2012), 音節構造と関連付けて論じる研究 (岸本 1999) などが主流をなしており, 硬口蓋化という観点を取り入れたものは皆無であると言ってよい。

キリシタン資料のローマ字綴りは, 子音表記と母音表記を分けて音素的に分析できることから, 歴史的文献でありながら音声学的な研究が可能であるという利点がある。これまでもその利点を生かして多くの画期的な研究が行われてきた。しかし本研究の特色は, 上述の通り, 音声・音韻史研究においてもキリシタン資料研究においても欠けていた, 「拗音節を硬口蓋化(と子音の関係)の観点から分析する」という視点を持ち込むことであり, そこから新たな知見を提出することを目指す。

なお硬口蓋化に関しては, 近年, Bateman (2007・2011) や Kochtov (2002・2011) による類型論的研究が進展し, 子音との関連が深いこと, 特に, 子音の調音点と深い関わりがあることが明らかにされてきた。本研究は, それらの成果を援用しつつ, また同時にキリシタン資料特有の資料的性格も踏まえて, 分析を進めていく。

本研究は, 硬口蓋化という音声現象を基軸にして拗音節の分析を行うため, 主要な観点は音声にあるが, 従来の表記解釈に対しても一提言を行うので, 議論は, 音声と表記の双方にまたがる。また考察の一環で方言も調査対象とするので, 本研究で扱う内容は, キリシタン資料, 音声, 表記, 方言の各分野にわたり, それぞれに新たな視点を提供することになる。

2. 本稿の構成

本稿は, 全7章によって構成されている。各章では次のような検討を行う。

第1章 研究の枠組み

第1章では, 先行研究を整理しつつ, 拗音節を分析する際に重要な「硬口蓋化 (palatalization)」という音声現象について, 定義付けを行う。特に Bateman (2007) が提唱した硬口蓋化の2種 (full palatalization, secondary palatalization) を設定する分析法を用い, 日本語拗音節を考察する際の独自の枠組みを提示する。また, 「開拗長音」「合拗長音」といった本研究で頻用する用語についても定義を行う。

第2章 開拗長音

第2章では, キリシタン資料の拗音節のうち, 開拗長音 (開音を含む拗長音) の音節についての考察を行う。開拗長音の音節の一部には, biö~beö のように, -iö (本則表記) と -eö (異例表記) の二様の表記が現れる。これらを音節頭子音別に分析することで, この二表記の出現には偏在があること, そしてその偏在は, 硬口蓋化の2種と相関性があること

を明らかにする。また、『日葡辞書』の内部徴証から、*-iō* と *-eō* の間に音声の異なりがあることも指摘する。

第3章 合拗長音

第3章では、開拗長音の対になる、合拗長音（合音を含む拗長音）の音節に現れる *-eō*（本則表記）と *-iō*（異例表記）の二表記について考察する。これらの二表記にも、音節頭子音の差に基づく出現の偏在があること、そしてその偏在は硬口蓋化2種と関連性があることを指摘する。さらにキリシタン資料の諸記述や抄物との対照から、*-eō* と *-iō* の表記間には音声差が認められることを明らかにする。同時に、これらの二表記は、*/eu/* の拗長音化の遅速を表していることも述べる。

第4章 バレト写本の拗音節表記

第4章では、バレト写本の拗音節の調査を行い、第2・3章で扱った刊本の結果と対照させる。刊本と写本の結果がほぼ一致することを示すことにより、拗音節表記が音声的要因によって記されていることをさらに裏づける。

第5章 中世日本語の工段音節における硬口蓋化

第5章では、中世日本語の工段音節における硬口蓋化について検討を行う。従来、中世の工段音節はすべてが硬口蓋化していたと考えられてきたが、中世日本語の特徴を残す九州方言の調査から考えると、特定の音節に限って硬口蓋化していたと推定される。本章で提示する工段音節の硬口蓋化の分布は、硬口蓋化の通言語的傾向と一致するものであり、キリシタン資料の表記分布とも平行的であることから、当時の実現音声として蓋然性の高いものであることを指摘する。

第6章 音声と形態の相克——*deō*, *teō*, *neō* を中心に——

第6章では、『天草版平家物語』に見える *deō*, *teō*, *neō* の表記を中心に上げ、これらが、形態音韻論的な要因によって記された可能性が高いことを指摘する。また、「下二段動詞+助動詞ウ・ウズル」で非拗音形の助動詞ヨウ（例：食べヨウ）が現れる過程を文献上から追究し、この過程では「脱硬口蓋化」という音声現象が関与していたと考えられることを指摘する。

第7章 拗音節の体系的整理と派生する問題について

第7章では、前章まで扱ってきた拗音節の問題を整理し、体系的に把握する試みを行う。拗音節の諸現象は、硬口蓋化2種の別によって様相が二分すること、またその2種の別は子音の調音点の差によって決定していることなどを述べる。さらに、本研究の内容から派生する問題として、キリシタン資料のオ段拗長音表記と、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列で表記区分が一致することを指摘し、その要因について言及する。

終章では、本研究のまとめと今後の課題を述べる。

第 I 部

ローマ字本キリシタン資料の 才段拗長音

第 I 部 ローマ字本キリシタン資料のオ段拗長音

第 I 部では、ローマ字本キリシタン資料におけるオ段拗長音について考察する。まず、本研究の枠組みを提示した後、キリシタン資料の開拗長音（開音の拗長音）と合拗長音（合音の拗長音）の音節に出現する二様のローマ字表記を分析し、それぞれの表記には音声差が認められること、そして、その音声差には硬口蓋化の 2 種の別が反映されていることを指摘する。

第 1 章では、本研究の枠組みを提示する。先行研究を整理すると共に、拗音節を音声学的に分析の際の重要となる鍵となる「硬口蓋化 (palatalization)」について定義を行う。特に、硬口蓋化には「完全硬口蓋化」と「不完全硬口蓋化」の 2 種があることを提示し、それらの音声学的特徴を記述する。また、本研究で頻用する用語の定義も行う。

第 2 章では、ローマ字本キリシタン資料の開拗長音にみえる「-iö」「-eö」の二表記について考察し、これらの表記に自由異音としての音声差が認められることを指摘する。その根拠として、(1) -iö と -eö の二表記には音節頭子音の差に基づく出現の偏在があること、(2) その出現の偏在は硬口蓋化 2 種の分布と一致していること、(3) 『日葡辞書』の内部徴証から見ても二表記には音声差があると指摘できること、などを挙げる。

第 3 章では、ローマ字本キリシタン資料の合拗長音にみえる「-eô」「-iô」の二表記について考察し、これらの表記にも音声差が認められることを指摘する。その根拠として、(1) キリシタン資料の文典等に音声の差異を認める記述があること、(2) 二表記の分布が音節頭子音の差に基づいており、硬口蓋化 2 種の分布と一致していること、(3) 抄物の表記でも同じ表音表記傾向が確認できること、などを挙げる。

第 4 章では、バレット写本の拗音節表記を調査し、そこに現れた表記分布が、第 2・3 章で取り上げた刊本の表記分布とほぼ一致することを指摘する。写本と刊本の結果が合致することを示すことによって、拗音節の表記が、硬口蓋化という音声現象をもとにして記されていることをより強く裏付ける。

第1章 研究の枠組み

1. はじめに

本章では、日本語拗音節を分析する際の重要なキーとなる「硬口蓋化³(palatalization)」という音声現象について取り上げ、先行研究を参照しながら、本研究での定義付けを行う。

まず現代標準日本語の場合、硬口蓋化は、(1a) のようなイ段音節と、(1b) のような拗音節に生じている。

- (1) a. キ : /ki/ → [ki]
b. キヤ : /kya/ → [kia]

よって拗音節とは、硬口蓋化という音声現象と不可分の関係にあることがわかる。しかし、日本語音韻史における拗音節研究では、拗音節と硬口蓋化との関連がくわしく説かれてきておらず、また、硬口蓋化そのものにも十分な音声学の定義が与えられてこなかった。

そこで本節では、研究の枠組みとして、硬口蓋化を音声学的に定義し、その定義の中で日本語拗音節がいかに関係を説明できるかを述べる。

2. 先行研究概観

2.1 日本語拗音節における硬口蓋化

硬口蓋化は世界中の言語に広く観察される音声現象であるが、その音声学的特徴を詳述した研究は決して多くはない。特に日本語の研究においては、硬口蓋化は、音声学の書の「二次調音（あるいは副次調音）」の項目で説明されるにとどまってきた⁴。この二次調音

³ 「口蓋化」とも呼ばれる。服部（1951）は palatalization を「口蓋化」と邦訳しており、「硬口蓋化」とは普通いわない（134頁）と述べているが、神山（1995）は、palatalization は palatal（硬口蓋）という名詞を動詞化（palatalize [硬口蓋化する]）した後にさらに名詞化した語であるので、「硬口蓋化」と称するのが正しいと指摘する。また、「口蓋化」という用語では、軟口蓋化との区別がつきにくいため、本研究では palatalization を「硬口蓋化」を呼ぶこととする。先行研究で「口蓋化」として言及されている部分も適宜、「硬口蓋化」という用語に改める。しかし引用部分では原文のまま用いる。

⁴ 『日本語研究事典』（2007年、明治書院）や『国語学大辞典』（1980、東京堂出版）でも、「硬口蓋化（あるいは口蓋化）」は立項されておらず、後者の書中の「半母音」や「琉球語」の項でわずかに言及されるのみである。参照までに、『国語学大辞典』での硬口蓋化の説明を以下に掲げる。

【口蓋化】日本語の場合、イ段音の子音が後続の [i] の構えの準備のため、前舌面を口蓋に近づけて発音される、たとえばキ [k̟i]、ミ [mi̟] など。（中略）シ・ジ・チ・ニ・ヒなどは口蓋音の [ʃ] [tʃ] [dʒ] [ɲ] [ʒ] などになっている。拗音キヤ・シヤ・ギョ・ショ・キュ・シュなどは、このような口蓋化音または口蓋音に a、o、u の母音が接続したものである。（『国語学大辞典』「半母音（semi-vowel）」の

とは、主要調音と同時に別の調音を行う調音方法を指す。硬口蓋化は、「軟口蓋化」「唇音化」とともに、この二次調音の一種に相当する⁵。硬口蓋化の音声学的な定義は、一般的に、次の『音声学大辞典』の記述のように説明される。

(2) 第 1 調音点のほかに、第 2 調音点として舌面の一部が硬口蓋の方向に持ち上げられる場合をいう。(『音声学大辞典』「口蓋化」300 頁)

しかし、(2) のように舌面を上昇させる硬口蓋化は、子音の調音点が異なると、硬口蓋化の調音法それ自体も異なることがしばしば指摘されてきた。特に、硬口蓋化に関して調音音声学の観点から言及してきた神保 (1933・1940)、服部 (1951)、佐久間 (1963) は、現代標準日本語の拗音節が、音節頭子音の差によって複数に区分されることを指摘している。

(3) kj の類——「甲音」 } 「丁音」 }
 kw の類——「乙音」 } 「某音」 }
 ɸ tf j ——「丙音」 } (神保 1933 : 41)

以上の (3) のうち、現代日本語の拗音節は、「kj の類」(例：キャ・キュ・キョ) と⁶、「ɸ tf j」の類 (例：シャ・シュ・ショ) の 2 類があることになる⁷。

神保 (1933 : 40-41) は、キャ・キュ・キョのような「kj の類」の子音が、[kj] という「二重子音」又は「複合子音」とも呼べるような調音になるのに対し、シャ・シュ・ショのような「ɸ tf j」の子音は、[ɸ] [tf] のように発音位置が一箇所で行われる調音できていると指摘し、「音その者の性質にちがふ所があることを注意しなければならない」(41 頁) と述べている。すなわち、日本語では同じ「拗音」と呼ぶ音節でも、音節頭子音の調音の違いによって、2 通りに区分されることを指摘していることになる。

したがって現代日本語では、次の小倉 (2011) のように、拗音節は、調音的特徴に基づいて二分されるのが一般的である。

項、加藤正信執筆)

⁵ 琉球方言での /ki/ が /tʃi/ となるような歴史的な音韻変化も「硬口蓋化」と呼ばれるが、本研究ではこのような例は取り上げず、共時態での音声現象における硬口蓋化を扱う。

⁶ 神保 (1933 : 40) では、ギャ = gja, nja, ニャ = nja, ピャ = pja, ビャ = bja, ミャ = mja, リャ = rja, ヒャ = hja (ウ段とオ段拗音はこれに準ずる) を、(2) の「kj の類」に含めている。ナ行拗音をこの類に含める点が、後述の小倉 (2011) や Bateman (2007) 等の分析と異なる。

⁷ 「kw の類」は、[kwa], [gwa] のようないわゆる合拗音と呼ばれる音節である。周知の通り、これらは近世期に衰滅したが、現代でも東北方言などでは残存している。

(4) a. 子音+半母音 [j] +母音

キヤ・キュ・キョ [kja, kju, kjo] ; ギヤ・ギユ・ギョ [gja, gju, gjo] ;
ビヤ・ビユ・ビョ [bja, bju, bjo] ; ピヤ・ピユ・ピョ [pja・pju・pjo] ;
ミヤ・ミユ・ミョ [mja, mju, mjo] ; リヤ・リュ・リョ [rja, rju, rjo]

b. (後部歯茎 / 硬口蓋) 子音+母音

シヤ・シユ・ショ [ʃa, ʃu, ʃo] ; ニヤ・ニユ・ニョ [ɲa, ɲu, ɲo] ;
ヒヤ・ヒユ・ヒョ [ça, çu, ço] ; チャ・チュ・チョ [tʃa, tʃu, tʃo] ;
ジャ・ジュ・ジョ (ヂャ・ヂュ・ヂョ) [dʒa, dʒu, dʒo / ʒa, ʒu, ʒo]

(小倉 2011 : 108)

上記の通り、(4a) は、子音の調音点が、直音の発音時と同じ位置に保たれたままの拗音節であり、(4b) は、子音の調音点そのものが、直音の発音時とは異なって一律に後部歯茎音又は硬口蓋音に転じてしまっている拗音節である。現代日本語の研究ではこのように、実現音声の結果から、拗音節を 2 類に分ける分析が行われている。

現代標準日本語では、上記のような分析に収まるものの、服部 (1951 : 134) は一般音声学の観点から、硬口蓋化についてさらに次のような特徴を指摘している。

(5) a. 両唇音や唇歯音の口蓋化においては第一調音はほとんど変化しないが、口角が左右へ引かれる傾きがある。(服部 1951 : 134)

b. 軟口蓋子音 [k] [g] [ŋ] なども口蓋化されることができる。しかし、口蓋化の程度が高い場合には、第一調音を元のまま保つことは困難で、調音点が前へ移動するのが普通である。(服部 1951 : 134-135)

(5b) には具体的な例が挙げられていないものの、これは、[k] → [tʃ], [g] → [ʒ] となる、琉球方言にみられるような硬口蓋化の例を指していると思われる。これらは、硬口蓋化が著しいために、軟口蓋音 [k] [g] が調音点を前方へ移動させ、後部歯茎音 [tʃ] [ʒ] に転じた例である。このように、同じ軟口蓋音 [k] [g] でも、硬口蓋化の違いによって、主要調音点を移動させない場合 (例：現代標準日本語) もあれば、移動させてしまう場合 (例：琉球方言) もあることがわかる。

しかし日本語の拗音節研究では、このような硬口蓋化の違いにまでは立ち入って説明が行われて来ておらず、上述の通り、実現音声としての拗音節にだけ焦点を当てて分析が行われてきた。したがって、日本語の拗音節研究に欠けている視点は、「硬口蓋化にはどのような種類があるのか」、また、「それらは各子音といかに関係しているのか」、という 2 点であると考えられる。そしてさらに、日本語音韻史の中でも、それらの視点が活かせるかどうかを検討する必要がある。

2.2 世界の諸言語における硬口蓋化

上記のような日本での拗音節研究に対し、海外では、世界の諸言語における硬口蓋化の研究が行われている。代表的な例には Chen (1973), Bhat (1978), Kochetov (2002・2011), Bateman (2007・2011) がある。これらの先行研究では、硬口蓋化は子音と関係が深いこと——特に、子音の調音点と硬口蓋化の関係が深いことが繰り返し説かれ、それらの関係性について着目した分析が行われている。特に、子音の調音点を coronal, dorsal, labial の3つに大別し、各子音と硬口蓋化について追究したものが近年主流をなす。

以下では、本研究の立場から特に重要となる上記4氏の先行研究を概説する。

2.2.1 Chen (1973), Bhat (1978)

Chen (1973) は、中国語やロシア語などを観察材料とし、それらを基に硬口蓋化における音韻論的な規則を記述した。この研究で特筆されるのは、前掲(4b)の [s] → [ʃ] のような元の子音の調音点を変えてしまう硬口蓋化は、どの言語にも labial < coronal < dorsal という含意傾向 [implicational fashion] があると予測した点にある⁸。つまり、主要調音点を変更してしまう硬口蓋化は、口腔後方で調音する子音の方が生じやすいという主張であり、例えばある言語で、唇音 p が硬口蓋化していれば、歯茎音 t や軟口蓋音 k も硬口蓋化していることになり、歯茎音 t が硬口蓋化していれば、軟口蓋音 k も同じく硬口蓋化していることになる。その結果、軟口蓋音 k だけが硬口蓋化している言語があっても、歯茎音 t だけが硬口蓋化している言語はないという予測を提示している。

一方で Bhat (1978) は、120 の言語の調査結果から、硬口蓋化の類型化を行った。結果、歴史的な硬口蓋化には「tongue-fronting」「tongue-raising」「spirantization」の3プロセスがあると指摘しているが⁹、今日では、これらには硬口蓋化と見なせないものも含まれているという批判もある (Bateman2007)。しかし一方で、Bhat は、硬口蓋化が子音に与える影響について次の重要な指摘をしている。

- (6) a. There are evidently two different ways in which palatalization could affect a consonant: 1) it could modify the primary articulation itself, or 2) it could add a secondary palatal articulation to the consonant, leaving the main articulation unaltered. [私訳：子音に影響を及ぼす硬口蓋化には、明らかに異なる2つの方法がある；1) 第一調音点そのものを変更するもの、2) 主要調音点を変えないまま、硬口蓋的調音を子音に付加するもの] (Bhat1978 : 67)

⁸ 「<」は、開きの大きい方が、“より好まれる”“より生じやすい”という意味をもつ。

⁹ tongue-fronting には [s] → [ʃ], tongue-raising には [k] → [s], spirantization には [r] → [s] のような現象が挙げられている (Bhat1978)。

1 のタイプは *velar* (軟口蓋音) や *apical* (舌尖音) の子音群に生じ, 2 のタイプは *labial* (唇音) の子音群に生じる傾向があることも指摘している (Bhat1978 : 67)。硬口蓋化が 2 つのタイプに分かれることと, また, それぞれの硬口蓋化を生じる子音群には傾向があることを指摘した意義は大きい。さらに, 調音点別にみて, *labial* には 1 の硬口蓋化が生じにくいことを指摘しており (Bhat1978 : 70), 硬口蓋化が子音の調音点と深く関与していることを示唆した点で重要な研究となっている。

2.2.2 Kochetov (2002・2011)

Kochetov (2002) は, 23 の言語における硬口蓋化のパターンを, *coronal*, *dorsal*, *labial* の子音別に考察し, 硬口蓋化には以下のような非対称性があることを指摘した。

- (7) a. *palatalized consonants are more marked than plain consonants* [私訳 : 硬口蓋化した子音は, していない音節よりも有標である] (Kochetov2002 : 52)
- b. *palatalized labials are more marked than palatalized coronals* [私訳 : 硬口蓋化した唇音は, 硬口蓋化した歯茎音よりも有標である] (Kochetov2002 : 52)

Kochetov (2002) は特に (7b) の *labial* の有標性 (例 : 硬口蓋化が生じにくい) に注目しており, この特徴は, 共時的な例に限らず, 音変化の方向や, 言語のバリエーションにおいても観察されると指摘している (2002 : 51)。

さらに, 子音ごとに, 生じやすい硬口蓋化のパターンがあることも指摘しており, *dorsal* よりも *coronal* の方が子音の調音点を変更する硬口蓋化が生じやすいことなども述べている¹⁰ (2011 : 1671)。また, 硬口蓋化が失われる脱硬口蓋化 (*depalatalization*) の過程においても, *labial* の方が先に生じやすい (2002 : 24, 28) といった指摘があり, 全体として, 硬口蓋化においては, *labial* の方が, *dorsal* や *coronal* よりも有標であることが明らかにされている。

2.2.3 Bateman (2007・2011)

Bateman (2007) は, 217 の言語の調査結果から, 硬口蓋化のパターンを「*full palatalization*」と「*Secondary palatalization*」の 2 つに大別し, *coronal*, *dorsal*, *labial* の子音がどちらの硬口蓋化を生じやすいかを具体的なデータで提示した。

まず, 2 種の硬口蓋化については, 次の (8) (9) のように定義されている。

¹⁰ すなわち, [k] → [tʃ] というような *dorsal* の硬口蓋化よりも, [s] → [ʃ] のような *coronal* の硬口蓋化の方が生じやすいことを指摘している。この指摘は Bateman (2007) が既に明らかにしており (後述), 両者の調査結果が一致していることを示している。

(8) *Full palatalization*. A consonant changes its primary place of articulation and often its manner of articulation, while moving toward the palatal region of the vocal tract when adjacent to a high and/or front vocoid. [私訳：完全硬口蓋化。高舌そして/あるいは前舌の母音類と隣接したとき，声道の硬口蓋領域に近づきながら，ある子音が第一調音点を変更したり，しばしばその調音法を変更すること]

(Bateman2011 : 589-590)

(9) *Secondary palatalization*. A consonant acquires a secondary palatal articulation when adjacent to a high and/or front vocoid. [私訳：二次的硬口蓋化：高舌そして/あるいは前舌の母音類と隣接したとき，ある子音が二次的な硬口蓋調音を獲得すること]

(Bateman2011 : 589-590)

すなわち，調音の際，子音の主要調音点を変更してしまう硬口蓋化 (full palatalization) と，子音の主要調音点は移動せずに二次的に硬口蓋調音を付加するだけの硬口蓋化 (secondary palatalization) があるということである。そして，labial, coronal, dorsal の子音が 2 種の硬口蓋化を生じるとどのような実現音声 (outcome) になるかが示されている (【表 1】参照)。

【表 1】 Common palatalization targets and outcomes (Bateman2007 : 57 ,table2.5)

	Full palatalization		Secondary palatalization	
	Target	Outcome	Target	Outcome
Labial			p	C ^ɰ
			b	
			m	
Coronal	t	tʃ	t	C ^ɰ
	d	dʒ	d	
	s	ʃ	s	
	n	ɲ		
Dorsal	k	tʃ/c	k	C ^ɰ
	g	dʒ/ɟ	g	

※注：C は子音 (Consonant)。

labial の欄の一部が空欄であるのは，この子音が full palatalization を生じないことを示している。Bateman (2011 : 590) は，(8) (9) の硬口蓋化のタイプを決定する重要な要因は，子音の調音点であると指摘し (Bateman2011 : 590)，各硬口蓋化がどのような子音に生じやすいかを言語数で示した。Full palatalization の場合が【表 2】，Secondary palatalization の場合が【表 3】である。

【表 2】 Full palatalization patterns (Bateman2007 : 44, table2.3)

影響を受ける 調音点 (Affected POA)	Labial	Coronal	Dorsal	Coronal, dorsal	Labial, dorsal	Labial, coronal	Labial, coronal, dorsal
言語数 (No. of languages)	0	27	9	12	0	0	2 ^{**1}

※稿者注 1 : 上記 3 調音点のうち, labial だけが secondary palatalization を生じている言語は 10 ある。
(Bateman2011 : 593)

【表 3】 Secondary palatalization patterns (Bateman2007 : 50, table2.4)

影響を受ける 調音点 (Affected POA)	Labial	Coronal	Dorsal	Coronal, dorsal	Labial, dorsal*	Labial, coronal*	Labial, coronal, dorsal
言語数 (No. of languages)	0	7	9	3	2*	4*	10

*これらのパターンでは, coronal と dorsal が, それぞれ, 完全硬口蓋化を生じている。

Full palatalization については, 【表 2】等を踏まえ, 数点の特徴が指摘されている。内容を簡略にまとめる

- (10) a. labial には, ほぼ生じることがない。
 b. 大半の言語では, coronal のみか, dorsal のみか, あるいは coronal, dorsal の両方に生じている。しかし, coronal のみに生じる言語の方が, dorsal のみに生じる言語より多い。
 c. 調音法から見ると, 閉鎖音・摩擦音 > 流音 > 鼻音 > 放出音 > r 音 (ごく稀) の順に生じやすい。

(10a) は Bhat (1978)・Kochetov (2002) と同じく, labial が主要調音点を変える硬口蓋化を生じにくいと指摘したものである。(10b) は, Chen (1973) が予測した dorsal > coronal という包含関係を否定する根拠となっている¹¹。そして Bateman は上記の結果を踏まえて, full palatalization は, labial よりも coronal や dorsal の方に生じやすいという普遍的特性があるが, とりわけ coronal に生じる場合が多いと主張している

¹¹ ほぼ同一の内容を Kochetov (2011 : 1674) も指摘する。ただし, 調音点を変更してしまう硬口蓋化を, 彼は次の 2 つの類型に分けている。

Main typological generalizations about palatalization (“>” = “better than, more likely than”)

a. Target place asymmetry (place-changing palatalization)

i . Coronal, dorsal > labial

ii . Coronal > dorsal, labial

(Kochetov2011 : 1674 (8))

(Bateman2007 : 86)。

Secondary palatalization については、次の (11) のような特徴が指摘されている。

- (11) a. labial, dorsal, coronal のすべてに生じるが、labial だけに生じることはない。
b. labial に生じるときは、dorsal, coronal にも full palatalization か secondary palatalization が生じている。

(11) には、labial の有標性 (Kochetov2002) が顕著に認められる。したがって上記の結果から Bateman は、secondary palatalization にも、labial より、dorsal や coronal の方が生じやすいという普遍的な含意関係があることを指摘している (Bateman2011 : 594)¹²。

Bateman の類型論的研究は、硬口蓋化の調音音声学的な異なりや、各子音での硬口蓋化のパターンの類型を明快に示しており、極めて有意義な議論となっている。日本語拗音節が 2 種に分類されるのも、この full palatalization と secondary palatalization の別に則っているものであり、この枠組みに沿って分析されるのが適当と考えられる。

しかし Bateman (2007) では、琉球方言を加えたためか、日本語では [k] → [tʃ] の硬口蓋化を生じるという解釈を示しており、この点の訂正が求められる。よって以下では、Bateman (2007・2011) の定義を基礎としつつ、現代標準日本語における日本語拗音節の分析を行う。

3. 本研究での用語の定義

3.1 「硬口蓋化」の定義

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、Bateman (2007・2011) の硬口蓋化を 2 種、すなわち「full palatalization」と「Secondary palatalization」に分けて拗音節の考察を行う。各用語の邦訳は、神山 (1995) を参照し、前者を「完全硬口蓋化」、後者を「不完全硬口蓋化」と称することとする¹³。よって、硬口蓋化の 2 種は、次のように定義する。

¹² その他、r ではどちらの硬口蓋化も生じにくいことが指摘されている (Bateman2011 : 594 他)。Hall (2000) も、硬口蓋化した r 音 (例 : /ri/) が、硬口蓋化した r 音以外の coronal (例 : /ti/, /di/, /ni/, /li/) よりも類型論的に有標であることを指摘している。本研究でも r は硬口蓋化を生じにくいという特色が現れており (第 2・3 章参照)、この指摘に沿うものであるが、詳しくは立ち入らない。なおオノマトペでもラ行の特殊性については議論がある (Mester&Itô1989, Schourup&Tamori1992)。

¹³ 神山 (1995) は「(完全) 硬口蓋化」、「(不完全) 硬口蓋化」と称しているが、両者の区別を明示化するために、() を外して用いる。

(12) **完全硬口蓋化**：前舌高母音 [i] 又は硬口蓋接近音 [j] と隣接した際、前舌が上昇することで、子音がその主要調音点を変更する現象。現代標準日本語では、r 以外の歯茎音に生じる。

(例) [s] → [ʃ], [t] → [tʃ], [z] → [ʒ], [d] → [dʒ],
[n] → [ɲ]

(13) **不完全硬口蓋化**：前舌高母音 [i] 又は硬口蓋接近音 [j] と隣接した際、前舌が上昇するものの、子音が、その主要調音点を変更させないまま、副次的に硬口蓋調音を獲得する現象。現代標準日本語では、唇音、軟口蓋音、r の歯茎音に生じる。

(例) [b] → [bʲ], [m] → [mʲ], [k] → [kʲ], [g] → [gʲ],
[r] → [rʲ]

現在の日本語研究において、上記のような、子音の調音点の差に基づく硬口蓋化の別を分析に適応させたものは、管見の限りでは、オノマトペ研究 (Mester&Itô1989, 那須 2005 など) と上代特殊仮名遣いのイ列・エ列の研究 (服部 1972・1976, 松本 1995) 以外には見られない。したがって、この硬口蓋化の 2 種が、日本語の歴史の中でどのように現れているのかを調査することは、日本語音韻史にとって極めて重要な課題であるといえる。

3.2 「拗音」に関わる用語の定義

ここでは、本研究で頻用する「拗音」「開拗長音」「合拗長音」等の用語について定義する。日本語では一般に、硬口蓋化した音節 (イ段音節を除く) を「拗音」と称する。この拗音という語は悉曇学に起源をもつ用語であるが (馬淵 1984a, 1984b 参照), この拗音は、伝統的に、「開拗音」と「合拗音」に大別されている。

開拗音とは、キャ [kja]・キュ [kju]・キョ [kjo] のような [j] を含む音節を指し、合拗音とはクワ [kwa]・グワ [gwa] のような [w] を含む音節を指す。したがって現代標準日本語の拗音節はすべて開拗音であり、「くわし (菓子)」「さんぐわつ (三月)」のように現れる合拗音は今では方言にしか残存していない (小松 1980, 松本 1977 参照)。

しかし、キリシタン資料を中心とする中世語研究では、これとは異なる意味合いで「開拗音」「合拗音」の用語が用いられることがある。中世語には、オ段長音に開音と合音の別がある。それをさらに、直音と拗音に二分して、4 つの音節に分け、それぞれに名称を与えている。具体的に挙げると、次のようになる。

- (14) a. 開直音……「たう」「たふ」の類
 b. 開拗音……「ちやう」の類
 c. 合直音……「とう」「とふ」（「とほ」「とを」）の類
 d. 合拗音……「ちよう」「てう」「てふ」の類

(亀井 1984a : 283)

すなわち、(14b)「開拗音」は〈開音を含む拗音〉、(14d)「合拗音」は〈合音を含む拗音〉ということになる。この用語は、上述の語と混同されるおそれがある。本研究では特に(14b)と(14d)を深く考察するため、用語を、次のように改めて使用することとする。なお、特に重要な「開拗長音」「合拗長音」「拗短音」の関係を図示すると【図 1】のようになる。

- (15) a. 開拗長音：オ段の開音を含む拗音節。仮名では「ちやう」の類。
 b. 合拗長音：オ段の合音を含む拗音節。仮名では「ちよう・てう・てふ」の類。
 (16) a. 拗短音：短音を含む拗音節。「ちや」「ちゆ」「ちよ」の類。
 b. 拗長音：長音を含む拗音節。「ちゆう」「ちやう」「ちよう」「てう」等の類。
 (17) 拗音：拗短音と拗長音を合わせた音節。

【図 1】本研究での「開拗長音」「合拗長音」「拗短音」

	開音	合音
長音	開拗長音 きやう	合拗長音 けう
短音	拗短音 きや・きよ	

※それぞれにカ行の例を挙げた。

「長」を加えたのは、長音と短音の差を明確にするためである。

よって以下、本研究では、「開拗長音」は〈開音を含む拗長音〉、「合拗長音」は〈合音を含む拗長音〉として用いる。

4. キリシタン資料研究史概観——拗音節を中心に——

本節では、本研究で中心的に扱う、キリシタン資料の拗音節に関する先行研究をまとめる。従来、キリシタン資料の拗音節研究は、音声ではなく表記の観点から研究が進められてきた。橋本(1961)は、文禄元[1592]年刊行の『ドチリナ・キリシタン』におけるロ

一マ字綴りの全容を提示する際、拗音節表記を、次のように分類して示している。

- (18) a. イ段音を示す文字の次に母音を加へたもの
b. イ段音の子音を示す文字の次に母音を加へたもの
c. 直音には用ゐない新しい文字に母音を加へたもの
- (19) a. qio qiũ qiõ guia guiõ, gia giũ giõ giô, fia fiõ, biõ, miõ, rio riõ
b. xa xu xo xũ xõ xô, ja ju jo jũ jõ, chũ chõ
c. nho nhô nhũ

(以上、橋本 1961:258-259 を整理したもの)

橋本は、この分類のうち、(19b) (19c) は完全な拗長音として記されているのに対し、(19a) には、i の表記が現れていることに注目し、これらの音節では「イ」の音が重く発音されていたと解釈した。また、合拗長音の「けう」の音節に *qeô* と *qiô*¹⁴ の二表記が見えることにも着目して、これらの表記には音声差があり、*qeô* は /eu/ の拗長音化が進行せずにエ段音を残存させたもの、*qiô* は拗長音化が進行してイ段音に近く聞こえたものと理解した。具体的には、次のように記述している。

- (20) 「えう」「せう」「でう」「ねう」の如く、正しい仮名遣でエ段の仮名を用ゐるものは、現今も拗音に発音し、此の書に於ても *yô* (要) *xô* (少) *giô* (條) *nhô* (饒) などを書いて、「よう」「しよう」「ちよう」「によう」など、オ段の仮名を含んだ拗音と少しも区別が無い。然るに、「けう」(教、凶、驕)「げふ」(業)のやうなカ行音に限つて、此の書には *qeô*, *gueô* とあつて、もとのエ音を存して居る。^[2] 想ふに、エウ音が今日の如き *yô* となるには、*eu eo ëõ iô yô* のやうな順序を経たのであらうが、此の書の出来た時代にはカ行以外の音は既に *iô* 乃至 *yô* の段階まで進んで居たが、カ行に限つて、未だ *ëõ* の段階に留まつて居たのではあるまいか。しかし、Satow が *Jesuit Mission Press in Japan 1591-1610* の中に引用した此の時代の耶蘇会出版書からの抜粋の中には、「業」を *guiô* と書いたものが混じて居り、本書の中にも「^{ケウクワイ}交会」を *qiõquai* と書いた例があるから (*qiõ* は *qiô* の誤であらう)、カ行音だけは、当時はまだ大体に於て *ëõ* の段階に在つたとしても、或場合には *iô* 乃至 *yô* の段階まで進んで居たものとも考へられる (カ行音にのみ特殊な音が存する事は、クキ、グエなどの例がある)。又、サトウ氏の書(十九頁)には、*caqeôzuru* (懸けうずる) *fiqitaterareô* (引立てられう) のやうな例があるのをおもへば、本来の日本語には、カ行の外にも *eô* の形があつたので

¹⁴ 実際は「*qiõ*」(38頁)の開音で現れているが、橋本は「*qiô*」の誤りであると解釈している。詳しくは第3章参照のこと。

あらう。(橋本 1961 : 260-261 頁)

すなわち、実証的調査を行わないまま、表記から直接、表音性を読み取る解釈を行ったことになる。橋本はこの解釈の例を重視し、これが当時の音韻的特徴の一つであるとみて、『ドチリナ・キリシタン』から得られる音声上の特徴の一つに次の一条を掲げている。

(21) 八、拗音は大抵今日の音と同じであるが、エウから出たものには、幾分か *ëö* の形が残つて居る。(橋本 1961 : 270)

その後、研究の進展に伴い、ラ行にも *reô*・*riô* があること(『天草版金句集』——吉田 1938)、開拗長音にも *-iö* と *-eö* の二表記があること(『日葡辞書』——土井 1942 等)などが指摘されたが、吉田(1938)、今泉(1951・1968)、阪田(1955)等は橋本の見解を踏襲し、それぞれの二表記には音声差が存在すると解釈した。

しかし『サントスの御作業』(1591年刊)を調査した高羽(1950)は、橋本(1961)の解釈が実証的でないことを指摘し、カ行の *qeô* と *qiô* だけを以て音声差があると判断するのは早計であると指摘した。なぜなら『ドチリナ・キリシタン』には、合拗長音には *qeô*・*qiô*・*giô* しか現れておらず、開拗長音にも *-iö* の一表記しか見えないため¹⁵、これらの僅かな用例から、音声差があることを見出すことは困難なためである。そして、*qeô*・*qiô* の表記は音声差を示すのではなく、ただ表記上のゆれにすぎないことを指摘している(福島 1979 も同様)。

このような、*qeô* と *qiô*、*qiö* と *qeö* のような二表記を同音異表記とみる解釈が優勢になってきた背景には、資料研究の進展があったことが大きい。土井(1942・1960・1963・1982)や森田(1955・1967・1980)、福島(1973)、大塚(1982)らによる書誌的研究の結果、外国人宣教師らのローマ字綴字には、*i* と *e* の表記交替が多いことが徐々に明らかになり、加えて『日葡辞書』の例言には、*qiö* や *qeô* の表記を、日本語の仮名表記と関連付けて記したとする記述があることが判明すると、拗長音の二表記(*qeô*~*qiô*、*qiö*~*qeö*)は、同音異表記に過ぎないという解釈が強く支持されるようになった。

特に、森田(1955・1980・1993)は、様々な観点から表記分析を行い、*qeô* と *qiô*、*qiö* と *qeö* のような各二表記が同音異表記であることを主張している(詳細は、第2章参照)。そしてその解釈は今日まで広く受け入れられ、ほぼ定説として落ち着いているといつてよい。すなわち、*qeô* と *qiô*、*qiö* と *qeö* のような二表記は、音声学的見地からの考察が一度も加えられていないことになる。

本研究は、この研究史における欠を補うため、キリシタン資料における日本語拗音節を

¹⁵ 『日葡辞書』には「*biö*」「*beö*」のような、*-iö* と *-eö* の二様の表記が現れるが、『ドチリナ・キリシタン』には *-iö* しか見えない。

音声学的に分析する。その出発点として、第2章では、上記の二表記を同音異表記と見る先行研究の解釈を再検討することから始める。

5. 主要調査対象資料一覧

以下に、本研究で主な調査対象とするローマ字本キリシタン資料を列挙する（それぞれ年代順に配列）。

〈刊本〉

- 『サントスの御作業』（1591年，天草）
- 『ドチリナ・キリシタン』（1592年，天草）
- 『ヒデスの導師』[別名：信心録]（1592年，天草）
- 『天草版平家物語』（1592年，天草）
- 『天草版伊曾保物語』（1593年，天草）
- 『天草版金句集』（1593年，天草）
- 『羅葡日対訳辞書』（1595年，天草）
- 『コンテムツス・ムンヂ』（1596年，天草）
- 『ドチリナ・キリシタン』（1600年，長崎）
- 『日葡辞書』（1603-04年，長崎）
- 『スピリツアル修行』（1607年，長崎）
- J. ロドリゲス著『日本大文典』（1604-08年，長崎）
- J. ロドリゲス著『日本小文典』（1620年，マカオ）
- D. コリヤード著『日本文典』（1632年）

〈写本〉

- 『サントスの御作業の内抜書』[別名：バレット写本，Reg. Lat.459]（1951年，加佐津）

第2章以下では、これらの資料を中心的に用いつつ、議論を進める。

第2章 開拗長音

1. はじめに

中世末期に刊行されたローマ字本キリシタン資料では、才段拗長音に、開音 (ô) を含む開拗長音と、合音 (ô) を含む合拗長音の別がある。両者を表記する際、サ・ザ・タ・ナ行では頭子音 (x-, j-, ch-, nh-) に開合音だけを付すのに対し (例: $\overset{\text{しやう}}{\text{xô}} / \overset{\text{せう}}{\text{xô}}$)、バ・ハ・ダ・ガ・マ・パ・カ・ラ行では頭子音 (b-, f-, g-, gu-, m-, p-, q-, r-) と開合音の間に i または e をも伴って表記する。後者の行の場合、開拗長音は -iô, 合拗長音は -eô と記すのが本則であるが、資料によっては稀に、開拗長音を -eô, 合拗長音を -iô と、i・e を逆にした異例表記も交えることがある¹⁶。表記を整理すると、【表1】のようになる。

【表1】二表記の現れ方

＼表記	本則	異例
開拗長音 (例) りやう	riô	reô
合拗長音 (例) れう	reô	riô

こうした二様の表記は、『日葡辞書』(本篇 1603 年, 補遺 1604 年, イエズス会長崎学林刊行) においても少なからず見ることが知られてきた。例えば本篇見出し語には、次の (1) 開拗長音, (2) 合拗長音ともに、両方の表記で記された語が見える。

- (1) Riôco / Reôco (両虎) ^{りやう こ}
 (2) Reôri / Riôri (料理) (上記共に『日葡辞書』本篇見出し語) ^{れう り}

これらの二表記は、音声差の反映であるのか、あるいは表記上の動揺にすぎないのかが問われる事例であるが、近年これらの二表記については同音の異表記にすぎないという解釈が定着しつつある。

しかし本章では、これらの表記を音節単位での考察することにより、(1) の開拗長音における biô, fiô, miô のような「-iô」と、beô, feô, meô のような「-eô」の表記の間には、音声の差が想定されることを指摘する。ただしこの差は音韻としての差ではなく、自由異音 (free variation) としての差であることを、『日葡辞書』の用例をもとに示す。

¹⁶ 用例数の多寡から本則表記と異表記を判別した森田 (1980・1993) の見解に基き、本稿では過半数を占める表記を「本則表記」、わずかに散見する表記を「異例表記」と称する。

以下では次の検討を行う。まず『日葡辞書』での開拗長音表記の扱いを確認した後（2節）、-iö と-eö を同音異表記とみなす先行研究を整理してその問題点を挙げ、音節単位で分析することの妥当性を述べる（3節）。次いで分析結果として、-eö の出現が音節頭子音の差に基くこと、またその分布はキリシタン資料全体で共通することを示す（4節）。-eö の出現要因については「硬口蓋化」と関連づけて説明する（5節）。そして『日葡辞書』内の諸点に拠っても -iö と-eö が異なる発音と解釈できることを示し（6節）、最後に-eö が『日葡辞書』に掲載された理由について言及してまとめる（7・8節）。

調査方法は次の通りである。

調査底本には、オックスフォード大学ボードレイアン文庫の『日葡辞書』の影印（勉誠社、1973年）を用いた。用例採取では、開拗長音部分に開合・四つ仮名の誤り、開音符号の脱落を含むものを除外した¹⁷。用例の統計を示す際には、「本篇」と「補遺」、「見出し語」と「説明文（見出し語以外の箇所総称）」に区分して各表に示す。

引用例は、特に断らない限り、本編見出し語を使用し、補遺の例には用例末尾に「*」を付した。邦訳は『邦訳日葡辞書』（岩波書店、1980年、以下『邦訳』と略す）に拠った。また、拗長音と拗短音をあわせて指す際には、便宜上、「拗音」と称することとする。

2. 『日葡辞書』における開拗長音の扱い

考察前に、『日葡辞書』での開拗長音の表記数、-eö の書中での現れ方、および例言内容について確認する。

2.1 表記数と書中での現れ方

【表2】『日葡辞書』の開拗長音表記数

	-iö	-eö	計
本篇	1056 639(417)	120 80(40)	1176 719(457)
補遺	151 106(45)	36 26(10)	187 132(55)
計	1207 745(462)	156 106(50)	1363 851(512)

注 上段は総数。下段は内訳を「見出し語（説明文）」の形式で表示。

【表2】の通り、『日葡辞書』には合計1363例の開拗長音表記があり、うち本則表記の-iö が1207例（本篇1056、補遺151）、異例表記の-eö が156例（本篇120、補遺36）存

¹⁷ 開合の誤りとは、開音を合音に誤ったもの（ö→ô）、あるいはその逆のもの（ô→ö）を指す。四つ仮名の誤りとは、「じやう」を「ぢやう」に誤ったもの（jō→giö）、あるいはその逆のもの（giö→jō）を指す。開音符号の脱落とは、「ö」の「~」を脱落させた表記をさす。また、「ö」に、「ó」や「ò」の表記をあてた例も、調査の厳密性を考慮して用例採取から除外した。

在する。-eö は全体の 12.9 % にすぎないが、語数で数えると-eö 表記の語は異なり語数で 117 語、述べ語数では 155 語に上る。

こうした -eö 表記の語は、見出し語では計 101 条の中に現れる。その出現形式を分類すると、次のようになる。

- (3) -eö の語形の単独標出 [58 条] Reöco (両虎)
- (4) 略号「l, (または)」で -eö と-eö でない語形の並置標出 [41 条]
 - a. 同語の -iö 語形と並置 [38 条] Fiöxi, l, feöxi (拍子)
 - b. 同語の -iö 以外の語形と並置 [3 条] Meican, l, meöcan (明鑑)
- (5) その他 [2 条] Canbeö, l, Cabeö (看病)

(3) は -eö 表記の語形をそれ単独で標出する例、(4) はラテン語注記「Vel. (または)」の略号「l,」を用いて、-eö と-eö でない語形を並べて標出する例である。(5) は「l,」で両方とも -eö を挙げる稀な例である。

以上の見出し語で注意されるのは、同語を -iö と-eö の両方で表記し、両者を対応させた例が少なくないという点である(「/」を挟む各語は、別条に掲げられていることを示す)。

- (6) a. Qeöcot / Qiöcot (軽忽)
- b. Feöxi, l, fiöxi / Feöxi, l, fiöxi (拍子)
- c. Reö / Riö. l, reö (寮)
- d. Meichö, l, meöchö / Meöchö / Miöchö (明朝)
- e. Feögue mono. l, feögueta mono (ひやうげもの・ひやうげた者)

-iö と-eö を別条に立てる例は、上記 (6) のように、語頭が開拗長音の例に著しい。-iö と-eö の両方で標出された見出し語 30 語のうち、語頭が開拗長音のものは 27 語を占める。それらの中には、次のように、「Vide, (～の条を見よ)」という参照注記を備えるものもある。

- (7) a. Reöco (両虎) 二匹の虎. 例, Reöco, nireôno tatacaiyo nasu. (両虎, 二竜の戦をなす) 二匹の虎, あるいは, 二匹の竜にも似た, 二人の主要人物が戦う, あるいは, 争う.
- b. Riöco (両虎) Futatçuno tora. (両つの虎) 二匹の虎. Vide Reöco. (Reöco の条を見よ)

(7b) では、「*Vide Reõco* (Reõco の条を見よ)」と注記を付して-eõ の条を参照するよう促していることから、-iõ と-eõ の条は、なんらかの小異を意識して別個に標出されたことが窺える。ところが同じ見出し語でも、語中・語末に開拗長音をもつものは、-iõ と-eõ の二表記で標出されるものが少なく、(8) のように、-eõ でしか出現しない例が少くない。

(8) Catbeõ (渴病), Iireõ (寺領), Sanreõ (山梁), Saireõ (宰領), Xitmeõ (失命),
Xufeõ (衆評), Zocumeõ (俗名)

このように-eõ でしか現れない語は辞書中 51 語を数え、うち語中・語末に-eõ の現れる例が 37 語を占める。これらは辞書中、A 部～X 部までの各部で不規則に出現しており、一見すると、語頭-eõ での慎重な扱いに反するようにさえ見える。

こうした不規則な-eõ の出現は、見出し語だけでなく、(9) - (11) のような説明文 (見出し語以外の箇所) の総称) においても処々に認められる。

(9) a. -eõ を含む見出し語を用いた例文中 [15 語]

Xenmeõuo fucumuru. (宣命を含む) (「Xenmeõ (宣命)」)

b. -eõ を含まない見出し語を用いた例文中 [21 語]

Fonreõni nauoru. (本領に直る) (「Nauori, u, otta (直り, る, つた)」)

(10) 「Vide, (～を見よ)」 「i. (～に同じ)」 などの注記中 [8 語]

i. Meõgonichi (明後日に同じ) (「Asatte (明後日)」)

(11) ポルトガル語の説明文 [6 語]

Fazer a armação da porta de papel, ou dos Beõbus, de canas, ou paos, &c. (竹や木をもって、紙の戸や屏風 (Beõbus) などの骨組を作る)

(「Voritade, tçuru, eta (織・折り立て, つる, てた)」)

これらの中には、(9b) Fonreõ (本領), (10) Meõgonichi (明後日) のように、見出し語には-iõ で記されている語が、突如、-eõ の表記で現れる場合もある。これらもまた、辞書各部での出現には規則性が見出せないものである。

すなわち-eõ は、見出し語の語頭では-iõ と意識的に対応させて慎重に扱われているのに対し、それ以外の箇所では特段の扱いがなく、A 部～X 部の各部で不規則に出現するという、一見相反するような様相を呈していることになる。

2. 2 例言内容

『日葡辞書』の例言（「この辞書を使用し理解するために必要な若干の例言」）第4条では、こうした*-iō*と*-eō*の二表記を採用した理由を、次のように説明する。

- (12) ^[i] Fiörö (兵糧), Meōji (名字) などのように長音調 [すなわち開拗長音] をもっている語では、われわれはこれらの第一音節を E 字または I 字で書くことにする。 また、*Fiô* (豹), *Qiô* (興) などのように短音調 [すなわち合拗長音] をもっている語でも、同様にする。それは次のような理由にもとづく。すなわち ^[ii] 仮名 (Cana) 文字では一方 [開拗長音] を Fiau (ひやう) と書き、他方 [合拗長音] は Feu (へう) と書くけれども、実際の発音においては、I 字よりも E 字の方に近いとかいうわけではない。 ^[iii] かえって上衆 (Camixüs) の発音によれば、Fiörö (兵糧), Fiögacu (兵革) などのように長音調をもっている語は、[I 字よりも] むしろ E 字で書き表わすことができる。 そして *Fiô* (豹), *Qiô* (興) などのように短音調をもっている語は、I 音を用いて *Qiô* と発音する方が、*Qeô* と発音するよりもすぐれているからである。しかし仮名 (Cana) による表記法に従って E 字で書くことも一般に行われているので、われわれは本書で、これらの語をば E 字でも I 字でも表記している。それで、この類の或る語が E 字で書かれたものの中に見つからない時は、I 字で書かれたものの中に求め、逆に I 字の所になければ E 字で探せばよい。たとえば、*Meōji* か *Miōji* (名字)、あるいは、*Riōchi* か *Reōchi* (領地) を見ればよい。

(『邦訳』5頁、編者注は一部省略、稿者注を [] で補入した)

傍線部を要約すると、*-iō* は「イ段の仮名+やう」という仮名遣いに即した表記であり、*-eō* は上衆の発音を反映した表音表記であるということになる。ただ、記述からはこのように捉えられても、*-iō* が仮名遣いしか反映せず、表音性をまったく備えていないとは考えられないので、実際は *-iō* も「ひやう」「みやう」のような表記に近いイ段音の発音を備えていると想定する必要がある。それゆえ、*-eō* はイ段音の発音に背馳する表音表記として採用されたと考えられる。

さて傍線部 ^[iii] の記述によれば、「兵糧」「兵革」などの語は、上衆の発音により「むしろ E 字で書き表わすことができる (mais se podem escreuer com E)」とある。*Feörö*, *Fiögacu* のように e で表せるのであるから、その発音はエ段音に聞こえたとは解さねばならない。しかし諸先学が既に指摘するように、開拗長音がエ段音に聞こえたという記述は、キリシタン資料の諸文典類には見えず、『日葡辞書』でも当該個所以外に言及した部分が見当たらない。また仮にエ段音に聞こえたのならば、和文資料でも「へやう」のようなエ段

表記が現れてもおかしくないはずだが、迫野（1968）で明らかなように開拗長音は「イ段の仮名+やう」と記すのが中古以降の慣例であって、エ段の仮名はほとんど現れないのが実情である。

したがってこの *-eō* に関する記述は、先行研究（亀井 1973, 土井 1934・1942）でも不可解な内容として疑問視されてきた。土井忠生氏は、上記の「E 字」をアルファベットではなく「エ段の仮名」と推定したものの、エ段の仮名を書くのは合音に限られるため、「開合を通じて E 字でも書いた理由に就いての説明は、合理的だとは言へない」（1942 : 78）と述べ、解釈を保留している。

しかし森田武氏は、このような記述がなされた要因は、「例言が辞書本体の成った後に書かれたからで、その時点では、本文に *~iō*, *~eō* が混在している事実を容認せざるを得ず、それが編纂当初からの方針であったように書かねばならなかったからである。」

（1993 : 191）と述べて、上記の例言は本篇編纂後に付された妥協的な記述に過ぎないと判断し、『日葡辞書』内部に *-eō*・*-iō* を同音異表記とみなしうる諸点があることを、独自の観点から指摘した。

次節ではこの森田氏の論拠を中心に先行研究を整理し、続いてそれらの問題点を指摘する。

3. 先行研究——同音異表記説——

3.1 森田（1955・1980・1993）

まず森田（1955 : 30, 1993 : 183）は、*-eō* が、合拗長音表記「*-eō*」の頻用に引かれて生じたと推定する。なぜなら *-eō* と *-eō* では使用する頭子音が一致しており、*beō*, *feō*, *meō*, *qeō*, *reō* に対応するような *beō*, *feō*, *meō*, *qeō*, *reō* はあっても、ごく稀にしか用いられない *teō*, *deō*, *neō* に対応するような *teō*, *deō*, *neō* は見出されないことを根拠とする（森田 1955 : 30）。

そして、この *-eō*（異例表記）と *-iō*（本則表記）の間に音声差を認められない理由として、*e* と *i* を通用するポルトガル語の表記慣習の影響を指摘する¹⁸（1955 : 30, 大塚 1982 : 9 も同様）。当時のポルトガル語綴字では、頻繁に *i* と *e* を交替することが知られており、実際、『日葡』にも *ceremonias*（「Butji」）と *cerimonias*（「Fôfei」）、*Menino*（「Acago」）と *Minino*（「Varabe」）のように、同語の同位置で *i*~*e* 交替を生じている例が確認できる（1955 : 30）。また写本類での日本語綴字では、*Meaco*（都）、*Cameguio*（上京）のよう

¹⁸ 高羽（1950 : 20）も『サントスの御作業』（1591年）の *-iō*・*-eō* について、同様の解釈を示している。

に本来 i とあるべき箇所を e と表記した例が少なくないことから (1980 : 851), 異例表記の -eõ も, -iõ の i を e と表記上交替させただけの同音異表記にすぎないという解釈が導かれている。

この解釈は一方で, 拗短音の i~e 交替例についても考慮されている。『日葡辞書』の見出し語には, 次のように, 本来 -io・-ia とあるべきオ段・ア段拗短音を, -eo・-ea と記した不可解な例が点在する。

(13) Guireo (疑慮), Qeogon (虚言)

(14) Ximeacu (死脈), Soreacu. l, soriacu (疎略)

これらも, -iõ ~-eõ と同じく, 同語の同位置で i を e と交替させている。キリシタン資料では「同語と認定される語の同一箇所に使われている (複数の) 表記は「同音異表記」とであると一応考えられる」(丸山 1991 : 1) ことから, これらも i~e 交替による同音異表記と理解することで, 拗音における問題を統一的に解釈しているのである。

さらに森田は, 同語を -iõ と -eõ の両方で表記した例が少なくないという事実そのものを, 同音異表記の根拠とする。既述の通り, 『日葡辞書』では「Fiõxi. l, Feõxi (拍子)」のように, 「l, (または)」で二表記を標出したものが少なくないが, これらが「Anju, l, anzu (庵主)」のような同義異形の例と類を異にすることは, 次の「Ten」における例文から察せられると指摘する (1980 : 850)。

(15) また, シナの文字 [漢字] の下部に, その読み方を示すために付けるしるし, または, Catacana (片仮名) と呼ばれる文字. 例, Cono goua reõtenni yomu. l. riõtenga aru. (この語は両点に読む, または, 両点がある) この文章は二様に読まれる, あるいは, この文章にはある一つの読み方もできれば, 別の読み方もできるように, 二つのしるしが付いている. (「Ten (点)」)

(15) の「Ten (点)」の条の例文では, 「l, 」を挟んで一文中に reõten と riõten が並置されている。ni yomu (に読む) と ga aru (がある) 以外に差異を示すべきではない例文で reõten と riõten を使用しているということは, 両者に区別を設けていないためと考えられ, 同音異表記の証左ともなり得るものである。

以上を概括すれば, -eõ は, ポルトガル語の i~e 交替の表記慣習を支えとしつつ, -eõ の頻用に引かれて成立した, -iõ の同音異表記にすぎないという解釈が提示されている。

3.2 問題点

以上の解釈には、次のような問題点がある。

まずポルトガル語の i~e 交替表記が影響したと想定することの問題点は、『日葡辞書』内の日本語の直音の例には、この影響が現れていないという点である。『日葡辞書』では、直音の i と e が截然と分かたれていて、無秩序に混じることがない。同語の同位置で i と e が交替する例はあるものの、次のように各語を明確に区別して、見出し語でも別条に掲げている。

(16) a. **Igue** (いげ) 棘. No Cami se diz, Igui. (上では Igui と言う)

b. **Igui** (いぎ) 棘. No Ximo, Igue. (下では Igue と言う)

(17) a. **Tçucare** (つかれ) 狩の際に、飛び立った鳥、たとえば、雉などが第二番目に止まって休息する所。 Posto que algũa gente popular diga, Tçucari (ただし、一部の庶民は Tçucari と言う)

b. **Tçucari** (つかり) Vide, Tçucare. (Tçucare の条を見よ)

同じく別条に掲げられた「Reõco」「Riõco」が i~e 交替による同音異表記であるならば(前掲(7)参照)、上記の例もまた同音異表記と解釈せねばならず、これらの記述に矛盾が生じる。

さらに直音では、「l」を用いた例でも同語の同位置で i と e を交替する例がある。

(18) **Tçuzzure. l, tçuzzuri** (襤褸) 古びたぼろ布、または、ひどく修理してある着物。

(19) **Yonagari. l, yonagare** (夜ながり・夜ながれ) 仕事をする人々が夜食をすること。

これら二形が異なることを辞書記述から証することは難しいが、ツズレ・ツズリ、ヨナガリ・ヨナガレは現代諸方言でも両形が残っていることから¹⁹、やはり「l」で挙げられた二形は、異なる発音形を挙げていると判断すべきであろう。

こうした直音の例を除外すると、同語かつ同位置での i~e 交替例は、開拗長音(-iõ / -eõ)、合拗長音(-eõ / -iõ)、オ段拗短音(-io / -eo)、ア段拗短音(-ia / -ea)といった拗音の例に

¹⁹ 『日国第二版』でも「つづれ」「つづり」は別個に立項され、それぞれ平安時代後期からの用例が挙げられている。「よながれ」「よながり」もそれぞれが日本語諸方言に存在することが記されている。

大きく偏る (6.2 節に詳述)。圧倒的に音節数の多い直音ではなく、わずかな拗音でしか i ~e 交替が生じていないという特徴は、明らかに不自然に見える。仮にポルトガル語の影響があったとしても、それが拗音にだけ現れているとは考えにくく、むしろ以上からすれば i~e 交替は日本語の拗音と深く関わった問題として捉えるべきではないだろうか²⁰。

さらに、同音異表記の証左として挙げられた例文 (15) にも留意すべき点がある。(15) は同文が補遺に再録されており、そこでは次のように修正されている。

- (20) [前略] 例, Cono goua reöten ni yomu, l, reötenga aru. (この語は両点に読む, または, 両点がある) この語句は, 同じ意味をもっていながら, 二様に読むことができる. (「Reöten. l, Riöten* (両点)」)

この (20) では、「両点」が両方とも reöten に揃えられている。これにより、「l」で取り立てられているのが ni yomu と ga aru であることが、より一層明確になっている。両者を比較する限り、(20) の方が正確な例文であるのは疑いがない。このように述部の差を示す目的の例文では、述部以外の表記は変えないのが原則だからである。したがって前掲 (15) が reöten と riöten の差異まで含んでいるのは編集か印刷上の過失と言わねばならず、おそらく『日葡辞書』では、その過失に気付いたために、補遺では (20) のように修正したのではないだろうか。(20) の見出し語にあえて -iö と -eö の二形を掲げたのも、両者に差異があることを明示する目的であったかと思われる。

以上の諸点を踏まえると、-eö と -iö は、表記上の影響関係よりも、「拗音」という単位——すなわち音節を単位として、音声的な側面から分析を行う方法が有効と考えられる。-eö が上衆の発音に基づくという例言の記述 (前掲 (12)) も、-eö が音声的要因から生じていることを示唆するものと推測されるからである。

よって以下では、-iö と -eö を音節頭子音別に分析し、その結果を拗音の特質に沿った形で解釈することとする。

²⁰ なお 16-17 世紀のポルトガル語文献にみえる i~e 交替の表記については、同化、異化、類推、あるいは特定の語といった個々の語に関わる現象であって体系全体の問題ではないという指摘があり (Teysser1980: 76, 池上 1984: 124), 森田 (1955: 30) が举例した *Ceremonias - Cerimonias, Menino - Minino* の例も同化の例といえる。また 16 世紀ポルトガル語の e の音価は [i] ではないかという考え方については、池上 (1984: 124-125) が、現代ヨーロッパの標準ポルトガル語やブラジルのポルトガル語の変化過程からみて困難な想定であることを指摘していることから、-eö の e も [i] だとは考えにくい。

4. 調査結果

4.1 『日葡辞書』

『日葡辞書』の *-iõ*・*-eõ* を音節頭子音別に分類したのが【表 3】である。

【表 3】『日葡辞書』の開拗長音の頭子音別分類表

		b- びやう	f- ひやう	g		m- みやう	p- びやう	q- きやう	r- りやう	合計
				gu- ぎやう	g- ぢやう					
-eõ	本篇	6(10)	35(7)	0	0	11(9)	0	7(2)	21(12)	80(40)
	補遺	0	2(0)	0	0	9(4)	0	0	15(6)	26(10)
-iõ	本篇	82(46)	43(19)	104(85)	70(34)	79(62)	1(2)	135(107)	125(62)	639(417)
	補遺	6(2)	7(2)	15(10)	11(3)	12(6)	0	28(17)	27(5)	106(45)
総音節数		152	115	214	118	192	3	296	273	1363

※注「見出し語（説明文）」の形式で音節数を表示。

【表 3】から明らかなのは、異例表記の *-eõ* が、本篇・補遺ともに *gu-*、*g-*、*p-* には一例も存在せず、出現は、*b-*、*f-*、*m-*、*q-*、*r-* の 5 つの頭子音に限られているということである。

p- に *-eõ* がないのは *p* 行の語彙が少ない (*Sanpiõxi* [三拍子] 1 語 3 音節のみ) という語彙数の問題であるため考察からは除外するが、*gu-*、*g-* は次のように全音節を *-iõ* で表記する点で徹底している。

(21) *gu-* : 行, 形, 敬, 卿, 経, 仰, 京

*Aiguiõ** (愛敬), *Cuguiõ* (公卿), *Fanguiõ* (判形), *Fonguiõ* (本経), *Guiõgui* (行儀)

(22) *g-* : 場, 定, 丈, 杖, 夜, 長, 貞, 丁, 張, 錠, 頂²¹

Chicuguiõ (竹杖), *Giõya* (長夜), *Fitgiõ* (必定), *Giõbu* (丈夫), *Xengiõ* (戦場)

このように全体を通して *geõ* や *gueõ* が皆無であるということは、当然のことながら、*G* 部では、語頭が *-eõ* の *Geõ-* や *Gueõ-* が収載されていないことを含意する。

この事実については、すでに森田 (1993) に言及がある。氏は、各部の見出し語を調査した結果、才段拗長音表記が本篇 *F*~*G* 部間で著しく異なることを、次のように指摘した。

本篇 *F* 部では、「*Feõban. l*, *fiõban* (評判)」、「*Feõ. l*, *fiõ* (豹)」のように、開・合拗長音ともに *-iõ* と *-eõ*、*-eõ* と *-iõ* の二形を「*l*,」で並置する例が頻出する。ところが隣接する *G* 部では、語頭 *G* の開拗長音に *-eõ* が一例もなく、また合拗長音でも、語頭が *Gueõ-* の条には (1 例を除き)「*Gueõtai* (凝滞) *Vide*, *Guiõtai* (凝滞の条を見よ)」と参照注記のみ

²¹ *Dogiõ* (鱸) のような、音節と漢字が一致しない例については、以下、漢字の挙例を省略する。

を付して語義説明は*-iô*の条に付すという、全体として*-io* (*-iö*・*-iô*) 重視の方針をとる (1993 : 179-180)。本篇 F~G 部間では複数の表記事項が転換していることから、このオ段拗長音表記も辞書編纂過程での転機を示す一事例であり (1993 : 256-257)、また上記のように標出形式が異なるのは、F 部と G 部が異なる見解をもつ別人の手によって処理されたためとみなせる (1993 : 231-232)。

しかし【表 3】を考慮すると、辞書全体で *geö*, *gueö* が皆無なのであるから、本篇 G 部では、規範上にはない *Geö-*, *Gueö-* を収める必要がなかっただけにすぎず、収載は、部担当者の個人的裁量とは直接関係がなかったことがわかる。G 部の合拗長音に *Geô-* がなく、*Gueô-* がごく僅かであるのも同理由である。『日葡辞書』の合拗長音表記 *-iô* の割合は、*giô* が 100%、*guiô* が約 80% を占める (竹村 2011 : 62, 第 3 章 5.1.1 節参照)。もとより *geô* がなく、*gueô* の総音節数自体も少ないのであるから、G 部に語頭 *-eô* の語が乏しいのも必然の結果であるといえる。

また、*-eö* の出現が音節頭子音により決定しているということは、*-eö* が綴字の問題ではなく、音声の問題であることを示している。よって本篇 F~G 部間での *-eö* の著しい出現差は、音声的に *-eö* の頻出する頭子音 (F) と出現しない頭子音 (G) が隣接したという、アルファベットの配列に起因しているとみる方が穏当であろう²²。

このように *-eö* が音声の問題であるとする、森田氏自身が指摘した局所性の問題点、つまり本篇 F~G 部間の見出し語の標出差があくまで局所的であって、F 部以前、G 部以降が同じ標出形式で貫かれているわけではないという問題点 (森田 1993 : 238) も解決できる。本篇では、見出し語に *-eö* がない G 部直後の I 部でも「*Imeö* (異名)」「*Iqireö* (生霊)」のように *-eö* が現れ、かなり後方の X 部でも「*Xeiriöden. l, xeireöden* (清涼殿)」のように F 部と同じく「l」を用いた見出し語が出現する。しかしその要因は、*-eö* が音節頭子音の差に基づいて出現しているという事実によって解消される。また、前掲 (8) の「*Catbeö* (渴病)」「*Iireö* (寺領)」のように、辞書各部で *-eö* が不規則に出現しているように見えたのも、実際は、*b-*, *f-*, *m-*, *q-*, *r-* の 5 つの音節頭子音による規則的な出現であると理解できることになる。

ただし、*-eö* が現れる 5 つの頭子音 (*b-*, *f-*, *m-*, *q-*, *r-*) の中でも、*-eö* は均質的に現れず、*q-* にだけは極めて少ないという特異性がある。

²² ただしこの結果を以て本篇 F~G 部間に編纂上の転換があったことを完全に否定するものではない。オ段拗長音に関する限り、本篇 F~G 部間には、印刷・編纂上の転換が関与していないと言うにとどまる。

【表 4】 本篇各部における音節頭子音別出現分布 (※「/」の左は見出し語, 右は説明文の音節数)

\部	A	B	C	D	F	G	I	M	N	Q	R	S	T	V	X	Y	Z
beõ	1/1	1/	3/1			/1		1/					1/	/5	/1		
biõ	1/4	28/9	3/8	1/2	3/2	4/3	/1	5/1	2/	2/	8/	3/4	6/3	4/5	9/3	1/1	2/
feõ					34/6								/1		1/		
fiõ	2/1	1	1/4	1	35/9				2/	/2		/2	/1				1/
meõ	/2						1/	5/1		/1			1/	/2	3/3		1/
miõ	1/4	1/2	3/4	2/1	4/7	1/1	6/3	46/19	/2	5/6	/1	2/1	2/4	/1	5/5	1/1	
qeõ										7/2							
qiõ	2/2	5/4	9/13	1/3	5/15	7/5	7/8	6/8	1/3	68/20	1/1	4/8	2/7	2/3	9/5	3/1	3/1
reõ	/1	3/1	/2	1/	1/1		2/		/1		9/4	2/	/1	1/	2/1		
riõ	2/2	3/4	3/10	1/	4/3	6/2	5/4	8/2	2/	3/3	68/18	5/4	3/4	2/3	10/3		
-eõ	1/4	4/1	3/3	1/0	35/7	0/1	3/0	6/1	0/1	7/3	9/4	2/0	1/3	1/7	5/5		1/0
-iõ	8/13	38/19	19/39	6/6	51/36	18/11	18/16	65/30	7/5	78/31	77/20	14/19	13/19	8/12	33/16	5/3	6/1

【表 5】 補遺各部における音節頭子音別出現分布 (※注【表 4】に同じ)

\部	A	B	C	D	F	G	I	M	N	Q	R	S	T	V	X	Y	Z
beõ					/1	2/					/1		1/	2/			
biõ		1/															
feõ					1/		1/										
fiõ		/1	1/		6/1												
meõ	/1		/1	1/		/1		4/1				1/			2/	1/	
miõ				1/				9/4					1/1		1/1		
qeõ			3/1	1/	3/1		2/1		/1	10/3	1/2	/1		1/	5/4	1/1	1/2
qiõ																	
reõ			2/		1/	2/	5/1	1/			3/4	1/			/1		
riõ		1/	/1			1/				1/	22/3	1/			1/1		
-eõ	0/1		2/1	1/0	2/0	2/1	6/1	5/1			3/4	2/0			2/1	1/0	
-iõ		2/1	4/2	2/0	9/3	3/0	2/1	9/4	0/1	11/3	23/6	1/1	2/1	3/0	7/6	1/1	1/2

本篇・補遺各部での-iõ・-eõの分布表(【表 4】【表 5】)を参照すると, qeõの全9音節(見出し語7, 説明文2)は, 本篇Q部にしか存在しないことがわかる。qeõは, 見出し語と説明文を合わせて, 次の7語のみである。

(23) a. 見出し語:

Qeõcõ (向後), Qeõcocu (頃刻), Qeõfai (敬拝), Qeõguiõ (経教), Qeõguiõ (経々), Qeõcot (軽忽), Qeõri (郷里)

b. 説明文:

Qeõcotna cotouo yũ. (軽忽なことを言ふ) (「Qeõcot (軽忽)」)
Qeõriuo saru. (郷里を去る) (「Qeõri (郷里)」)

全用例がQ部に採録されていることから自明ではあるが, 語内部でのqeõの生起位置は, すべて語頭に偏っている。これは他の頭子音のbeõ, feõ, meõ, reõが, 語頭に限らず語中・語末でも生起し, 複数の部にわたって出現するのと相違する²³。以下に, 見出し語の

²³ 補遺にbeõが無いのはバ行の総音節数の少なさ(全8例)に起因しており, qeõが現れなかったのと

代表例を挙げる。

(24) beö [7 語 16 音節] : 拍, 病, 屏

a. 見出し語 :

Axibeöxi (足拍子), Beöqi (病気), Canbeö. 1, cabeö* (看病), Macurabeöbu (枕
屏風)

b. 説明文 :

Aqino nono beöbu. (秋の野の屏風) (「Aqinono (秋の野)」)
xöröbeöxi (生老病死) (「Xörö (生老)」),

(25) feö [32 語 44 音節] : 評, 兵, 拍, 平, 狂

a. 見出し語 :

Feöban. 1, Fiöban (評判), Feögu. 1, fiögu (兵具), Fiödo. 1, feödo (ひやうど),
Fiögiö. 1, feögiö (平調), Fiömon. 1, feömon (狂文), IFeögiö* (医評定)

b. 説明文 :

Zöfeödomo ranno toqi monouo tçucami toru. (雑兵共乱の時物を掴み取る)
(「tçucami, u, öda (掴み, む, うだ)」)

(26) meö [17 語 33 音節] : 明, 名, 冥, 猛, 命

a. 見出し語 :

Daiquömeö* (大光明), Imeö (異名), Meöchö (名帳), Meögan (明眼), Meö
meö (冥々), Meöyen* (猛炎), Tamiö. 1, tameöji (他名・他名字), Xucumeötçü*
(宿命通), Yenmeö* (円明)

b. 説明文 :

Vchidori cömeö xite. (打取り高名して) (「Vchidori (打取り)」)
Qiocuchocu funmeö.²⁴ (曲直分明) (「Chocu* (直)」)

(27) reö [42 語 54 音節] : 両, 領, 寮, 量, 靈, 稜, 涼, 鈴, 苓

a. 見出し語 :

Bucureö (茯苓), Döreö (納涼), Füreö. 1, furiö (風鈴), Guenreö (限量), Iqireö
(生靈), Reöju. 1, Riöju (領主), Reöxu (両種), Saireö (宰領), Sanreö* (三稜),

は別要因とみるべきであろう。

²⁴ 『天草版金句集』533頁からの引用部分である (『邦訳』126頁の注記参照)。

Vonreō (怨霊)

b. 説明文：

Iyeno sōreō. (家の惣領) (「Cachacu (家嫡)」)

Reōginno inudomouo ichinifiacqizutçū fanachi auaxetareba, &c. (兩陣の犬どもを一二百騎宛放ち合はせれば、云々)

(「Fanachi, tçu, atta (放ち、つ、つた)」)

用例をみる限り、-eō には特定の漢字に偏る傾向はないことから、-eō は漢字ではなく、音節の問題として扱うべきものと思われる。

また音節数で見ると、「きやう (q-)」は全 296 音節あり、開拗長音の各行の中で最も用例数が多い。本来ならば全体数に比例して-eō の用例数が得られるべきところ、逆に僅少であるということは、-eō の低い生起率が q- という頭子音の性質に起因し、制限を受けていることを予測させる。

以上の『日葡辞書』での分布結果をまとめると、異例表記の-eō は、gu-, g-, p- には出現せず、q- には乏しく、b-, f-, m-, r- に頻出していることになる。

4.2 他のローマ字本キリシタン資料

前節の『日葡辞書』に見られた -eō の頭子音別出現分布は、他のキリシタン資料においても同様に確認できる。『日葡辞書』前後に刊行されたキリシタン資料での-iō・-eō を整理したものが、【表 7】である (具体的な資料名は稿末記載)。

【表 7】 他のローマ字本キリシタン資料における-eō・-iō の頭子音別分布

刊行年	資料番号	書名(略称)	-eō						-iō							
			b-	f-	m-	r-	q- qu- k-	gu- gh-	g-	b-	f-	m-	r-	q- qu- k-	gu- gh-	g-
1591	A	サントス	2	2	2	13			72	17	92	147	252	128	60	
1592	B	ヒイデス		1	2	2			32	13	66	90	188	178	33	
	C	平家物語		1					84	34	77	62	179	76	51	
1593	D	伊曾保物語				1			14	5	7	14	13	12	9	
1595	E	羅葡日辞書	3	3	10	25	4		106	55	172	147	259	213	105	
1604-08	F	日本大文典	5		6	6	2		15	33	78	59	115	52	53	
1607	G	スピリツアル			3	3	1		45	4	50	39	82	129	17	
1620	H	日本小文典						1	8	8	30	9	21	11	4	
合計			10	7	23	50	6	1	0	376	169	572	567	1109	799	332

注 1 カ・ガ行を、資料 F では quiō・guiō、資料 H では kiō・ghiō と表記するが、qiō・guiō と同様に扱った。他資料においても quiō の例については、qiō と同様に採集した。

注 2 p- は発音の例示表記として 資料 F に piō1 例が現れるだけなので、統計では省いた。

注 3 資料 A・B・C・D では、目録と言葉の和らげも調査範囲に含めた。

注 4 調査資料のうち、『ドチリナ』(1592, 1600 年), 『金句集』(1593 年), 『コンテムツス』(1596 年), 『懺悔録』(1632 年) には-eō が存在しなかったため、表から除外した。

8 資料中 6 資料 (A, B, C, D²⁵, F, G) において, -eō は b-, f-, m-, r- の 4 頭子音に大きく偏って出現するという、『日葡辞書』と等しい結果が現れている。E『羅葡日辞書』では feō より qeō が 1 例多いが, feō が開拗長音 58 音節中の 3 音節であるのに対し, qeō は 263 音節中の 4 音節であることから, 相対的にみれば f- の出現頻度の方が高いといえよう。

これらと『日葡辞書』とのわずかな相違は, gu- の -eō に相当する gheō が出現する点と, qeō の非語頭例が現れる点である。管見の限りでは, gheō は, 「西行」を綴ったかと思われる (28) 「Sagheō」のみ, qeō の非語頭例は, (29a) 「Sôqueō」(崇敬, F『日本大文典』巻二 94v), (29b) 「Inqueō Tenvō」(允恭天皇, 同巻三 236v) のみである。

(28) Sagheō, vidas de seus Ermitaēs (「作業 (さげふ) —— 隠遁者たちの一代記」

(H『日本小文典』巻三 74v, 日埜邦訳: 237 頁)

(29) a. Vareyori xitano mononi sôqueō xerareô yorimo camitaru fitoni isameraruru cotouo yoroconde majiuaru nasu. Esopo. (我より下の者に崇敬せられうよりも上たる人に諫めらるる事を喜んで交りをなす。「伊曾保²⁶」) (F『日本大文典』巻二, 94v)

その他の qeō は, qeōcō (向後, E『羅葡日辞書』191 右頁「Dehinc」他), qeōqi (狂気, E『羅葡日辞書』77 右頁「Stupeo」), qeōcocu (頃刻, G『スピリツアル』341 ウ) の 5 音節 3 語であり、『日葡辞書』と等しく語頭に偏っている。しかしこうした小異はあるにせよ, 大方の分布は『日葡辞書』と等しいものであって, qeō はごく稀で, gueō (または gheō) はほぼ皆無に近く, g- には -iō しか現れず, -eō は b-, f-, m-, r- に頻出するという結果が現れている。

A『サントス』や B『平家物語』では q- の, G『スピリツアル』では gu- の総音節数が各行の中で最多であるにもかかわらず -eō が出現しないことから, やはり -eō は総音節数に比例するのではなく, 頭子音によって多寡が決定していると考えられる。それを証するよように, b-, f-, m-, r- では総音節数が 20 未満の場合にも -eō が出現しており, うち b-, m-, r- には, 次のように『日葡辞書』に採録されていない -eō の語も見える (以下, 資料名は資料記号で表記)。

²⁵ 阪田 (1955: 35) は、『伊曾保物語』の reō1 例を, 開合の混乱により合拗長音 reō に引かれた誤植とみている。

²⁶ この「Sôqueō」を含む一文は, D『伊曾保物語』(438 頁 16-18 行目) からの引用である。引用元では, 「Sôqiō」となっている。

(30) beōja (病者, E199), Feibeōyenjō (平兵衛尉, F208 才), mubeō (無病, E360),
vocubeō (臆病, E459), xubeō (衆病, A I 127)

(31) Acumeō (悪名, E341), gojumeō (御寿命, A II 57), Meōmon (名聞, B 和らげ「Miōri」)

(32) Cōreō (虹梁, E97), qireō (器量, A II 15), Qereō (仮令, E667), reōque (領
家, F146 ウ), reōxō (良将, A II 47)

これらも、-eō の生起位置には特に制限がない。仮に、印刷や編纂上の過誤から生じて
いれば、-eō の出現分布は各資料で異なるはずである。しかしキリシタン資料全体で出現・
多寡が音節頭子音に基づいているということは、-eō が、共通した音声的要因により記さ
れたことを示しているとみてよいと思われる。

5. 解釈

5.1 -eō 出現の音声的要因

では-eō の出現に関わった音声的要因とは、具体的に何なのか。開拗長音が、いわば「拗
音」という硬口蓋化した音節であり、その発音に基づいて-eō が記されたことを考えると、
その要因には硬口蓋化を想定するのが適当と思われる。

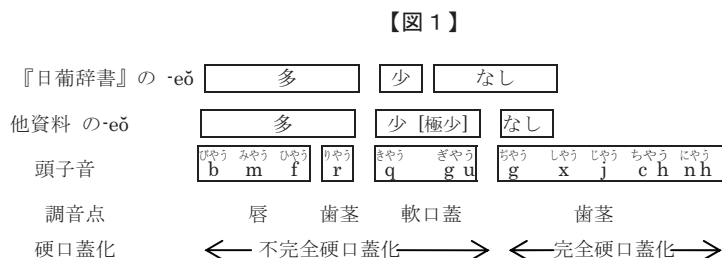
硬口蓋化とは、非硬口蓋子音を調音する際、隣接する[i] や[j] の影響により、前舌面が
副次的に硬口蓋方向へ持ちあがる同化現象を指す。この硬口蓋化には、子音の主要調音点
を変更する例と、主要調音点は変えずに硬口蓋調音を副次的に付加する例の二種があるこ
とが知られている (Bhat1978, Lahiri and Evers1991, Bateman2007・2011 他)。多数
の言語において、前者には歯音・歯茎音が、後者には唇音と軟口蓋音が相当する (Lahiri and
Evers1991 : 95-96)。神山 (1995) も現代日本語の拗音にこの二種の硬口蓋化があること
を指摘しており、前者の硬口蓋化を「(完全) 硬口蓋化」、後者の硬口蓋化を「(不完全) 硬
口蓋化」と称して区別する²⁷。

両者は、次のように調音が異なる。唇音[b] [m] [p], 軟口蓋音[k] [g], ラ行歯茎音[r]では、
主要調音点を保持したまま前舌面を硬口蓋へ接近させて、[b] [m] [p] [k] [g] [r]と副次的
に硬口蓋化するのに対し (不完全硬口蓋化)、歯茎音の[t] [d] [z] [n] [s]ではさらに硬口蓋化
が加わる結果、前舌面が硬口蓋に接近または接触して元の調音点との接触が失われ、主要
調音点が硬口蓋歯茎音・硬口蓋音 [tʃ] [dʒ] [ʒ] [ɲ] [ʃ] へと完全に移動する (完全硬口

²⁷ 以下、硬口蓋化二種の区別を明示的にするため「不完全」「完全」の「()」を外して用いる。なお
この二種を区別する名称は諸氏によって異なり、神保 (1933 : 40-41) では、カ・ガ・ナ・パ・バ・マ・
ラ・ハ行の拗音 (不完全硬口蓋化の類) を「甲音」、サ・タ・ザ行の拗音 (完全硬口蓋化の類) を「丙音」
と仮称している。

蓋化) (神山 1995 : 79-81, 148-149)。

中世日本語にもこの二種があったと仮定して $-e\ddot{o}$ の分布と対応させると, 【図 1】 のように, 両者には相関性のあることが明らかになる。



$-e\ddot{o}$ は, 唇音 (b, m, f), ラ行歯茎音 (r), 軟口蓋音 (q, 『日葡辞書』以外では gu も) という, 不完全硬口蓋化を生じる頭子音にのみ出現し, 他方, 完全硬口蓋化を生じる歯茎音 (g, x, j, ch, nh) には, 全く出現していないことが了解される。

さらに上記の分布は, 次のように表記数の分布とも一致する。

- (33) a. 二表記あり ($-i\ddot{o}$ と $-e\ddot{o}$) : b-, m-, f-, r-, q- (一部では gu- も)
 b. 一表記のみ ($-i\ddot{o}$ か $-\ddot{o}$) : g-, x-, j-, ch-, nh-

不完全硬口蓋化を生じる頭子音には二表記が現れるが (33a), 完全硬口蓋化を生じる頭子音には一表記しか現れない (33b)。この対応関係は, 綴字が硬口蓋化という音声上の実態を基盤にしていることを窺わせる。具体的にいえば, (33a) では不完全硬口蓋化により二通りにゆれて聞こえたために二表記が採られたのに対し, (33b) では完全硬口蓋化によりゆれて聞こえなかったために, 一表記しか採られなかったと推定されるのである。

以上の観点からすれば, ダ行の g- に $-i\ddot{o}$ の一表記しか現れない理由は, サ・ザ・タ・ナ行と同じ歯茎音であることに求められる。ダ行は, $-i\ddot{o}$ という表記形式をとるため, これまで $bi\ddot{o}$, $mi\ddot{o}$ と同類のように扱われてきた。しかし調音上の分類からみれば, x-, j-, ch-, nh- と同じ歯茎音であって, これらと調音的特徴を等しくする故に, 一表記しか備えていないと理解できるのである。

5.2 $-e\ddot{o}$ の出現と多寡の要因

既述の通り, $-e\ddot{o}$ は不完全硬口蓋化を生じる頭子音 (b-, m-, f-, r-, q-) にのみ生じ, その中でも唇音 (b-, m-, f-) と軟口蓋音 (q-) ではその出現数に多寡があった。こうした $-e\ddot{o}$ の出現・多寡の要因を説明するには, 前舌の関与の差を想定する必要があると考える。

-eō の現れる頭子音は、大半が、非前舌子音 (noncoronal consonants) に相当する²⁸。これらの子音では前舌が主要調音に関与しないため、硬口蓋化の際にも、前舌に一定の動く余裕がある。したがって個人の癖や発話によっては、前舌が低い状態で発音されることがまあり、それがイ段音よりもエ段音に近く聞こえ、Feōrō (兵糧), Meōji (名字) のような -eō で記される要因になったと考えられる²⁹。

ただし、同じ非前舌子音でも、唇音と軟口蓋音では前舌の動く余裕に差があり、それが -eō の多寡に関与していると推定される。唇音の場合、主要調音は唇で行われるため、前舌の自由度は各頭子音の中で最も大きい。そのため、前舌が下がる状態も生じやすく、-eō の発音も頻発したものと考えられる。他方、軟口蓋音では、奥舌と軟口蓋で閉鎖を作って調音するため、舌の後方が制限を受ける分、前舌の自由度も唇音より相対的に小さい。よって -eō の発音もわずかな例に止まったものと推測される³⁰。なお完全硬口蓋化を生じる歯茎音 (g-, x-, j-, ch-, nh-) は、前舌そのものを用いて調音するため、硬口蓋化の際にも前舌は下ならず、-eō の発音が生じることはない³¹。

-eō はこのように、主要調音に前舌を用いるか否かの差が、その出現・多寡に反映されていると考えられる。

5.3 -eō の正体

ここまでの観察から -eō の特徴をまとめると、次のようになる。

(34) a. 同語を -iō と -eō の両方で記す例もあることから、-eō は語義の弁別に関わらな

²⁸ ただし r だけは前舌子音である。なぜ r に -eō が頻出するのかについては、現時点では説明できないため、解釈を保留する。

²⁹ 前舌の低い状態とは、舌に緊張を伴っていない場合であると予想される。舌のはりが緩んで、前舌が低くなった場合には、i よりも e に近く聞こえたのではないだろうか。なお、-eō が出現する頭子音 (b, m, f, q, r) は、上代特殊仮名遣のイ・エ列で甲・乙類の区別があった子音と一部共通する。上代特殊仮名遣のイ・エ列の二表記も、硬口蓋化の音声的な相違が反映したものと解釈されている (松本 1974・1995)。中世日本語でもほぼこれらと等しい子音で二表記が生じているということは、これらもまた硬口蓋化による音声差の反映であることを窺わせる。

³⁰ カ・ガ行の子音は非前舌子音だが、完全硬口蓋化を生じる子音に近い類であるといえる。服部 (1951 : 101-102) はキョ・ギョを「後部硬口蓋音」とみなし、神山 (1995 : 80) も硬口蓋化で調音点が移動することから完全硬口蓋化の一種とも言い得ることを述べている。軟口蓋音に -eō が少ないのは、こうした完全硬口蓋化を生じる子音の性質が影響しているためかもしれない。

³¹ 他、geō が現れない理由としては、ダ行のイ段音とエ段音の表記が gi / de という対になっており、「ge」の綴字に相当する音声がなかったからではないかという解釈も考え得る。しかし、マ行 (mi / me) とカ行 (qi / qe) では、ともに同じ頭子音の対を持ちながら、-eō の出現数に多寡がある (meō は多く、qeō は少ない)。このことを勘案すると、-eō の存否は、短音の綴字関係や、その音声の有無とは無関係と思われる。

い音声である。

- b. -eō の生起位置は, q- にやや偏りがあるものの, 語頭・語中・語末のいずれかに特に固定していない。
- c. 日本語母語話者の手になる和文資料には-eō の音声に相当するようなエ段音の仮名表記がない。

この三点を踏まえると, -eō は自由異音 (free variation) であると了解される。(34a) は, -eō が音韻的弁別性のない異音 (allophone) であることを示し, (34b) は, その異音が音的環境により生起が条件づけられた条件異音ではなく, 個人や発話で偶発的に生じる自由異音であることを示している。また (34c) の, 日本語母語話者が -eō の音声をエ段音で表記しないというのは, ちょうど撥音を [n] [m] [ŋ] [ŋ] などに発音しても日本語では「ん」の一字で綴るのと同様, 意味の弁別をなさない異音は仮名遣いで表記分けしないという, 音声と表記の関係に則っているためである。和文資料に「へやう」のような仮名遣いが見えないのは, このように, -eō が音韻的弁別性をもたない音声であるがゆえに母語話者によって記されないという, 異音としての事情を汲みとる必要があると考えられる。

6. -eō と -iō を異なる発音とみなしうる諸点

出現分布以外にも、『日葡辞書』には, -eō と -iō を異なる発音とみなしうる諸点が存在する。本節ではそれらを三点指摘する。

6.1 拗短音の -eo, -ea

『日葡辞書』のオ段・ア段拗短音には, -io・-ia とあるべき例を -eo・-ea と記した, i ~e 交替例が複数出現することを前述した (2.1 節)。これらの例を観察すると, -eo・-ea を生じる例は, 不完全硬口蓋化を生じる頭子音に偏っていることがわかる。-eo・-ea は, m-, q-, r- に出現するが, gu- や g- には見えない³²。

(35) qeo : 虚, 举 [4 語 4 音節]

Qeo* (虚), Qeogon (虚言) Qeoyô (举用), Qeoji. l, Qioji* (虚事) ,

³² 『平家物語』にも qeo, reo, rea が一例ずつ見える (江口 2010 : 445)。用例は, gogeo_yô (御許容, 巻四 286), yeireo (叡慮, 巻一 48), soreacu (粗略, 巻一 19)。なお, 16 世紀末に長崎に約 20 年間住したスペイン人のアピラ・ヒロン著の『日本王国記』でも, ミョの音節に「mio」と「meo」が宛てられている (土井 1980 : 284)。

(36) reo : 慮, 旅³³ [9 語 9 音節]

Guireo (疑慮), Reocacu (旅客), Reochi (慮知), Reosö (慮想), Reosô (旅僧), Reoto (旅途), Reoxo (旅所), Tareo (他慮), Xinreo. l, xinrio (神慮)

(37) mea : 脈 [2 語 2 音節]

Ximeacu (死脈), Meacu* (脈)³⁴

(38) rea : 略 [1 語 1 音節]

Soreacu. l, soriacu (疎略)

硬口蓋化は、長音・短音を問わずに生じるものであるから、これらも不完全硬口蓋化の影響により前舌が低くなることでエ段音に聞こえた(或いは発音された)例と理解すれば、拗音における同一問題を同一要因に帰して解決することができる。

先行研究では、こうした拗短音の $-eo \cdot -ea$ も、拗長音の場合と同じく、 $-io \cdot -ia$ の同音異表記として理解されてきた(森田 1993 など)。しかし『日葡辞書』の「potiùs. (後者の方がまさる)」という略号の用法に拠れば、これらは明らかに $-ia \cdot -io$ と異なる発音であることが示されている。

次の補遺の注記に注目したい。

(39) Qeo* (虚) *L. potiùs Qio.* (または, Qio (虚) とも書き, むしろその方がまさる)

(40) Meacu* (脈) *Vel potiùs. Miacu.* (または, Miacu (脈) とも綴り, むしろその方がまさる)

ここでは、potiùsを用いて、見出し語の $-eo \cdot -ea$ よりも、後掲の $-io \cdot -ia$ の方がまさることを示している。『邦訳』では各二表記を同音異表記とみなして、上記のpotiùsを「〜とも書き(〜とも綴り)」と補って訳しているが、この邦訳には疑問がある。なぜならpotiùsを用いた他の例はすべて、発音として差異のある二形を比較しているからである。

(41) Cucqiö, (究竟) *L. potiùs. Cucqiö.* (または, Cucqiö (究竟) とも言い, むしろその方がまさる)

(42) Dacqio, (脱去) *L. potiùs Dacco.* (または, Dacco (脱去) とも言い, むしろその

³³ ただ、「旅(リヨ)」の漢字では reo が用いられる傾向にある(亀井 1973)。この傾向がこの文字特有の問題であるのか否か、現段階では判断がつかない。

³⁴ 「脈」については、丸田(2001)が、『日葡辞書』に Miyacu, Miacu, Meacu の3様の表記が現れることや謡曲などの用例などを以て直音と拗音の中間的な発音であった可能性が高いことを指摘している。

方がまさる)

(43) Fossocu (発足) l. potiùs, fassocu. (または, fassocu (発足) とも言い, むしろその方がまさる)

(44) Metqiacu. (滅却) l. potiùs, Mecqiacu. (または, Mecqiacu (滅却) とも言い, むしろその方がまさる)

(41) は促音と非促音, (42) は去の漢音 (キョ) と呉音 (コ), (43) は発の呉音 (ホツ) と漢音 (ハツ), (44) は入声音と促音の比較であり, 以上はみな, 異なる発音をする語形が対照されている。この用法に倣えば, 同じ *potiùs* を用いた **Qeo** と **Qio**, **Meacu** と **Miacu** も, 異なる発音をする語形を比較していると理解すべきではないだろうか。拗短音の二形だけが表記上の優劣を比較しているとみなすべき理由は, 辞書内には見当たらない。よって上記の理解に基づけば, **Qeo** と **Qio** は異なる発音の表記ということになり, さらにこの音節を含む「**Qeoji. l. Qioji*** (虚事)」という見出し語もまた, それぞれ異なる発音をする二形を並置しているということになる。すなわち見出し語の「l,」は, 拗音の二表記を掲げていても, 「Anju, l, anzu (庵主)」と同様, 同音ではない二形を掲げていると見なせるのである。

6.2 略号「l,」の機能の統一

前節での「**Qeoji. l. Qioji*** (虚事)」の例を敷衍すると, 「**Fiöxi. l, feöxi** (拍子)」のような, 開拗長音を「l,」で掲げる例もまた, 異なる発音の二形を示している可能性が高い。仮にこのように, 拗音の二形が異なる発音を示しているとする, 『日葡辞書』の見出し語の「l,」は, 「異なる発音をする語形を並置する」という機能を統一的に備えることになり, 同音異表記を並置する「l,」は, 辞書中に存在しないことになる (例外 1 例を除く, 後述)。

ではここで, どのような例が従来, 同音異表記の並置例として理解されてきたのかを再確認する。「l, (或いは Vel,)」で二形を並置する見出し語全 961 条の中から³⁵, まず同一漢語を並置する例を, 木村 (1983) の分類に従って各一例ずつ挙例する。(45a) の用例のみ, 論旨の都合上, 後掲する。

(45) a. ローマ字の綴り方にかかわるもの [59 条]

b. 異なる字音の併存にかかわるもの [73 条] **Acurei, l, acuriö** (悪霊)

³⁵ 「l,」で三語以上を並置する例もあるが, 二語並置の例と同様の結果を得たため, 以下の論述では省略する。

- c. 連濁形・非連濁形の併存にかかわるもの [42 条] Tonxei. l, tonjei (遁世)
- d. その他の音韻変化にかかわるものなど [39 条] Annon, l, anuon (安穩)

上記 (45b - d) は、異なる発音の二形を並置していると理解できる。しかし (45a) は、これまで同音異表記と解釈されてきた例に当たる³⁶。これらは次の通り、全用例が拗音表記に限られている。

(46) -eǒ - -iǒ [28 条] :

- a. feǒ - fiǒ (21) Feǒgacu, l, fiǒgacu. (兵革)
- b. reǒ - riǒ (7) Reǒju, l, Riǒju (領主)

(47) -eô - -iô [32 条]

- a. feô - fiô (19) Feôxi, l, fiôxi. (表紙)
- b. qeô - qiô (4) Qeô. l, qiô. (今日)
- c. gueô - guiô (1) Qengueô. l, qenguiô. (検校)
- d. peô - piô (1) Xenpeô. l, xenpiô. (先表)
- e. reô - riô (7) Reôca. l, Riôca, (竜駕)

(48) -eo - -io [2 条] :

- a. qeo - qio (1) Qeoji. l, qioji* (虚事)
- b. reo - rio (1) Xinreo. l, xinrio. (神慮)

(49) -ea - -ia [1 条] :

- a. rea - ria Soreacu. l, soriacu (疎略)

(48) (49) の拗短音は、異なる発音と理解できる例である (6.1 節参照)。しかし拗短音だけが例外とは考えがたいため、ここではむしろ敷衍して、拗長音の (46-47) の各例もまた異なる発音の二形を掲げていると理解すべきであろう。そうすると同一漢語を挙げる (45) の「l,」は、一貫して「異なる発音の二形を並置する」という機能を備えることになる。

漢語以外を挙げる例においても、「l,」の機能は同様である。漢語以外の同語とみなせる二形を並置した全 88 条 (本篇・補遺合計) を、音声的な違いに関わるもの (50) と、それ以外のもの (51) に分類し、代表例を以下に挙げる。

³⁶ 木村も、大塚 (1982 : 9) に従って同音異表記と解釈している。

(50) 音声的な違いに関わるもの [53 条] :

- a. 清濁 [33 条] Amadare, l, amatare. (雨垂)
- b. 訛り [9 条] Casufai, l, casufaqui (かすはい・滓吐)
- c. 竹・白の読み方 [4 条] Taqezauo, l, tacazauo (竹棹)
- d. b と m [3 条] Tomurai, l, toburai. (弔い)
- e. その他 [4 条] Tosaca, l, Tossaca (鶏冠)

(51) 上記の分類に以外のも [35 条] :

- a. 名詞の別称 [34 条] Votoco, l, vonoco (男)
- b. 同音異表記 [1 条] Tacumo, l, taqumo (焚く藻)

上記のうち、唯一、同音異表記と認められるのは、クを cu と qu で記した (51b) 「Tacumo, l, taqumo (焚く藻)」のみである。クの子音は基本的に c- が用いられるが、動詞に限っては、活用形の語幹末表記を揃えるために q- が使用される (例: Taqi, u, aita [焚き, く, いた] → Taqi [焚き]・Taqu [焚く]・Taita [焚いた])。よって後者 taqumo は、「焚く」が動詞であることを明示するために qu が使用されたと見なせよう。ただしこうした例は他に存在しないため、例外的な処置であったと考えられる。この 1 例を除外すれば、「l, 」で同語を並置した見出し語の中に、同音異表記形の取り立てを目的としたものは存在しない。

「l, 」で同語でないものを並置する例には、「Bisai, l, bisaina (微細・微細な)」、「Abi, uru, l, abiru, ita (浴び, ぶる・浴びる, びた)」、「Nicco, l, niccoto (にっこ・にっこ)」、「Tôtô, l, tocutocu (疾う疾う・疾く疾く)」、「Masa, l, masame (柁・柁目)」など様々な例が存在するが、これらはいずれも異なる語形を並べており、結果として発音形としても異なっていることは言を俟たない。またこれらの中にも、同音の異表記の並置を目的としたものは現れない。

以上から帰納的に考えるならば、見出し語の「l, (または)」は、「異なる発音をする語形を並置する」という用法を統一的に備えており、同音異表記を掲げる機能は基本的にないと考えられる。

このように、「l, 」に同音異表記の並置機能がないならば、辞書中、明確に認められた同音異表記が「l, 」で一切掲出されていない理由も同時に説明できる。例言第 3 条に説くように³⁷、『日葡辞書』では、y を i (イ) の、v を u (ウ) を同音異表記として用いている

³⁷ 例言第 3 条は次の通り。「また、Vguysu (鶯) のように、一語が一文字 [一漢字] に相当するものである時には、Vguisu (ウギス) と読まれないように、ギリシア字の Y を使って [Vguysu と] 書くか、あるいは I 字を少し離して [Vgu isu と] 書くかする。また、[母音の] V 字に変えて書くことにする。

(例: Xöy* [正意], Noriyma [乗馬])。しかしこれらには「l,」で並置された例がなく、例えば「Xöy. l, xöi」, 「Noriyma. l, Noriuma」というような見出し語は見つからない。その他、辞書内では qui・qi (キ), qe・que (ケ) も同音異表記として使用されているが³⁸, これらも「l,」で並置される例がない。さらに同音異表記は、前掲 (7) の「Reöco」「Riöco」, (16) の「Igue」「Igui」のように、別条で見出し語に標出されることもないのである(「蝟皮」「異邦」「畦」の三語を除く³⁹)。

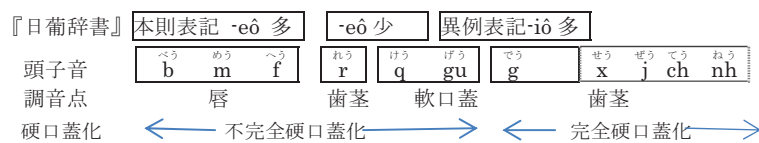
その理由は、これらの綴字が同音異表記であることに求められる。『日葡辞書』は、「異なる発音をする」と認めたものに限り「l,」で並置し、また別条に掲げる方針を採った。したがって同音異表記として用いている例は、同音と認識されているが故に、こうした処理が施されなかったと考えられるのである。

6.3 合拗長音表記-eô・-iô との平行的な分布

-iô と -eô には音節頭子音の差に基く出現分布があること、そしてその分布は硬口蓋化の差の反映と考えられることを既述した (4-5 節)。『日葡辞書』ではさらに、対となる合拗長音の二表記-eô・-iô にも、開拗長音と似通った出現分布が確認できる (竹村 2011 : 62, 第 3 章 6 節参照)。

合拗長音では、-eô を本則表記、-iô を異例表記としており (前掲【表 1】参照), -eô はエ段音の残存を示す表記、-iô はイ段音に聞こえた表記と推定されるものである⁴⁰。『日葡辞書』では、この二表記にも、次のように音節頭子音の差に基く偏在が認められる。

【図 2】『日葡辞書』の合拗長音の分布 (竹村 2011 : 67 【図 2】一部修正・抜粋)



たとえば‘類’を Tagvi (タグイ) と書き, Vôqini cū (大きに食ふ) 意の‘大食ひ’を Vôgui (ヲウギ) と読まれないように Vôgvi と書く。(『邦訳』5頁)。

³⁸ 例えば「キ」は, Azzuqui* (小豆) — Qeiqui (景気), 「ケ」は, Quezzume (蹴爪, 「Ago」) — Qeixei (傾城) など。

³⁹ 「Ifi (蝟皮)」「Ifô (異邦)」は「Yfi」「Yfô」でも立てられている。しかし森田武氏が指摘するように, Yfi・Yfô は「抹消すべきものが見落とされて残った例外」(1980 : 847) とみるべきであろう。この二語を除けば, y と i は別条で見出し語に標出されることがない。「畦」も, 「Age」「Aje」の両方が立てられているが, これも, 「ゼ」を ge と je で見出し語に立てた唯一の例なので, 誤例と考えられる。

⁴⁰ -eô と -iô に発音の差が想定されることは, 橋本 (1928) が早くに指摘しており, キリシタン資料の諸文献からも裏付けられるものである (竹村 2011 : 59-60)。

エ段音を表す-eôは、唇音の頭子音に多く見え、反対に、イ段音を表す-iôは、g- や gu- に頻出するという分布である。具体的に-iôの表記率をみると、g- 100% > gu- 80.6% > f- 49.4% > q- 36.5% > r- 29.9% > b- 22.7% > m- 20.7% という順になる。

まず g- の頭子音は、「Cagiô (箇条)」のように全音節が -iô で現れる。gu- も、著しく -iô に偏っており、字音語の見出し語では、3語 (Gueô [御宇], Sagueô [作業], Sanguêô [三業]) 以外の 32語は、字種に関わりなく、-iô 表記のみであるか (Nôguiô [農業]), 或いは -eô と -iô の両表記が出現する (Gueôxô / Guiôxô [巧匠])。

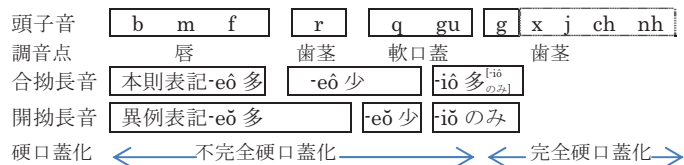
ところが、唇音の b-, m- では -iô の表記率が低く、とりわけ注目されるのは、「l,」で -eô と -iô を並置する例が皆無な点である (例: Beôbô [渺茫], Meôcu [妙句])。これは、f-, q-, r- の頭子音において、「l,」で -eô と -iô を並置する例が出現するのと対照をなす。

(52) Feôgu, l, fiôgu (表具), Qeô. l, qiô (今日), Reô. l, riô (竜)

「l,」は異なる発音をする語形を並置する略号であるから (6.2 節参照), (52) の頭子音では -eô と -iô の間で発音がゆれていたと推定される。

さて、以上の合拗長音と、開拗長音の二表記の分布をあわせると、【図 3】のようになる。

【図 3】開・合拗長音表記の分布図 (竹村 2011 : 67 【図 3】再掲)



各拗長音とも、エ段音を表す表記 (-eô・-eô) が b-, m-, f- の頭子音に偏って現れ、対して gu- や g- ではイ段音を表す表記 (-iô・-iô) が頻出する。r- と q- ではやや異なりはあるが、本則表記 (-iô・-eô) を用いつつも異例表記 (-eô・-iô) も少なからず用いるという共通した傾向があるといえよう。

このように二表記の分布が平行的であるということは、どちらの拗長音でも、硬口蓋化の影響が等しかったことを意味している。各頭子音で -eô と -eô, -iô と -iô の分布がほぼ等しいのは、綴字の影響ではなく、同一の音声的要因により生じているからであると理解できるのである。

7. なぜ『日葡辞書』は異音を収載したのか

ここまで、*-iö* と *-eö* が異なる発音を表す表記であり、*-eö* が、エ段音に聞こえた自由異音と推定されることについて述べてきた。

では、なぜ『日葡』では、このような自由異音までも収載する必要があったのだろうか。自由異音が語義弁別に関与しないことは、同語を *-iö*・*-eö* の両方で見出し語に立てていることから明白である。その認識がありながら、なぜ編者らはあえて見出し語に標出し、また、なぜとりわけ語頭の例に、「*Reöco*」「*Riöco*」のように、*-eö* と *-iö* で対になった条を多数標出したのだろうか。

この二点を推察する上では、本書の利用者とその利用方法を勘案する必要があると思われる。本書の利用者は、日本語の非母語話者（具体的にはポルトガル人宣教師）である。本書が自由異音をも見出し語に立てているということは、彼らにとって「異なる発音に聞こえたもの」すべてが見出し語に標出されているとあってよい。それは換言すれば、本書が発音を頼りに検索されることを前提としており、たとえ自由異音を手掛かりにして引いたとしても支障がないよう、手厚く設計していることを示しているものと考えられる。

実例に即して考えたい。例えば「病気」には次の二つの見出し語がある。

- (53) a. *Beöqi* (病気) *Vide, Biöqi*. (*Biöqi* の条を見よ)
b. *Biöqi* (病気) *Doença, & enfermidade*. (やまい, わずらい)

日本人の「病気」の発音を聞いた時、非母語話者の中には、語頭の開拗長音をイ段音に聞く者もあれば、少数ながらエ段音に聞く者もあったと推測される。ローマ字表記に還元した場合、後者の人々は「*Beöqi*」の綴字を想起して辞書検索を試みたであろう。しかしその際に「*Beöqi*」の条がなければ、利用者は語義説明を得られず、辞書としては片手落ちとなる。『日葡』ではそうした事態を避けるため、「*Biöqi*」だけでなく「*Beöqi*」も見出し語に立て、時には「*Vide, (～を見よ)*」と注記も付すことで、どの利用者也漏れなく語義説明へ至れるよう誘導したものと想像される。

とりわけこの語のように語頭に開拗長音があるものは、*-eö* の条と *-iö* の条とで掲載頁が大きく隔たる。*-eö* の条を欠いてしまうと、語義説明が *-iö* の条にあることを知らずに *-eö* の条を引いた利用者に、「この語は未採録である」という誤解を与えかねない。よって編者らは、殊に語頭の開拗長音に気を配り、可能な限り、*-iö* と *-eö* の両方の条を標出したものと考えられる。

対して、語中・語末の開拗長音では、*-eö* と *-iö* のどちらかで表記していようとも、検索にはさほど支障が生じない。前掲 (8) の「渴病 (*Catbeö*)」「寺領 (*Iireö*)」ならば、*Catb-*,

lir- までを引けば開拗長音部分を -eō と -iō のどちらで記していても前後数条の内に見出せるため、あえて両方の条を立てる必要がなかったのではないだろうか。語中・語末の開拗長音に、-eō と -iō で対になった条が少ないのは、このように検索の便として要求されないという事情があったと推測される。

-eō という音声は、おそらくは日本語話者である信徒の会話中に聞かれたものであろう。それは例言内容 (12) から推測されるころではあるが、-eō で記された語が、「病氣」「明朝」など、日常用いられやすいと思われる比較的平易な漢語に多く確認できるのも、その一端を示しているものと思われる⁴¹。

『日葡』は、方言・卑語といった宣教師が用いない言葉でさえ、「それを聞き、それらの語を通じて、教徒が言わんとするところを正しく理解する必要があつた」(『邦訳』解題 9 頁) ために収載している。この点を考え合わせれば、開拗長音の -eō も、教徒らの発話中に聞こえた発音をもとに検索するため、自由異音であっても収載する必要があつたと考えられよう。

8. まとめ

本稿では、開拗長音表記の -iō と -eō について次のことを述べた。

- (一) 異例表記「-eō」は、音節頭子音が唇音 (b-, m-, f-) とラ行歯茎音 (r-) の場合に頻出するが、軟口蓋音 (q-, 稀に gu-) には乏しく、歯茎音 (g-) には現れない。この分布はキリシタン資料全体で共通することから⁴²、一つの音声的事実の反映と考えられる。
- (二) -eō の出現には、硬口蓋化 2 種 (完全硬口蓋化 / 不完全硬口蓋化) の差が関与していると考えられる。-eō は不完全硬口蓋化を生じる頭子音 (非前舌子音) にのみ現れる。これらの頭子音では、主要調音に前舌を用いないことから、硬口蓋化の際に舌が下がることもあり、その際のエ段音に近い音声は -eō で記されたものと推測される。
- (三) -eō は、語義弁別に関与しないこと、生起位置が固定していないこと、日本語母

⁴¹ -eō にも文書語は 4 語見えるが (Meican. l, meōcan [明鑑], Qeōfai [敬拝], Bireō [微涼], Sanreō [山梁]), むしろ -iō の方が数多く現れる (Iōmiō [浄明], Qiōcan [香甘], Qiōri [鏡裡], Qiōxen [軽浅], Riōji [良士], Riōju [良樹], Riōsocu [兩足] など)。

⁴² 【表 7】の注 4 に記したように、『ドチリナ・キリシタン』(1592・1600 年), 『金句集』(1593 年) など、-eō が現れない資料も一部にはある。これらでは、あえて -iō で統一したか、あるいは編者らが -iō と -eō を聞き分けていなかった、ということになる。

語話者の仮名表記には反映されないことから、自由異音と推定される。

- (四) -eō と -iō が異なる発音の表記であることは、『日葡』内の拗短音の i~e 交替例、「l」の機能、合拗長音表記との平行的な分布の 3 点から裏付けられる。また『日葡』が -eō を収載したのは、検索の利便性を考慮してのことと推定される。

以上の結果を踏まえると、-iō と -eō は異なる発音を表す表記であり、-eō はエ段音に聞こえた自由異音である蓋然性が高い。

-eō は、自由異音というその性質ゆえに、日本語母語話者には聞こえず、表記する術も持たなかった。しかしポルトガル人は、非母語話者であるが故にこれらを聞き取ることができ、またローマ字綴字という表記手段で以て書き記すこともできたのである。

第3章 合拗長音

1. はじめに

本章では、前章で扱った開拗長音と対になる、合拗長音（オ段合音を含む拗長音）について考察を行う。合拗長音も、開拗長音と同じく、一部の音節に「-eô」と「-iô」の二表記が現れる。

- (1) a. Qeôyô (孝養)
b. Qiôyô (孝養) (共に『日葡辞書』本篇見出し語)

刊本の合拗長音では、(1a)の -eô を本則表記としているが、資料によっては(1b)の -iô も異例表記としてしばしば交えている。

これらの二表記に関しても、近年では、同音異表記とみなす解釈が定着しつつあるが、本章では、(1a)(1b)の -eô と -iô を音節頭子音別に分析することを通して、これら二表記にも音声差が認められることを指摘する。

以下では次の考察を行う。まず、合拗長音の出現する箇所を確認し(2節)、先行研究を整理・問題点を列挙した後(3.1節)、本則表記 -eô の e が、仮名遣ではなくエ段音の音声の反映であることをキリシタン資料の諸記述から示す(3.2節)。その上で、-eô と -iô にも、開拗長音と同じく音節頭子音の差に基づく出現の偏在があることを『日葡辞書』の用例を中心に提示する(4.1節)。そして、キリシタン資料におけるこの分布が、室町期の抄物の合拗長音表記の様相とも一致すること(4.2節)、また、開拗長音表記 -iô・-eô の分布とも平行的であることから、-eô と -iô は、硬口蓋化の差が反映した音声の異なる表記であり、拗長音化の遅速を表していると考えられることを指摘する(5節)。

なお以下、「合拗長音」と称するものは、/eu/ の連母音が /yoo/ と拗長音化した音節を指すが、当時、厳密にはまだ拗長音化が完了していなかった類も併せて指すものとする。

2. -eô と -iô の表記でゆれる箇所

考察の前に、合拗長音表記が -eô と -iô でゆれる箇所を確認する。それらは主に、(2) - (4) の類に現れる⁴³。

⁴³ iqîô~iqeô (生きる) のような「上二段動詞+助動詞ウ・ウズル」でも -iô~-eô でゆれる例がある。し

(2) 字音語 Qeôfu~Qiôfu [恐怖], Reôri~Riôri [料理]

(3) 下二段動詞と助動詞「ウ・ウズル」との形態素境界

Xizzumeô~xizzumiô [沈めう]

(4) ウ音便 xigueô~xiguiô [繁う], arubeômo~arubiômo [あるべうも]

(2) は、「^{キョウフ}恐怖」, 「^{レウリ}料理」のように、字音仮名遣で「イ段音の仮名+ヨウ」(以下, i ヨウ), 又は「エ段音の仮名+ウ」(以下, e ウ) と表記する字音語でゆれる類を指す。(3) は, xizzumeô~xizzumiô (沈めう) のごとく、動詞の語幹末から助動詞ウ・ウズルにわたる箇所¹でゆれる類を指す。そして(4) は, xigueô~xiguiô (繁う) や, arubeômo~arubiômo (あるべうも) のような、ク活用形容詞や助動詞ベシのウ音便でゆれる類に相当する。

刊本の用例数をみると、圧倒的に(2)の字音語の用例が多く、(3)(4)は『平家物語』『伊曾保物語』等の会話体資料に偏って出現するという特徴がある。よって本稿では、(2)の字音語を中心に考察を行い、適宜(3)(4)も参照するという方針をとる(なお(3)(4)については、第6章で別に論じる)。

3 先行研究の整理と問題点の指摘

3.1 先行研究の整理

先行研究での-eô・-iôをめぐる解釈は、-eôの「e」の解釈の相違により、音声差を認める説と、認めない説とに二分してきた。まず議論の嚆矢となった橋本(1928)は、『ドチリナ・キリシタン』(1592年)のカ・ガ行に qeô, qiô⁴⁴, gueô が、また他資料には guiô が見えることに着目し、この-eô・-iôの二表記には音声差があると推定した。その際、

(5) 想ふに、エウ音が今日の如き yō 音となるには、eu eo ëō iō yō のやうな順序を経たのであらうが、此の書の出来た時代には、カ行以外の音[稿者注——サ行(xô)など]は既に iō 乃至 yō の段階まで進んで居たが、カ行に限つて、未だ ëō の段階に

かしこれらは、/iu/ がウ段拗長音 (/yuu/) になった後、/yuu/ と /yoo/ の交替によってオ段拗長音に転じたものであり、-eu>-yooの拗長音化の過程におけるゆれとは異なる類に属する。したがってこれらは本章では調査対象外とした。なお『日葡辞書』ではこの類が『平家』207頁からの引用1例のみであるため(森田1980:849)、調査結果には影響しない。

⁴⁴ 『ドチリナ・キリシタン』の本文には「qiôquai (交会)」(38頁)と開音で記されているが、「qiôquai」の誤りであると橋本(1928)は推定している。

留まつて居たのではあるまいか。 (260-261 頁)

と述べ、-eô の e は、/eu/ から /-yoo/ への拗長音化が遅れてエ段音が残存した例であると解釈した (同解釈に吉田 1937, 阪田 1955 がある)。

しかし表記と音声を直結させた右の解釈は、資料研究の進展に伴い、高羽 (1950) や森田 (1955・1980・1993), 福島 (1979) から異を唱えられることとなる。特に高羽 (1950) は、橋本の論証不足を指摘し、カ行に qiô・qiô, ダ行に giô しか出現しない『ドチリナ・キリシタン』の用例だけでは、「qeô」「qiô」に音声差があることを証することにはならないと批判した。さらに森田 (1955) は、キリシタン資料全体を視野に入れて詳細に検討を加えた結果、-eô は仮名表記と関連をもつものであるという解釈を具体的に提示した。その論拠は主に次の二点からなる。

一点目は、『日葡辞書』の例言第 4 条にみえる、オ段拗長音に関する次の記述である。

- (6) [開拗長音を「Fiörö」「Feörö」と I 字や E 字でもって書くように] また、Fiô (豹), Qiô (興) などのように短音調 [すなわち合拗長音] をもっている語でも同様に [I 字または E 字で Fiô, Qiô, または, Feô, Qeô のように書くことに] する。それは次のような理由にもとづく。すなわち仮名 (Cana) 文字では一方 [開拗長音] を Fiau (ひやう) と書き、他方 [合拗長音] を Feu (へう) と書くけれども、^[i] 実際の発音においては、I 字よりも E 字の方に近いというわけではない。 かえって上衆 (Camixüs) の発音によれば【中略】Fiô, Qiô などのように短音調 [合拗長音] をもっている語は、I 音を用いて ^[ii] Qiô と発音する方が、Qeô と発音するよりもすぐれているからである。 しかし、^[iii] 仮名 (Cana) による表記法に従って E 字で書くことも一般に行われているので、われわれは本書で、これらの語をば区別なく E 字でも I 字でも表記している。【後略】

(『邦訳』5 頁。前章 (12) を一部再掲。[] は稿者注, [] は『邦訳』注。なお読みやすさのため、補注は適宜省略した)

傍線部 [i] - [iii] の記述に従えば、-iô は、/eu/ が拗長音化してイ段音に近く聞こえた当時の音声を写す表音表記であり、-eô は、「けう」のようなエ段音を用いる仮名遣いに即して記した表記であることになる。実際、当時の合拗長音の字音仮名遣いは、『落葉集』(1598 年) や易林本節用集等においても、「けう」「てう」のように e ウの表記で統一する傾向にあることから (森田 1955 : 29), -eô が仮名表記に従ったものとする記述も首肯すべきものと理解された。

二点目は、活用語の基本形を同じ形に保つために、できるだけ-eô の形を用いる方針を採ったものと解される例が、『日本大文典』（1604 - 08 年）に散見することを根拠としている（森田 1955 : 31）。例えば第一種活用動詞⁴⁵の未来の条では、助動詞ウ・ウズルを後接させて未来形をつくることを説明する際、次の（7）のように、語幹 Ague（上げ）を意識的に揃えて記したかのような記述をしている。

- (7) ○語根⁴⁶に ô（エう）、ôzu（エうず）、又は、ôzuru（エうずる）を加へる。例へば、Ague（上げ）、Agueô（上げう）、agueôzu（上げうず）、又は、Agueôzuru（上げうずる）。[後略]

（『日本大文典』巻一 7v 「話しことばに用ゐる肯定第一種活用○未来」）

他にも本書では、（8）の第二種活用動詞⁴⁷の過去形や、（9）の「形容動詞⁴⁸」の活用形を説明する記述でも、語幹を-e で揃えたかのような記述が見られる。

- (8) ○Ebi（エび）、emi（エみ）は eôda（エうだ）とかはる。例へば、Saquebi（叫び）、saqueôda（叫うだ）。Sonemi（嫉み）、soneôda（嫉うだ）。

（『日本大文典』巻一、28v 「第二種活用に属する動詞の過去を知る為の一般法則」）

- (9) この [稿者注——語尾が Ai, ei, ij, oi, ui, Na 又は naru の綴字に終る形容動詞の] 語根は次の綴字、即ち ô（オう）、eô（エう）、ô（アう）、û（ウう）、Ni（に）に終る。書きことばでは初の四つが Qu（く）に終る。[中略] 例へば、[中略]

○Ei（エイ）、eô（エう）。Xigueô（繁う）、xiguequ（繁く）、xigui（繁い）、xiguexi（繁し）、xiguequi（繁き）。

（『日本大文典』巻一、47 「変格動詞、又は、不規則動詞に就いて ‘アい’、‘エイ’、‘イい’、‘オい’、‘ウい’ に終る動詞の活用」）

したがって-eô は、「さけうだ」「そねうだ」「しげう」のように語幹末がエ段音表記となる仮名表記に準拠して記されたにすぎず、-iô とは実質、「表記上の相違に留まるものではないか」（森田 1955 : 31）という結論が導かれた。

上記のような、『日葡辞書』の例言と、キリシタン文典の活用表記を根拠とする森田説

⁴⁵ 上二段動詞、下二段動詞、サ変動詞を指す。

⁴⁶ 現代日本語文法での「語幹」に相当する。

⁴⁷ ハ行以外の四段動詞、及びナ変動詞を指す。本文（8）の用例は、すなわちバ行・マ行四段動詞のウ音便に相当する。

⁴⁸ 現代日本語文法での、「形容詞」と「形容動詞」の両方に相当する。

には、今日まで異論が出されていないが、本章ではこれらの問題点および反例を挙げることで、再考を促す議論を出発させたい。

3.2 先行研究の問題点

森田説の第一の問題点は、*-eô*・*-iô* が「表記上の相違に留まる」という解釈に曖昧さが残る点である。この解釈を突き詰めると、結論として、「*-eô* は *-iô* の同音異表記であるから、*-iô* と同じイ段音を表音している」という解釈か、あるいは、「*-eô* は仮名表記と関連させただけなので、*-eô* の表記そのものは表音性をもたない」という解釈かのいずれかの仮説に帰着する。ところがキリシタン資料に当たると、このどちらの解釈にも相反する記述に行き当たる。例えば『日本小文典』（1620年）では仮名二字を用いる綴字の発音について次のように説く。

- (10) *Fiyo* (ひよ), *Kiyo* (きよ), *Riyo* (りよ), *Kefu* (けふ), *Nafu* (なふ), *Kifu* (きふ) の綴字をもって書き, *Fio* (ヒヨ), *Kio* (キヨ), *Rio* (リヨ), *Keô* (ケウ), *Nô* (ナウ), *Kiû* (キウ) と発音する。初めの四つはわずかに I (イ) または E (エ) にふれて流音風に発音する。【後略】

(『日本小文典』巻一 8v. 「単一綴字ふたつから構成された「澄み」の本源的綴字」)

これによれば、「けふ」を表わす *keô* は「わずかに【中略】Eにふれて流音風に発音する」というのであるから、*-eô* の *e* は明らかにエ段音を示していることになる。もっとも『日本小文典』は、「古い言ひ方を尚ぶ傾向」(土井 1942 : 325) が強いために、「けふ」をエ段音を含んだ形で発音することが、そのまま当時の口語を反映しているとはいえないであろう。しかし、(10) が当時行われていた発音の記録ではないにせよ、*keô* が「Eにふれて流音風に発音する」ものであるという表記説明そのものは、口語・文語の差に左右されるとは考えがたい。そのように考えると、*-eô* は、エ段音を示す表記であって、*-iô* とは完全な同音異表記とはいえないことになる。

このように *-eô* がエ段音を表すことは、実は前掲の『日葡辞書』例言 (6) でもすでに垣間見えている。(6) 傍線部 [ii] 「*Qiô* と発音する方が、*Qeô* と発音するよりもすぐれているからである⁴⁹ (原文 : *melhor foão com I, dizendo Qiô, que Qeô.*)」という記述に注目したい。ここでは「*Qiô*」と「*Qeô*」が発音の形として比較されており、劣勢ながらも、*-eô* の発音が比較対象として存在していたことを暗示している。

⁴⁹ 参考までに他の邦訳も掲げておく。「*Qeô* よりは *Qiô* と言って I を以て発音した方がよい。」(土井 1960), 「*Qeô* よりは *Qiô* と、i に発音した方がまさっている。」(亀井 1973)。

したがって以上を総合すれば、-eô は、-iô と同音異表記であるとも、表音性がないともいえず、むしろ確かにエ段音を存しているといい得るのではないだろうか。

また第二に、活用語の語幹を揃えるために-eô が使用されたという解釈については、前掲 (7) 『日本大文典』の記述そのものから反例を挙げることができる。(7) の後半は次のように続く。

- (11) Te (て) に終る語根は teô (てう), 又は, chô (ちょう) に, ye (え) は yô (えう) に, gi (ち) は giô (ちょう) に, je (ぜ), ji (じ) は jô (ぜう) に, xe, (せ), xi (し) は xô (せう) に変る。

(『日本大文典』 卷 17v 「話しことばに用ゐる肯定第 1 種活用 未来」)

傍線部に即して説明すると、例えば「立てう」ならば **tateô** か **tachô** に、「交ぜう」ならば **majô** に、「せう」ならば **xô** となることを述べている。もし語幹を揃える目的で-eô を用いていたならば、なぜ「立てう」は **tateô** のみに、「交ぜう」は **majeô** に、「せう」は **xeô** とならないのだろうか。この点で、-eô が語幹を揃えるために用いられたとする解釈には疑問が残る。

さらにコリヤードの『日本文典』(1632 年) では、上記 (11) の内容をより明確に記し、-eô を付加しない例とする例の違いを次のように示す。

- (12) もし動詞の語根が te (て) で終るならば, この綴りを teô (てう) 又は chô (てう) に変えて未来形を作る。例. Tâte, uru (立て, つる) の未来形は tâteô (立てう) 又は tachô (立てう)。もし語根が ji (じ) で終るならば, jô (ぜう) に変えて未来形を作る。例. xenji (煎じ), xenjô (煎ぜう)。もし語根が xe (せ) で終るならば, それは xô (せう) に変えられる。例. Xi (し) : xô (せう), maraxi (まらし) : maraxô (まらせう)。もし ie (へ) で終るならば, それは io (へう) に変えられる。voxiie (教へ) : vòxiio (教へう)。しかし e (エ) で終るその他の動詞の語根には, 未来を作るために, その後に ô (おう), ôzu (おうず), ôzuru (おうずる) がおかれる。例. ãgueô (上げう), ãgueôzu (上げうず), ãgueôzurù (上げうずる)。

(コリヤード『日本文典』 20, 「第 1 活用の未来形について」)

まとめると、第一種活用動詞の未来形では語幹末の差により、ウ・ウズルと融合して拗長音化する類としない類があり、-eô はその後者に限って現れていたと考えねばならない。すなわち、語幹末が **xe・je・te** の場合には、ウ・ウズル (-ô ・-ôzuru) と融合して **xô・**

jô・chô (ある場合には teô⁵⁰) の拗長音に転じたのに対し、be, fe, gue, me, qe, re の語幹末では、拗長音化しないために、-ô・-ôzuru がそのまま付加され、結果、語幹末と助動詞の接続部分に-eô が現れたということである。なお、しばしば指摘されるように『日本小文典』(巻一, f19-20 他) では、Tateô (立てう), Saxeô (させう), Majeô (交ぜう) のようにすべてを-eô で揃えているが、これらは「五音」と「仮名遣」に配慮して記したことを冒頭で説明している(巻一, f19), 事情が異なる。『日葡辞書』もこの書と同様に仮名遣に配慮して-eô を使用していたならば、すべての第一種活用動詞で-eô が現れるはずであるが、実際は、『日本大文典』の記述に等しく、次のように動詞の語幹末の差で記し分けている。

- (13) a. Ide mono mixô. (いでもの見せう) (本篇「Ide (いで)」)
 b. Fuxiguina yûmexiuo totonoyete xinjôzu⁵¹. (不思議な夕飯を調べて進ぜうず)
 (本篇「Fuxiguina. l, fuxiguino (不思議な. または, 不思議の)」)
 (14) a. Vochitçuqini nanzo agueôzu. (落着きに何ぞ上げうず)
 (本篇「Vochitçuqi (落着き)」)
 b. Sô sô môxitçuqeôzu. (早々申付けうず) (本篇「Sôsô (早々)」)

この点から見ても、『日葡辞書』の-eô にもやはり、エ段音の残存を読みとる必要があるように思われる。

また『日葡辞書』では、本篇見出し語「Feô. l, fiô (豹. または, 豹)」の条の注記においても、-eô からエ段音を読みとられることを意識している節がある。

- (15) この語 [豹] のように、日本の文字 [仮名] で書く場合に ‘えう (eu)’ で始まるか終わるかする語は、われわれは通常これを e 字を使って表記する。ただし、その発音は e (エ) よりもむしろ i (イ) に近くなるのであって、そのことは上記 Fiô (豹) の例でも見られるとおりである。上 (Cami) の人々もまたそのように発音している。しかし、この点に関しては、もっと詳しく [本書の] 序言の中で説明されるであろう。 (『日葡辞書』「Feô. l, fiô」)

太傍線部の「上記 Fiô の例」とは、見出し語「Feô. l, fiô」の fiô を指す。つまり、「豹」のように拗長音化が進行してイ段音に近く聞こえていた音節では、-eô だけを見出し語に

⁵⁰ 語幹末が teô, deô, neô となって現れる例については、第 6 章で論ずる。

⁵¹ 『邦訳』注: xinjôzu の誤り。Xinjô (進上) にひかれて誤ったものであろうか。(287 頁)

挙げてはエ段音を残存させた音節（すなわち拗長音化していない音節）に理解される恐れがあるため、あえて*-iô*でも挙げ、イ段の発音の想起を促したものと考えられる。したがってこの注記は、“*-eô*の表記からエ段音を読み取られる”ということ为前提として、付されたものといえよう。

以上の解釈が妥当であれば、*-eô*と*-iô*は異なる発音を表しており、*-eô*は、拗長音化が遅れてエ段音を残存させていた音節、*-iô*は、拗長音化が進行してイ段音に聞こえていた音節ということになる。よって各表記の分布を把握すれば、各音節での拗長音化の遅速をおおよそ捉えることができるようになるかと予想される。

では、合拗長音での*-eô*と*-iô*の表記分布は、どのように現れると予測されるか。

合拗長音にも、開拗長音と同様に硬口蓋化の影響があると考ええると、その表記分布は両者でほぼ等しくなると考えられる。そこで以下では、前章で扱った開拗長音の結果と適宜対比させながら考察を行うこととする。

調査方法については、第2章1節と同様に行った。

4. 調査結果

4.1 ローマ字本キリシタン資料の合拗長音表記

4.1.1 『日葡辞書』

『日葡辞書』の合拗長音*-eô*・*-iô*を、本篇と補遺、見出し語と説明文（見出し語以外全て）に区分し、前掲(2) - (4)の用例を音節頭子音別に分類したのが【表1】である（用例数は音節数）。

【表1】『日葡辞書』における合拗長音（※（ ）は説明文）

		b- べう	m- めう	f- へう	gu- けう	g- ごう	p- ぺう	q- けう	r- れう	合計
-iô	本篇	4	3(1)	34(6)	28(19)	28(13)	4	28(19)	18(30)	144(88)
	補遺	1	1(1)	0(1)	5(1)	8(4)	1	10(1)	7(1)	33(9)
-eô	本篇	12(8)	17(2)	25(12)	12(3)	0	2	58(34)	40(9)	166(68)
	補遺	1(1)	3(1)	3(2)	1(1)	0	0	10(6)	15(5)	33(16)

※他、*neô3*例、*teô1*例がある。これらは語幹保持により拗長音化が遅れていた可能性があるため考察からは除外した。これらについては第6章を参照のこと。

まず表から明らかなのは、ダ行のg-に*-iô*の表記しか現れない点である。これは、開拗長音のg-に*-iô*しか現れなかった結果と等しい（第2章4.1節参照）。

さらに【表 1】から、字音語の用例数のみに絞って各音節頭子音での*-iô* の割合をみると、*giô* 100% > *guiô* 80.6% > *fiô* 49.4% > *qiô* 36.5% > *riô* 29.9% > *biô* 22.7% > *miô* 20.7% となる⁵²。

注目されるのは、*g-* に次いで、*gu-* の頭子音をとるガ行で*-iô* の割合が高い点 (80.6%) である。以下に掲げる通り、『日葡辞書』内では、見出し語・説明文の別を問わず *gu-* を *guiô* で表記する傾向が著しい。例えば、見出し語の場合、次の (16) のように、ほぼすべての語に*-iô* が用いられ、*gueô* は傍線部を付した G 部と S 部にしか現れない。

(16) 見出し語：(「*」は補遺)

B 部：Betguiô (別業)

C 部：Caguiô (家業), Coguiô (工業), Cunguiô (君業), Cõguiô* (かうぎよう)

G 部：Gueô (御宇), Gueô (業), Gueôqi (澆季), Gueôraxij (げうらしい),
Gueôtai (凝滞), Gueôxõ (巧匠), Guiô (業), Guiôcot* (ぎようこつ),
Guiôgui (巧偽), Guiôguiôxij (ぎようぎようしい), Guiôna (ぎような),
Guiôqi (澆季), Guiôraxij (ぎようらしい), Guiôsan (ぎようさん),
Guiôsanna (ぎようさんな), Guiôsanni (ぎようさんに), Guiôtai (凝滞),
Guiôxõ (巧匠)

I 部：Ichiguiô (一業), Ienguiô (善巧), Ienguiô (善業)

N 部：Nõguiô (農業)

R 部：Renguiô* (連翹)

S 部：Sagueô (作業), Sanguêô (三教), Sasagueô guiô (作々業々), Suiguiô*
(翠翹)

T 部：Taiguiô (大業), Teiguiô (帝業), Tocuguiô (徳業), Tôsacuguiô (東作業)

V 部：Võguiô (王業)

G 部でやや *Gueô-* の出現が目立つが、これらの見出し語は、条としての実質的な役割を担っていない。なぜなら「御宇」以外の 5 語 (業・澆季・げうらしい・凝滞・巧匠) は、次の (17) のように、*-iô* の条への誘導注記が付されるにとどまっているからである。

⁵² *p-* は熟語の後部要素で音形が変化するものに現れやすいが (例：一俵), 用例数がきわめて少ないため、他の音節と一律に比較することはできない。よって開拗長音と同様、考察からは除外する。

- (17) a. Gueô (業) *Vide*, Guiô. [Guiô (業) の条を見よ]
 b. Gueôqi (澆季) *Vide*, Guiôqi. [Guiôqi (澆季) の条を見よ]
 c. Gueôraxij (げうらしい) *Vide*, Guiôraxij. [Guiôraxij (ぎょうらしい) の条を見よ]
 d. Gueôtai (凝滞) *Vide*, Guiôtai. [Guiôtai (凝滞) の条を見よ]
 e. Gueôxô (巧匠) *Vide*, Guiôxô. [Guiôxô (巧匠) の条を見よ]

上記の語の語義説明はすべて Guiô- の条の方に記されている。したがって、G 部でも、-iô を偏重する傾向があるといえる。

結局、『日葡辞書』内で -iô をまったく用いていない見出し語は、Gueô (御宇), Sagueô (作業), Sanguêô (三業) のわずか 3 語しかなく⁵³、残りの語は、すべて字種に関わりなく *guiô* の表記をとっていることになる。

なお森田 (1993) は既に、『日葡辞書』の本篇 G 部では、語頭が Gu- の合拗長音で -iô を偏重する傾向があることを指摘している。しかし、上述の通り、gu- は、本篇 G 部の見出し語に限らず、辞書全体の見出し語で -iô を優先していると解釈すべきであろう。

gu- は、見出し語だけでなく、説明文においても -iô が多用される傾向にある。説明文においては、全 17 語中 16 語までが -iô で現れ (-eô1 例は「御宇」)、その中には、(19a) (19b) のように本来なら -eô で記されるはずのウ音便にまで用いられた例も見える。

- (18) Qiõron Xoguiõno manacouo sarasu. (経論聖教の眼を曝す)

(本篇「Qiõron (経論)」)

- (19) a. P. (詩歌語) i, Xiguiô. (すなわち、繁う)

(本篇「Xinoni (しのに)」)

- b. Camiye jõgueuo xiguiô itasu. (上へ上下を繁う致す) (本篇「Iõgue (上下)」)

それに対し、b- や m- の音節では、-iô が積極的に用いられているとは言い難い。

見出し語で、biô は全 16 条中 5 条 (5 語)、miô は全 22 条中 4 条 (4 語) と、僅かに現れはするものの⁵⁴、特徴的なのは、「l, (または)」という略号で -eô と併置される例が皆無な点である。

⁵³ 「Sasagueô *guiô* (作々業々)」は、語彙中に *guiô* を含むので除外した。

⁵⁴ biô の語は、Marubiôtan (丸瓢箪), Xeibiô (青苗), Sunbiô (寸苗) など。miô の語は、Ietmiô (絶妙), Menmiô (面貌), Mimiô (微妙) など。

- (20) a. Beô (廟), Beôbô (渺茫), Beôxi (苗子), Xinbeô (神妙)
 b. Meô (猫), Qimeô (奇妙), Meôto* (夫婦), Zaimeô (在苗)

対して q-, r-, f- では, -eô と -iô を「l, (または)」で併置する例が, q- に 7 条 (7 語), r- に 7 条 (6 語), f- に 21 条 (19 語) 見える。この「l,」の略号は, 発音の異なる語形を並置する機能があるため (第 2 章第 6.2 節参照), これらの頭子音をもつ音節では, -eô と -iô の間で発音がゆれていたことが窺える。

- (21) a. Fuqeô. l, fuqiô (払暁), Icqeô. l, icqiô (逸興・一興), Qeô. l, qiô (今日)
 b. Fireô. l, firiô (飛竜), Reô. l, riô (獵・漁), Temareô. l, Temariô (手間料),
 c. Feômot. l, fiômot (俵物), Feôxet. l, fiôxet (冰雪), Ifeô. l, ifiô (異表),

以上をまとめると、『日葡辞書』の合拗長音では, g- や gu- の音節では -iô が頻用され, 反対に, b- や m- の音節では -eô に偏り, そして q-, r- などの音節では -eô と -iô の両方が用いられて両者の間でゆれていることになる。この結果は, 開拗長音の表記分布と照らし合わせると, 両者は平行的に現れていることが分かる。

【図 1】開・合拗長音表記の分布図 (第 2 章【図 3】再掲)

頭子音	b	m	f	r	q	gu	g	x	j	ch	nh
調音点	唇			歯茎	軟口蓋		歯茎				
合拗長音	本則表記-eô 多			-eô 少		iô 多 ^[iôのみ]					
開拗長音	異例表記-eô 多			-eô 少		iôのみ					
硬口蓋化	← 不完全硬口蓋化 →			← 完全硬口蓋化 →							

再論することになるが, 【図 1】の通り, エ段音を表す表記 (-eô・-eô) は, b-, m-, f- の頭子音に偏って現れ, 反対に, イ段音を表す表記 (-iô・-eô) は, g- や gu- の頭子音に頻出する。r- と q- はやや異なりがあるものの, 本則表記 (-iô・-eô) を用いつつ異例表記 (-eô・-iô) も少なからず使用するという共通した傾向があるといえる。

以上から考えると, ローマ字本キリシタン資料の二表記, 「-eô」と「-iô」, 「-iô」と「-eô」は, 硬口蓋化がもたらした音声の差異を反映しており, その平行的な出現分布は, 両者が体系立っていることを示していると考えられるのである。

4.1.2 他のローマ字本キリシタン資料

では前節の『日葡辞書』で確認したような音節頭子音差に基く *-eô*・*-iô* の出現分布は、他のローマ字本キリシタン資料でも確認できるのだろうか。

その調査結果が【表2】である。

結論を先に述べると、*g-* が *-iô* で統一されているという点以外、『日葡辞書』と共通する特徴は見出せない。例えば『ヒイデス』では *meô* よりも *miô* が多く⁵⁵、『平家』でも字音語では *biô* が用例数でまさっている。また『日葡辞書』で顕著であった *guiô* も多用されているとはいえず、『羅葡日』にややその傾向を見出せるが、用例数が少ないため確証とはしがたい。

前章で扱った開拗長音では、キリシタン資料全体で一貫した傾向が見出せたのに対し、合拗長音ではこのようにばらつきがある理由は、明確にはわからない。ただ、あえて理由を推測するならば、資料性の違いが反映している可能性も考えられる。『日葡辞書』は、辞書という性質上、混在する音声の秩序をできるだけ示し分けようと努めたのに対し、『平家』などの物語類ではそうした点が格別重視されなかったため、混沌とした様相がそのまま提示されてしまったとも考えられる。

【表2】他のローマ字本キリシタン資料における合拗長音の *-eô*・*-iô*

刊年	作品名 (略称)	b-		m-		f-		g-		gu-		q-		r-	
		-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô
1591	サントス		3 [1]		21	1	5	20		3	44		61 [1]		25
1592	ドチリナ							45			2		6		
	ヒイデス			28	14			180	1	5	28	2	35	9	12
1593	平家	7 [3]	4 [12]	[3]	3 [20]	2		67		2	2 [17]	4 [1]	34 [32]	2	5 [163]
	伊曾保	[2]			3 [5]	1		2			1 [10]		11 [6]		6 [26]
	金句集				[2]			[1]			1		3	2	2
1595	羅葡日	5	8	1	6	15	15	14		3	1	13	16	17	78
1600	ドチリナ							69			2		1		
1607	スピリツアル				8	1	1	95			1		45	1	38
1632	懺悔録				[2]			10			[8]	3	1 [2]		[8]

※1 上段(あるいは一段のみ)は字音語の用例数、下段の [] はウ音便と下二段動詞+助動詞ウ・ウヅルの合計用例数。

※2 『ヒイデス』には *geô* (条、II 200) が 1 例あるが、他資料では一切 *geô* が見えないことから、誤植の可能性も考えられる。

※3 p- は用例数が僅少であるため考察から除外した。また『平家』等にみえる *deô* (出う)、*tazzuneô* (尋ねう) 等の *deô*, *neô*、及び『平家』『懺悔録』にみえる *saxeô* (させう) の *xeô* も除外した。これらについては第 6 章を参照のこと。

⁵⁵ 『ヒイデス』の *meô* と *miô* の分布については菅原 (1989) にも考察があり、各表記は丁によって出現の偏在があること、その偏在は翻字担当者の表記規範と関係があることなどが指摘されている。

しかしまた一方で、『日葡辞書』と似た分布を示す資料もあり、例えば『日本大文典』（表では除外）では、字音語に限れば*iô* の出現する音節頭子音が『日葡辞書』と大方等しく、*gu-* が 47.0%（8/17）あり、ほかに *f-* が 50%（1/2）、*r-* が 11%（1/9）、*qu-* が 5.2%（2/38）見えるが、*b* では 10 音節、*m-* は 6 音節中に *iô* は見当たらない。

こうした表記上の傾向が、果たして音声上の実態を反映したものなのかどうかはキリシタン資料のみでは判断できないため。以下では室町期の抄物の表記と対照させて考察を行うこととする。

4.2 抄物の合拗長音表記

4.2.1 成篁堂本『論語抄』

本書は、10 巻 15 冊の写本で、片仮名交じりの仮名抄物である。論語本文には、墨筆による返り点、および振仮名と、朱筆による句読点が付されている。跋文に「文明七_年仲冬上浣題」の識語があり、文明七（1475）年の写本であることがうかがえる。出雲（1961:102）は「文明七年の原本とは言えないまでもそれに近い室町中期写の善本であると認めてよいと思う。」と述べており、書誌調査の方面からも「室町中期写本」（長澤・川瀬 1932）、「室町末期写」（川瀬 1992）という報告がなされている。よってキリシタン資料にはやや先立つものの、同じ室町期資料と見てよいと考えられる⁵⁶。

本書は室町期の語彙・語法を伝える資料として名高いが、表記面でも目を引く点が多々ある。例えばハ行転呼をワ行で写す例が頻繁に見えるほか（例：他国_エユク [巻六, 31 ウ]、孔子アルイ_ワ病シ [巻一, 27 ウ]）、個々の語彙表記においてもキリシタン資料のローマ字綴字と平行的な仮名遣いが随所に確認できる（例：ヲトヲト [巻五, 37 オ] ——*votovoto*. *i. votôto* 『日葡辞書』補遺見出し語）。したがって、合拗長音でも表音的な表記傾向が少なからず期待されるものである。

4.2.1.1 調査方法

合拗長音表記については既に出雲（1961）に字音語の調査があるが、本研究では、字音語の再調査も含め、ウ音便なども含む、前掲（2）-（5）の合拗長音の音節を悉皆調査した。

用例は、「シヨウ」のような表記を、拗長音を表す「i ヨウ」の表記として扱い、「セウ」のような表記を、エ段音の残存を示す「e ウ」の表記として採取した。それぞれの用例は、論語本文の訓点部分（以下、訓点）と、仮名抄部分（以下、仮名抄）に大別し、さらに各

⁵⁶ なお抄者は、臨濟宗一山派の僧、天隠龍沢（1422-1500）と目されているが（上村 1937）、出雲（1961）は、当時の学問の主流であった五山、博士家とは直接には関係のない人物であろうと推定している。

音節の行ごとに分類した。

なお、字音仮名遣いには、元来、「i ヨウ」（例：ヒヨウ）と「e ウ」（例：ヘウ）の二通りがあったが、院政期より混乱をきたして後、室町時代には「e ウ」で統一されるようになって⁵⁷。以下では念のため、区別があった時期の字音仮名遣いを挙げておく（以下、歴史的な字音仮名遣いは〈 〉に入れて示す）。

(22) 成篁堂本『論語抄』で使用される主要な漢字の字音仮名遣い：（ザ・ラ行は割愛）

- a. バ行：廟〈ベウ〉，厖⁵⁸〈ベウ〉，
- b. ハ行：瓢〈ヘウ〉，憑〈ヒヨウ〉
- c. パ行：瓢〈ヘウ〉⁵⁹
- d. ガ行：堯〈ゲウ〉，業〈ゲフ〉
- e. カ行：驕〈ケウ〉，恭〈キヨウ〉，矜〈キヨウ〉，興〈キヨウ〉
- f. サ行：小〈セウ〉，少〈セウ〉，召〈セウ〉，蕭〈セウ〉，接〈セフ〉，昭〈セウ〉，
称〈シヨウ〉，従〈シヨウ〉，松〈シヨウ〉，証〈シヨウ〉，鐘〈シヨウ〉，
勝〈シヨウ〉，頌〈シヨウ〉
- g. タ行：朝〈テウ〉，鳥〈テウ〉

4.2.1.2 調査結果

成篁堂本『論語抄』における合拗長音表記の調査結果が、【表 3】である（以下、歴史的な字音仮名遣いは〈 〉に、本書の用例は「 」で表記する）。

【表 3】成篁堂本『論語抄』における合拗長音の仮名遣い

仮名遣	行	b バ	p パ	m マ	f ハ	gu ガ	g ダ	q カ	r ラ	xô サ	jô ザ	chô タ	nhô ナ	合計
i ヨウ	訓点	-	-	-	-	4	-	19	4	44	8	3	-	82
	仮名抄	-	-	-	-	7	-	18	-	10(1)	2	2	-	39(1)
e ウ	訓点	6*	1	-	1	1	-	3	1	2	2	15	-	32
	仮名抄	5	-	(1)	3	-	-	1	-	9	1(1)	3(1)	[2]	22 (3)[2]

※1 () は助動詞ウ・ウズルの後接例。[] はウ音便。その他は字音語。

※2 * 「ヘヨウ（厖）」の振仮名をもつ1例は除外した。

⁵⁷ 国字本キリシタン資料もすべて「e ウ」で統一している。漢字辞書『落葉集』（1598年刊）では、i ヨウ・e ヨウの例もすべてe ウ表記である（森田 1955, 鄭 2003）

⁵⁸ 「厖」は「廟」の古字。

⁵⁹ 「一瓢」（卷三, 20ウ）で用いられている。

【表 3】から明らかなのは、唇音の子音を頭子音にもつバ・パ・マ・ハ行では、「e ウ」の表記しか現れない点である。字音語では、バ行に「廟・厖〈ベウ〉」の二字、パ行に「瓢〈へウ〉」の一字が現れるが、(23)のように、訓点・仮名抄いずれにおいても、本来の字音仮名遣である「e ウ」のまま現れる。

- (23) a. ^{ソウヘウ ノ コトモシクハクワキトウセンニハ} 宗廟之事如會同 (訓点：巻六，33 ウ)
 b. ソウベウノコトハワ人君マツリノコトナリ (仮名抄：巻六，33 ウ)
 c. ^{ツタンノ シ ツヘウノケン} 一簞食一瓢飲 (訓点：巻三，20 ウ)

またハ行では、「瓢〈へウ〉」，「憑〈ヒヨウ〉」の二字があるが，この行では，本来〈i ヨウ〉の字音仮名遣いとなる「憑」までもが，(24b) (24c) のように「e ウ」で記されている。

- (24) a. タハコレーツヘウタンーツトハカリ (仮名抄：巻三，20 ウ)
 b. 子曰暴虎憑河死而無_レ悔者吾不_レ與也 (訓点：巻四，32 オ)
 c. 大河ヲ舟ナクシテワタルヲヘウガト云 (仮名抄：巻四，32 オ)

ところが対照的に，ガ行では「i ヨウ」が著しく，「堯〈ゲウ〉」，「業〈ゲフ〉」の二字がありながら，「e ウ」は(25a)前半の「堯」1例のみしか現れず，残る「堯」9例，「業」2例はすべて「i ヨウ」でしか出現しない。

- (25) a. 子曰大哉堯之為_レ君也巍々乎唯天為_レ大唯堯則之 (訓点：巻四，49 ウ)
 b. コレヨリシタギヨウノ舜ニクラキヲユヅルコトバナリ (仮名抄：巻十，39 ウ)
 c. ^{キヨウ}学業ユタカニタルトキハ (仮名抄：巻十，32 ウ)

また，サ行においても同様に，「i ヨウ」が過半数を占める。本来，〈e ウ〉の字音仮名遣いとなるべきものが「i ヨウ」で現れる例は，「少」，「小」，「召」，「蕭」，「昭」の5字種30例(訓点24，仮名抄6)あるが，うち26例(訓点22，仮名抄4)までが(26)のように〈i ヨウ〉で表記されている。

- (26) a. 小童ハ^(幼少)ヨウシヨウノ名ナリ (仮名抄：巻八，56 オ)

- b. ^{チン シ ハイ ト ワク シ ヨウ コウ シ レ リ} 陳司敗問 ^レ ^{ホ レ キ ヲ ヤ} 昭公知 ^レ 禮乎 (訓点：巻四，39 オ)
- c. ^{シ ヨウ シ ン ハ ス} 小人 ^{シ ラ} 不 ^レ 知 ^{メ イ ヲ} 天 ^{シ テ ス} 命 ^{ヲ ソ レ} 而 ^レ 不 ^レ 畏 ^(寡小君) 也 (訓点：巻八，52 ウ)
- d. ワカキミノ夫人ヲバクワシヨウクント云ナリ (仮名抄：巻八，56 ウ)

このような、i ヨウと e ウの現われ方の相違は、同一文中に 2 つ以上の漢字が含まれている場合に際立つ。次の (27) は、同一文中に「廟〈ベウ〉」「朝〈テウ〉」が含まれている文であり、(27a) の訓点に (27b) の仮名抄が添えられている。訓点 (27a) では、双方が正しい字音仮名遣いの「e ウ」で現れるのに対し、仮名抄 (27b) では、バ行の「廟」だけが「e ウ」で現れ、タ行の「朝」は「i ヨウ」に改められている。

- (27) a. ^{ソレ ア ヅ テ ハ} 其在 ^{ソウヘウテウテキニ} 宗廟朝廷 ^{ベンタトシテモノ云コト} 便々言 ^レ 唯謹爾 (訓点：巻五，13 オ)
- b. 孔子キミノマツリヲタスクルトキシソウベウ チヨウテキニテハヨクモノヲ云キシカモツハシメリ (仮名抄：同上)

ここから、字音仮名遣いが同じ〈e ウ〉の漢字であっても、五十音の行の異なり、すなわち音節頭子音の異なりによって、表記の現れ方が明確に違っていることがわかる。

こうした行による表記の差は、動詞に助動詞ウ・ウズルが後接する例にも確認できる。(28) の通り、マ行下二段動詞では「e ウ」となるものの、サ変動詞では (29) のように「i ヨウ」となる。

- (28) モシキマハテシタランコトヲ アラタメウカ (仮名抄：巻一，11 ウ)
- (29) 容員ハヨケレドモナニモ シヨウハ仁道カケタリ (訓点：巻十，33 オ)

以上を要するに、本書では、バ・パ・ハ・マ行のように唇音を頭子音にもつ音節では「e ウ」を頻用し、ガ行の軟口蓋音や、サ行の歯茎音を頭子音にもつ音節では「i ヨウ」を多用していることがわかる。これは、『日葡辞書』で、唇音の b-, m- をもつ音節に -eô を多用し、ガ行の gu- に -iô を頻用し、サ行の x- では拗長音を表す xô を専用していた表記傾向と通じるところがある。

出雲 (1961 : 118) は、本書の合拗長音表記に「i ヨウ」が多く、当時の支配的な「e ウ」の表記傾向とは反対方向にあることから、「当時の発音に近く表記しようとした」と見、中でもバ・ハ行に「i ヨウ」が無いのはこれらの行で拗長音化が遅れていたためと推測する。中でもバ行に関しては、「^太廟」(訓点：巻一，28 ウ) のような「e ヨウ」の表記が見えることにも着目し、「これはベウがまだ拗長音化せずに bēo の段階にとどまっていたため、

他の行のようにヒヨウと表記することができずヘヨウという特殊な表記をとったものと考えられ」（出雲 1961：118）と述べる。

抄物の表記を直ちに表音性と結びつけるのには危険が伴うが、しかし、『論語抄』の仮名遣いが、『日葡辞書』の合拗長音の分布と一致する傾向にあることから考えると、この見解は支持されてよいものと思われる。なお、「e ウ」の拗長音化完了の時期については、鎌倉時代以前（迫野 1968）、或いは室町初期まで（高松 1971）とするなど諸説あるが、仮に拗長音化が完了していたとしても、こうした行よる書き分けが現れるには何らかの拠りどころがあったと想定せねば難しく、しかもその分布が資料性の異なる『日葡辞書』と一致することも考えあわせるならば、やはり本書は発音に基いて記されたとみるのが穏当であろう。またその分布結果から推測するならば、合拗長音では頭子音の差によって拗長音化に遅速があり、「e ウ」や-eô の表記が多い唇音の音節では遅れ、ガ行軟口蓋音や歯茎音のように「i ヨウ」や-iô が多い音節では、進行していた可能性が高いと考えられるのである。

4.2.2 『杜詩続翠抄』

成篁堂本『論語抄』と類似傾向を示す抄物に、全 20 巻写本の『杜詩続翠抄』⁶⁰がある。

本書の成立は永享九（1437）年からおよそ嘉吉三（1443）年、『集千家註批点杜工部詩集』（宋 劉須溪評点、元 高崇蘭編）を直接のテキストとし、江西龍派（1375-1446 年）の講義を元に臨濟宗一山派の文叔真要（生没年未詳）が抄した現存最古の杜詩注釈書である（太田 1999）。

本書には、助動詞ウ・ウズルの用例が一定量見え、その中には「非標準的な」オ段拗長音表記が現れることが高見（1977）に報告されているが、それらは次のようなサ行に偏っている。

- (30) a. イカニ苗メソシヨウスラウヤカテ帰レ (巻一五, 32 ウ)
b. 況満身病又老後ナニト我ヲシヨウソ (巻十, 5 オ)
c. 三句ノ事ナニトシヨウソ也 (巻九, 13 オ)

これらの「シヨウ」が、現代語のような「シ・ヨウ」ではなく、拗長音であったことは、次の「参らせう」の例からも窺える。

- (31) a. 王三盃ノアケクニ出堂ヲマイラシヨウト云テ (巻八, 31 ウ)

⁶⁰ 国立国会図書館に巻 1-19、建仁寺両足院に巻 3-19 まで所蔵、いずれも巻 18 が一部欠け、巻 20 を佚す。

b. 北狄ヲ滅シテマイラシヨウト申スホトニ

(卷十六, 10 ウ)

上記の例に対し、他の頭子音では、「i ヨウ」とした例は現れず、すべてが「e ウ」で記されている。

(32) a. ナサケカケウス者ハナサケヲカケイテ

(卷四, 16 オ)

b. 菊ニトカハ無ステンテニトカメウトシタヨ

(卷一五, 16 オ)

c. ナニトテ贈タソクレウト云テ

(卷八, 31 ウ)

既出のキリシタン資料での記述 (11) (12) と照合すると、サ変動詞では xô (せう) のように拗長音で記すのに対し、他の頭子音ではエ段音を残す・eô で表記するという、キリシタン資料の記述に等しい表記の現れが本抄物には確認できる。ここから考えると、助動詞ウ・ウズルが後接する場合にも、やはり頭子音の差により、拗長音化しやすいものとしにくいものがあり、これらの表記はその一端を示しているものと推測される。

5 解釈

以上、ローマ字本キリシタン資料での・eô ・iô と、抄物二書での e ウ・i ヨウの分布を対照させると、【図 2】のようになる。

【図 2】ローマ字本キリシタン資料と抄物の合拗長音表記の対照

頭子音	b m f	r	q gu	g x j ch nh
調音点	唇	歯茎	軟口蓋	歯茎
キリシタン	-eô 多	-eô 少	-iô 多	
抄物	e ウ 多	e ウ 少	i ヨウ 多	
拗長音化	← [遅] →		← [早] →	
硬口蓋化	← 不完全硬口蓋化 →		← 完全硬口蓋化 →	

【図 2】からは、-eô と e ウ、-iô と i ヨウがほぼ平行的に出現していることが確認できる。拗長音化せずエ段音に聞こえた音節を表す・eô が、キリシタン資料で唇音 (b-, m- 等) の音節に多く出現するのに対応するように、抄物資料でも e ウは唇音の音節に偏って出現する。反対に、拗長音化してイ段音に聞こえた音節を示す・iô が、キリシタン資料でガ行

軟口蓋音 (gu-) に頻出するのに対応するように、抄物資料でもこれらの音節では i ヨウが多く現れる。またラ行歯茎音 (r-)、カ行軟口蓋音 (q-) はその中間にあり、拗長音した例としていない例が相半ばする。

これらを硬口蓋化 2 種の別と併せて見てみると、拗長音を示す表記例 (-iô・i ヨウ) は、完全硬口蓋化を生じる音節に現れ、反対に、拗長音化の未完了を示す表記 (-eô・e ウ) は、不完全硬口蓋化を生じる音節に偏っていることがわかる。すなわち、これらは、硬口蓋化の差によって生じた音声の異なりが、表記上に現れていると理解されるのである。

6. まとめ

本章では、キリシタン資料の合拗長音にみえる二表記「-eô」「-iô」について次の事を述べた。

- (一) キリシタン資料の諸記述を踏まえると、-eô は /-eu/ の拗長音化が完了せずにエ段音を残存させていた音節、-iô は拗長音化が進行してイ段音に近く聞こえた音節であると考えられる。
- (二) 『日葡辞書』の合拗長音表記-eô と-iô を音節頭子音別に分類すると、開拗長音の表記分布とほぼ平行的であることが判明した。頭子音が唇音 (b-, m-) の音節でエ段音を表す音節 (-eô・-eô) が多用されるが、ガ行軟口蓋音 (gu-) やダ行歯茎音 (gu-) の音節ではイ段音を表す音節 (-iô・-iô) が頻用される。この平行的な分布から、各子音では硬口蓋化の影響が等しく生じていたことが明らかになった。
- (三) さらに、合拗長音の-eô と-iô の分布から、/-eu/ >/-yoo/ の拗長音化においては音節頭子音の差によって遅速があったことがうかがえた。-eô を多用する唇音の音節では遅れており、-iô を多用するガ行軟口蓋音等では進行していたと考えられる。
- (四) 上記の分布は、室町期の抄物二書の仮名遣からも確認できる。特に成篁堂本『論語抄』では、バ・ハ・パ・マ行の唇音子音の音節に「e ウ」の表記が頻出し、反対に、ガ行や他の歯茎音の音節では「i ヨウ」の表記が多用される。これは『日葡辞書』の表記分布と平行的であり、ここから拗長音化の遅速が頭子音によって異なっていたことが、さらに裏づけられる。

以上の結果により、キリシタン資料の拗音節（特にオ段拗長音）では、子音の調音点の差による硬口蓋化 2 種の別が現れており、それが音声の異なりとなって、表記上に現れていることが明らかになった。

第4章 バレト写本の拗音節表記

1. はじめに

本章では、いわゆる「バレト写本」(正式資料名: Reg. Lat. 459, ヴァチカン図書館蔵)におけるオ段拗長音, ア段・オ段拗短音の表記分布を明らかにする。この写本の結果を, 第2-3章で得た刊本の結果と対照させ, 双方が一致することを示すことで, これらの表記が音声的要因によって記されたことをさらに強く裏付ける。

写本では, 刊本とは異なる特異なローマ字綴りが行われることが知られている。例えば, キ・ツを, 刊本では「qi」「tçu」と記すのに対し, 写本では「qui」「ccu」と綴ること, また, オ段の開合符号(開音: ð, 合音 ô)を刊本では厳密に付けるのに対して, 写本ではほとんど付けないといったことなどが知られている(福島 1983: 135-137)。写本には刊本のような強い規範性がないため, 音声が反映されやすいということはしばしば指摘されているが, バレト写本の表記が特に興味深いのは, 外国人宣教師らの聞き取りを経た日本語が反映されていると, 一部で明らかにされているためである。川口(2000)は, バレト写本の四つ仮名表記を調査し, ジ・ヂよりもズ・ヅの方が混乱を生じていることを明らかにした。その要因は, 当時のヨーロッパで破擦音がすでに失われていたことにあると結論付けられている。すなわち, 外国人宣教師にとっては破擦音のヅの聞き取りが困難であったために, ズ・ズを混乱しやすかったと考えられるのである。ここから推定すると, バレト写本では, 刊本よりもより強く外国人宣教師によって聞きとられた日本語音声が反映が見られると期待される。

バレト写本の拗音節の調査は, 未だ行われていないが, バレト自筆と目されている『天草版平家物語難語句解』⁶¹では, 森田(1976: 341)によるオ段拗長音の表記調査がある。

そこでは, 合拗長音に-eô と-iô の両方の表記を併用していることが報告されている。

(1) fuqeô (払暁。23 左-21), tasuqete miô (助ケテミョウ。57 左-17)

reôqué (料簡。58 外-7), aqeô (明ケウ。45 左-21)

xizzumiô (鎮ミョウ。17 左-22), biôxo (廟所。22 右-7)

(森田 1976: 341-342 より引用)

森田は, 『日葡辞書』でも合拗長音で-eô と-iô, 開拗長音で-iô と-eô を交えて用いていることを例に挙げ, 「バレトも両方を併用する当時の例によったのであって, それらを区別する明確な意識はなかったのである。」(森田 1976: 342) と説明している。

しかし第2-3章で示した通り, 『日葡辞書』には音節頭子音の差に基づく表記の偏在が認

⁶¹ 『天草版平家物語』の末尾 28 丁(白紙を含めると 32 丁)の手書きの語彙集。

められた。したがってバレット写本でも、刊本と同様に表記の偏在が見出されると考えられる。よって以下では、適宜、刊本との対照を行いつつ調査を行う。

2. 書誌情報と調査方法

2.1 書誌情報

調査結果を示す前に、当資料の書誌情報を記しておく。バレット写本は、ポルトガル人のパードレであったマノエル・バレット（1564-1620年）が来日間もない1951年に長崎県大村近くの坂口で書写した、382丁からなる大部の写本である。内容は版本『サントスの御作業』と一致する箇所が多いが、書写の形跡からみて、刊本が直接参照されたとは考えにくい。彼は日本語学習の一環として書写を行っていたため、欄外の空白には、自身の手による言語上の所見や本文に関する註が書き込まれている（福島1983, Schütte1962参照）。

バレット写本には、132r-155vにかけて、別人の手による書写箇所があり、この別筆の箇所では、四つ仮名や開合などの表記の誤りが少ないことが指摘されている。拗長音の例においても同様の傾向が確認できるのか、という調査が必要となる。

以下、土井（1962）、川口（2000）、福島（1983）に従って、構成内容を簡略に示す（rは表、vは裏）。

(2) バレット写本の構成：

1r - 3v	十字架の奇跡物語	103v - 107v	（白紙）
4r - 48r	主日の福音書	108r - 111r	福音書の目次（ラテン語）
48v	（白紙）	111v - 114v	（白紙）
49r - 50v	復活後の祝日の福音書	115r	（聖母マリアの絵）
51r	（白紙）	115v	（白紙）
51v	（キリストの絵）	116r - 131v	聖母マリアの奇蹟物語（バレット筆）
52r - 60r	四旬節中の金曜日の福音書	132r - 155v	同（別筆）
60v - 77v	キリストの受難物語	156r - 163r	（バレット筆）
78r - 82v	受難の道具に関する対話	164r - 368r	聖人伝
83r - 83v	（白紙）	168v - 179r	事項索引（ラテン語）
84r - 100v	聖人の祝日の福音書	379v	（白紙）
101r	（聖ヤコブの絵）	380r - 381r	聖人伝目次（ラテン語）
101v	（白紙）	381v	写本全体の内容目次（同）
102r - 103r	守護天使の加護について	382r	（飾り模様）

2.2 調査方法

調査底本には、『キリシタン研究』第七輯別冊の影印（ヴァチカン図書館蔵本）を用い、1r - 163r までを調査範囲とした。調査対象は、刊本と同じく、オ段拗長音、及びア段・オ段拗短音である。

ただし、バレット写本では基本的に開合符号を付さない傾向にあるため、例えば開拗長音の「みやう」に *meo* と記されていても、「-eö」（開拗長音の異例表記、すなわち開合符号の脱落）であるのか、あるいは「-eô」（合拗長音の本則表記、すなわち開合の誤り）であるのかが判別できない。しかし、開合の誤りが特定の子音にだけ偏って生じるとは考えがたいため、調査では、開合符号の脱落であると解釈する方を優先することとした。

したがって、表記の解釈は、次の (3) の基準に従って行っている⁶²。

- (3) a. 開拗長音の音節における「-io」 → 本則表記「-iö」と判断
- b. 開拗長音の音節における「-eo」 → 異例表記「-eö」と判断
- c. 合拗長音の音節における「-eo」 → 本則表記「-eô」と判断
- d. 合拗長音の音節における「-io」 → 異例表記「-iô」と判断

ただし、開合符号が付されていないながらその開合を誤っている場合は、誤例として扱い、用例を採取しなかった（例：*biönö* [病悩、正しくは *biönô*]、102r）。「ó」の表記は「o」と同様に解釈して採取した。また、バレット写本ではヂが「jji」という表記で綴られるため、「ぢやう」が *jjö*、「でう」が *jjô* という表記になる。刊本の *giö*（ぢやう）、*giô*（でう）と対照が不可能であるため、ダ行は考察から除外した。

3. 調査結果

3.1 開拗長音

刊本の開拗長音では、異例表記の *-eö* が、*b-*、*m-*、*f-*（唇音）と *r-*（ラ行歯茎音）の音節に偏って出現し、*gu-*、*q-*（軟口蓋音）の音節ではほぼ現れていなかった。以下では、写本でも同一の結果が得られることを指摘する。

バレット写本における開拗長音の表記を、音節頭子音別に分類したのが【表 1】である。

⁶² なお、表記判読の際は、千葉軒士作成のバレット写本テキストデータを参照しながら行った。千葉氏とデータをお譲りくださった山田昇平氏（大阪大学大学院生）に深く御礼申し上げる。

【表 1】パレット写本における開拗長音表記

		b- びやう	m- みやう	f- ひやう	p- ぴやう	gu- ぎやう	q- きやう	r- りやう	合計
-eo	異例	17(2)	20(2)	0	0	0	0	31	68(4)
-io	本則	10	5	5	0	22	45	11	98
総音節数		27(2)	25(2)	5	0	22	45	42	166(4)

※ () は欄外に記入された表記。

【表 1】の通り、開拗長音では異例表記の -eo が全体で 72 例（4 例は欄外註にあり）現れており、開拗長音の約 42% を占める。特徴的なのは、-eo の現れる音節頭子音が唇音の b-, m-, およびラ行歯茎音の r- に偏って出現している点である。

以下、異例表記である -eo の例を列挙する。

(4) beo (beó) : 病 [病人, 病者, 病苦, 大病, 無病, 癩病], 兵 [兵]

beonin (病人, 31r) beoja (病者, 53v) taybeo⁶³ (大病, 53r) raibeo (癩病, 12v)

(5) meo (meó, meō) : 命 [寿命, 身命], 明 [大光明, 光明, 明日, 分明], 名 [高名, 名聞人, 分名, 名利]

jumeo (寿命, 55r) jumeō (寿命, 94v) xinmeo (身命) cómeó (光明, 117v) funmeo (分明, 23v) meóri (名利, 131r)

(6) reo : 両 [両眼, 両方, 両石], 領 [領地, 領主, 領掌, 領内], 量 [大力量]

dai riqui reo (大力量, 19v) goreogan (御両眼, 36v) reobô (両方, 1v) reoxu (領主, 54r), reochi (領地, 15), reajo (領掌, 2)

まず b- の場合、全 29 音節中、異例表記の -eo は音節全体の半数を超える 19 例（約 65.5%）が用いられている。該当する漢字は「病」「兵」の 2 字種であるが、「beocu」（病苦, 57r）のように刊本資料には見られない -eo の語例も見られる。

また beo は、本文だけでなく欄外註にも現れている。次の (7) のように、「gunbio（軍兵, 43r）」に付された欄外註では、「兵」を、-io ではなく -eo で記している。

(7) gun—yqussa beo—ccuamono (軍—いくさ 兵—つわもの)

(43r, gunbio [軍兵] の欄外註)

⁶³ パレット写本では、y の上に・を付した表記が「い」の音節に用いられていることがあるが、本書では y の表記で代用する。

b- と同じ唇音の m- でも、異例表記の -eo は頻出し、m- の全 27 例中 22 例 (約 81.4%) を占めている。用いられる字種は「命」「明」「名」の 3 字種である。この m- でも、「meõmonjin (名聞人, 46r)」、「xõmeõ (姓名, 6v)」のように、刊本には存在しない -eo の語例が見られる。また、欄外註にも -eo が用いられており、本文と欄外で使い分ける意識がなかったことがうかがえる。

- (8) cómeõ ^マcaca yaqu taru. (光明赫奕たる) cõ, ficari — meo, aqiracani (光, ひかり — 明, あきらかに) (18v, 欄外註)

以上のような b-, m- の唇音に加え⁶⁴, ラ行歯茎音の r- でも、異例表記 -eo の使用が著しい。全 42 音節中 31 例 (約 73.8%) が異例表記の -eo で記されている。-eo が用いられている字種は「両」「領」「量」の 3 字種である。ただし、r- の音節では、なぜか「棟梁」の一語だけが 10 例すべて -io で綴られているという問題がある。この語は 60 丁 - 68 丁に 5 例, 140-141 丁に 5 例が出現する。後半の 5 例は、バレット以外の別筆によって書かれた丁にあるので (本章 2.1 節参照), この書写者が本来の表記規範を守ったものと推測されるが、前半の 5 例はどのような要因によって -io で表記されたのかは、明確にはわからない。しかしこの「棟梁」10 例と、「qirió (器量, 133r)」1 例を除外すると、「りやう」の音節はすべて -eo で記されていることになる。刊本でも reõ の傾向が頻出する傾向にあったが、バレット写本ではその傾向が著しいといえる。

一方で、軟口蓋音の頭子音をとる q- と gu- の音節では、異例表記 -eo が現れず、q- の音節では全 45 例, gu- の音節では全 22 例がすべて -io で出現している。q- は、「兄」「狂」「香」「経」「郷」「敬」の 6 字種, gu- は「行」「仰」「形」の 3 字種が各音節に相当する。総音節数が他の子音よりも多く、また異なり語数をもっとも多いにも関わらず、q- には異例表記が一例も出現しない点は注目すべきことと思われる。

- (9) quio (qiõ, qió) : 兄 [兄弟, 舎兄], 狂 [狂乱], 経 [経, 経文], 香 [異香], 郷 [故郷, 郷談], 敬 [崇敬]

quioday (兄弟, 95r), xaquio (舎兄, 84r), qiõran (狂乱, 135r), coquio (故郷, 11v), iqiõ (異香, 129v), sõqiõ (崇敬, 153)

- (10) guio (guió) : 行 [行儀, 勤行, 悪行, 飛行, 行歩, 行幸], 仰 [仰天], 形 [異形, 判形]

guiõgui (行儀, 98r), gonguio (勤行, 1v), guioten (仰天, 94v), iguio (異形, 148v)

⁶⁴ なお b-, m- と同じ唇音の f- では、全 5 音節がすべて -io で記されている。-eo が現れないのは、総音節数の少なさが要因と考えられる。-io の語は、「fiogui (評議, 54r)」「fiojjo (評定, 50v, 59v, 68v)」「fiojjo (兵杖)」の 3 語 (異なり語数) である。

以上をまとめると、バレット写本では、刊本と等しい結果が現れていることが確認できる。すなわち、各音節頭子音のうち、唇音の **b-**、**m-** 及びラ行歯茎音 **r-** では異例表記の **-eo** が頻出し、反対に、軟口蓋音の **q-**、**gu-** では異例表記が現れないという傾向である。

3.2 合拗長音

バレット写本の合拗長音を音節頭子音別に分類したのが【表 2】である。

【表 2】バレット写本における合拗長音表記

		b- べう	m- めう	f- へう	p- べう	gu- げう	q- けう	r- れう	合計
-io	異例	0	0	3	0	(1)	10(1)	0	13(2)
-eo	本則	0	0	0	0	(1)	9	7(1)	16(2)
総音節数		0	0	3	0	(2)	19(1)	7(1)	29(4)

※ () は欄外に記入された表記。

合拗長音は、総音節数が 33 音節と極めて少ない。なおかつ、唇音の **b-** と **m-** には用例がないため、刊本と対照できないという問題がある。また、唇音の **f-** も全 3 例しかない上に、それらがすべて異例表記の **-io** で記されており、刊本とは異なる結果が現れている。

(11) **fiô** : 表 [表具]

fiogu (表具, 19v, 66v, 123)

刊本では、**f-** では **fiô** の割合が 49.4%であったが (第 3 章節 4.1.1 参照), バレット写本では全 3 例しか存在しないため、表記の割合を推定するのは困難である。

一方、軟口蓋音の **gu-** は欄外註の「御作業」という語に 2 例現れる。この欄外註は刊本の『サントスの御作業』を参照するよう促している注記であるので (福島 1983), 「御作業」は書名を指していることになるが、それぞれが一例ずつ、**-io** と **-eô** で現れる。

(12) a. Vide **gosanguiono** fol. 330. de tryúpho &t. (凱旋などに関しては、‘御作業’の 330 丁を見よ, 22v 欄外註)

b. Vide **gosa / gueôno** fol. 262. pa a despedida de xo (‘御作業’の 262 丁, キリシトの告別の部分を参照せよ, 26v 欄外註)

刊本の『日葡辞書』では、**gu-** は著しく **-iô** に偏って表記する傾向があったが (第 3 章 4.1.1 参照), バレット写本では用例数が僅少なため、表記傾向が把握できない。

しかし同じ軟口蓋音の **q-** では全 20 例の合拗長音があり、約半数の 11 例が異例表記の **-io** で現れる。字種は「教」「興」「篋」の 3 字種である。全 20 例の音節のうち、「(御) 教

化」という語の「教」が 18 例を占めている点が特徴的である。

- (13) *quio* (qiô, qió) : 教 [(御) 教化], 興 [興], 篋 [宝篋]
gouquioque (御教化, 94r, 他) *qiô* (興, 112r), *fôqiô* (宝篋, 10v 欄外註)

「(御) 教化」の「教」では、本則表記-*eo* が 9 例、異例表記-*io* が 9 例用いられている。これは刊本の『日葡辞書』で、合拗長音の *q-* で、-*eô* と -*iô* が大きな偏りなく用いられていたのと近い結果であると考えられる (第 3 章 4.4.1 節参照) ⁶⁵。

他方、ラ行歯茎音の *r-* は、8 例すべてが本則表記の-*eo* で現れる。音節に相当する漢字は「漁」「獵」「料」「療」の 4 字種である。*r-* の音節は、刊本でも、*reô* は「れう」の音節の 70% 以上を占めていた。よって写本の用例がすべて-*eo* に偏ることは、刊本と遠からぬ結果になっていると言える。

以上、用例数が少ないために全体の表記傾向は把握しにくいものの、写本の合拗長音では、少なくとも、軟口蓋音の *q-* で、-*eo* と -*io* を半数ずつ使い、ラ行歯茎音の *r-* で -*eo* を頻用する傾向があり、これらの点は、刊本と似通った傾向であるといえよう。

3.3 ア段・オ段拗短音

バレット写本におけるア段・オ段拗短音の表記一覧が【表 3】である。

【表 3】バレット写本におけるア段・オ段拗短音表記

	頭子音 仮名表記		<i>b-</i> びや/ びよ	<i>m-</i> みや/ みよ	<i>f-</i> ひや/ ひよ	<i>p-</i> ぴや/ ぴよ	<i>gu-</i> ぎや/ ぎよ	<i>q-</i> きや/ きよ	<i>r-</i> りや/ りよ	合計
	- <i>ea</i>	異例								
ア段	- <i>ea</i>	異例	0	0	0	0	0	0	0	0
	- <i>ia</i>	本則	0	0	14	0	1	0	3	18
オ段	- <i>eo</i>	異例	0	0	0	0	0	0	3	3
	- <i>io</i>	本則	0	0	0	0	13	11	3	27

バレット写本では、オ段拗短音の *r-* に異例表記 -*eo* が 3 例出現する。

- (14) *coreocu* (合力, 91r), *bonreó* (凡慮, 117r), *reojin* (旅人, 37v)

(14) のうち、「合力」と「凡慮」は刊本には見られない語彙である⁶⁶。注意されるのは、オ段拗長音の *r-* がわずかに 6 例でありながら、うち 3 例が異例表記を占めている点である。

⁶⁵ 『日葡辞書』では *qiô* が 36.5%, *qeô* が 64.5% 用いられている (第 3 章 4.1.1 節参照)。完全な半数というわけではないが、*gu-* で *guiô* が 80.2%, *gueô* が 19.8% 用いられている割合に比べると偏りは少ない。

⁶⁶ *reojin* (旅人) は、『日葡辞書』の本篇見出し語にある。

gu- は 13 例, q- は 11 例あるにも関わらず, 異例表記は出現しない⁶⁷。すなわち, バレト写本では, 拗短音の異例表記の出現が, 音節数の如何に関わらず音節頭子音によって決定しており, また, 刊本と等しく, r- の頭子音に偏って-eo が出現するという結果が現れている。

なおア段拗短音には異例表記は出現せず, すべてが本則表記の-ia で記されている。

4. 構成からの考察

前節では音節頭子音別の調査を行ったが, これらに書写者による偏りは見られないだろうか。本資料には, バレト自筆の丁と別筆による丁がある。各書写者による表記傾向があるかどうかを見極めるため, 前掲 (2) の構成にしたがって, 本節では本則表記と異例表記の出現分布を調査する。

まず, 開拗長音・合拗長音の本則表記, 異例表記をそれぞれ構成別に分類したのが【表 4】【表 5】である。

【表 4】開拗長音・合拗長音の本則表記 (構成別)

			丁												合計	
			1r-3v	4r-48r	49r-50v	52r-60r	60v-77v	78r-82v	84r-100v	102r-103r	116r-131v	132r-155v 別筆	156r-163r	欄外註		
唇音	b	開	-io	-	6	-	1	-	-	-	-	2	1	-	-	10
		合	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	m	開	-io	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
		合	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	f	開	-io	-	-	1	2	2	-	-	-	-	-	-	-	5
		合	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
ラ行	r	開	-io	-	-	-	-	5	-	-	-	-	6	-	-	11
		合	-eo	-	2	-	-	-	-	2	-	-	3	3	1	11
軟口蓋音	gu	開	-io	2	3	-	4	-	-	2	-	5	4	-	2	22
		合	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
	q	開	-io	-	12	-	6	3	-	9	-	11	4	-	-	45
		合	-eo	-	2	-	-	-	-	1	-	6	-	1	-	10
合計			5	27	1	13	10	0	14	0	24	18	4	4	120	

⁶⁷ gu- には guioy (御衣, 79v), guioruj (魚類, 97v), guiojin (漁人, 32), q- には quime (虚名, 44v), qioquroqu (曲象, 125v) などがある。

【表 5】開拗長音・合拗長音の異例表記（構成別）

			丁		1r-3v	4r-48r	49r-50v	52r-60r	60v-77v	78r-82v	84r-100v	102r-103r	116r-131v	132r-155v 別筆	156r-163r	欄外註	合計	
唇音	b	開	-eo	-	5	-	10	-	-	4	-	-	-	-	-	-	19	
		合	-io	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
	m	開	-eo	1	4	-	3	-	-	6	-	6	-	-	-	-	2	22
		合	-io	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	f	開	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		合	-io	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	3
ラ行	r	開	-eo	8	14	1	4	3	-	1	-	-	-	-	-	-	31	
		合	-io	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
軟口蓋音	gu	開	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
		合	-io	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	q	開	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
		合	-io	-	3	-	-	-	-	2	-	5	-	-	-	1	11	
合計				9	28	1	17	4	0	13	0	12	0	0	3	87		

上記の表から明らかなのは、バレット以外の別筆になる丁（132r-155v）では本則表記が固く守られていることである（【表 4】【表 5】太枠）。この別筆の丁では、開合符号も多く付されており、その開合も正しいと指摘されているが（土井 1962 : 40）、その傾向は、開拗長音・合拗長音においても認められるといえる。この書写者は不明だが、自身の中で、本則表記と異例表記を書き分ける確固たる規範を確立していた人物だったと考えられる。

ア段・オ段拗短音の表記分布（【表 6】【表 7】）でも、同様の傾向が確認できる。別筆の丁では本則表記しか用いられておらず、異例表記はバレット筆の丁に偏っている。

【表 6】ア段・オ段拗短音の本則表記（構成別）

			丁		1r-3v	4r-48r	49r-50v	52r-60r	60v-77v	78r-82v	84r-100v	102r-103r	116r-131v	132r-155v 別筆	156r-163r	欄外註	合計
唇音	f	ア段	-ia	-	5	-	6	-	-	-	-	-	2	1	-	-	14
		オ段	-io	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
ラ行	r	ア段	-ia	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	3
		オ段	-io	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3
軟口蓋音	q	ア段	-ia	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		オ段	-io	-	3	-	2	4	-	-	-	1	1	1	-	-	11
	gu	ア段	-ia	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
		オ段	-io	-	4	-	-	2	1	4	-	1	1	-	-	1	13
合計				0	14	0	9	6	1	4	1	4	4	1	1	45	

【表 7】ア段・オ段拗短音の異例表記

		丁		1r-3v	4r-48r	49r-50v	52r-60r	60v-77v	78r-82v	84r-100v	102r-103r	116r-131v	132r-155v 別筆	156r-163r	欄外註	合計	
				-ea	-eo												
唇音	f	ア段	-ea	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		オ段	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
ラ行	r	ア段	-ea	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		オ段	-eo	-	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	3
軟口蓋音	q	ア段	-ea	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		オ段	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	gu	ア段	-ea	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		オ段	-eo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
合計				0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	3	

これらの結果から、異例表記は、バレット一人の手により記されたことがわかる。彼は、別筆の人物のように本則表記と異例表記を峻別する意識をもたず、表記していたものと考えられる。

彼は来日してから日も浅く、版本に見られるような開合表記の原則さえよく理解できていなかったと推測されているが（福島 1973a : 24）、しかし拗音節に関する限り、その表記は無秩序に行われていたのではない。異例表記の現れ方は、音節頭子音の差によって決定しており、その観点からみると、彼は一つの規則、すなわち音声にしたがって記したものと考えられるのである。

5. まとめ

以上、バレット写本における拗音節の調査結果をまとめると、次のようになる。

- (一) 開拗長音では、異例表記（-eo）が、唇音（b-, m-）、ラ行歯茎音（r-）の音節に偏って出現する。反対に、軟口蓋音（q-, gu-）の音節では異例表記は一切現れない。この出現分布は、刊本の結果と等しい。
- (二) 合拗長音は、用例数そのものが少なく、刊本と完全に対照することは困難である。しかし、軟口蓋音（q-）やラ行歯茎音（r-）の音節では、刊本と似通った傾向が現れている。ただし、音節によっては、特定の語彙に本則表記が偏るなどしており、若干問題は残る。
- (三) 構成別にみると、バレット以外の別人の筆になる丁（132r-155v）では本則表記しか用いられていない。したがって、異例表記を用いているのはバレットのみといえる。しかしバレットは無秩序に記しているのではなく、音節頭子音の差に基づいて本則表記と異例表記を記していることから、音声に基づいて表記したことが窺わ

れる。

以上の通り、バレット写本の拗音節では、異例表記が音節頭子音の差によって決定していること、また表記分布は刊本とほぼ一致するという結果が得られた。これは、刊本・写本ともに、拗音節表記に「硬口蓋化」という音声的要因が介在していることを示しているといえよう。

第Ⅱ部

硬口蓋化の諸現象

第Ⅱ部 硬口蓋化の諸現象

第Ⅱ部では、第Ⅰ部のオ段拗長音で確認された硬口蓋化の2種が、上代～近世日本語の他の硬口蓋化現象にも認められることを指摘する。具体的には、中世末期日本語のエ段音節、下二段動詞での助動詞ヨウの成立、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列において、「完全硬口蓋化」と「不完全硬口蓋化」の2種の別が現れていることを指摘する。

第5章では、中世末期日本語のエ段音節における硬口蓋化について考察する。中世末期日本語の特徴を残す九州方言を、近世から現代まで文献・音声資料の双方を用いて調査し、硬口蓋化したエ段音節は、完全硬口蓋化を生じる歯茎音に限定して生じていたことを指摘する。この分布は、キリシタン資料の硬口蓋化の分布と等しいことから、中世末期日本語のエ段音節の硬口蓋化の分布として蓋然性が高いことを指摘する。

第6章では、『天草版平家物語』に見られる *deô*, *teô*, *neô* のような“本則ではない・*eô*”に焦点を当て、これらが形態音韻論的要因によって生じていた可能性が高いことを指摘する。また、*-eô* の音節を生じる、「下二段動詞+助動詞ウ・ウズル」の変遷についても触れ、この「*-eô*」の音節から助動詞ヨウが成立するには、脱硬口蓋化という音声現象が働いていたと考えられることを指摘する。

第7章では、本研究で扱った内容を整理し、拗音節における硬口蓋化の諸現象が体系的に把握できることを指摘する。硬口蓋化の関わる諸現象は、「完全硬口蓋化」と「不完全硬口蓋化」の2種の差によって、実現様相が二分して現れる。さらにその別は、子音の調音点の差に基づいていることを指摘する。また、本研究の結果から派生する問題として、キリシタン資料のオ段拗長音と、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列では、その表記区分が近似していることを指摘し、その要因には、硬口蓋化と、両者に共通した動機があることを指摘する。

第5章 中世日本語のエ段音節における硬口蓋化

1. はじめに

第I部第2-4章で述べた通り、中世末期日本語のオ段拗長音には、「完全硬口蓋化」と「不完全硬口蓋化」の2種が現れていた。この硬口蓋化の2種は、子音の調音点の差によってその別が決定しており、唇音・軟口蓋音・ラ行歯茎音では不完全硬口蓋化が、そして歯茎音（ラ行以外）では完全硬口蓋化が生じる。

では上記のような、調音点の差に基づく硬口蓋化の別は、他の硬口蓋化現象にも確認できるのだろうか。日本語音韻史上、硬口蓋化は様々な事例に関わっているが、キリシタン資料が刊行された中世期における最も代表的な例は、エ段音節の硬口蓋化である。

本章では、このエ段音節の硬口蓋化の検討を通して、前章までの分析結果の妥当性を再確認する。

2. 問題の所在

今日、中世末期日本語のエ段音節の硬口蓋化に関しては、「エ⁶⁸・セ・ゼの3音節のみが、[je] [je] [ze] と硬口蓋化していた」とする解釈がほぼ定説となっている。この説は、周知の通り、(1)のようなキリシタン資料に見えるローマ字綴りを主な論拠としている。(() は、その表記に該当する日本語の音節)。

- (1) a. ye (エ) xe (セ) je (ゼ)
b. qe (ケ) gue (ゲ) te (テ) de (デ) ne (ネ) fe (ヘ) be (ベ) pe (ペ)
me (メ) re (レ)

橋本(1928)は、エ・セ・ゼに「e」「se」「ze」ではなく敢えて(1a)の表記を当てていること、また九州や東北の方言にこうした硬口蓋化音が残っていることを根拠に、中世末期ではこの3音節のみが硬口蓋化していたと推定した。実際、セに関しては、発音について言及した部分が『日本大文典』(1604-08年)にあり、

- (2) [関東または坂東では] Xe (シエ) の音節はささやくやうに Se (セ), 又は ce (セ)

⁶⁸ キリシタン資料では、ワ行の「エ」や格助詞「へ」も、yeで表記されており、[je]と発音されていたと推測される。本稿では煩瑣を避けるために、これらのエ・へも「エ」に含める。

に発音される。例へば, Xecai (世界) の代りに Cecai (せかい) といひ, Saxeraruru (さしえらるる) の代りに Saseraruru (させらるる) といふ。

(『日本大文典』巻二, 170v 「'関東', 又は, '坂東'」)

とあることから, 当時, セは [je] が標準的な音声であり, 関東または坂東と呼ばれる地域では, それを非硬口蓋化音 [se] で発音していたことが一般に知られている。

こうしたキリシタン資料に加え, 日本語諸方言にエ・セ・ゼを硬口蓋化して発音する地域が広範に見られることも, 上記の定説を裏付ける有力な傍証となってきた。『日本言語地図』(第7-10図)や上野編(1989)「音韻総覧」が示す通り, 九州方言や東北方言, 出雲方言といった中世末期の言語的特徴を残す地域では, 上記3音節を硬口蓋化音で発音する例が多くみえ, 前掲(1)の音韻がかつて存在したであろうことを裏付けている。

ところが同じ中世期資料でも, 他の外国資料では, エ段音節の硬口蓋化の様相がキリシタン資料のそれとは大きく異なっており⁶⁹, 解釈の仕方によってはエ・セ・ゼ以外の音節でも硬口蓋化していると解釈し得ることが問題となってきた。特に朝鮮資料やロシア資料にみえる日本語のエ段音節表記に関しては, 今日まで複数の解釈が提出されており, 果たして中世のエ段音節はエ・セ・ゼだけが硬口蓋化していたのか, あるいは他のエ段音節でも硬口蓋化していたのかという点が, 依然, 議論的となっている。

本稿では, こうしたエ段音節の問題を解決する一助として, 外国資料ではなく中世末期日本語に近いとされる九州方言を観察し, その観察から, 中世エ段音節の硬口蓋化の分布を再構する試みを行う。具体的には, 外国資料を用いた考察の限界を挙げた後(3節), 近世・近代期の国内文献資料(4節)及び現代の音声資料(5節)を用いて, 九州方言の硬口蓋化には従来の指摘とは異なる分布が現れることを明らかにする。そしてその分布が通言語的な硬口蓋化の傾向に一致すること(5.1節), またキリシタン資料の硬口蓋化音節の表記とも平行的であることを示し(5.2節), 当時の硬口蓋化の分布の一つとして十分想定し得るものであることを述べる(6節)。

3. 先行研究

3.1 朝鮮資料とエ段音節の通時的变化について

中世日本語のエ段音節を推定させる外国資料には, キリシタン資料の他に, 朝鮮資料, 中国資料, 及びロシア資料がある。中でも注目されてきたのは, 朝鮮資料の『伊路波』(1492年)と『捷解新語』(原刊本, 1676年)の日本語のエ段音節に付された諺文音注である。キリシタン資料(16C末-17C前半)の前後に成立したこれらの資料では, エ段音節の各行

⁶⁹ 中国資料の調査(大友1963)もあるが, 概略, キリシタン資料と同様の結果が得られている。

に硬口蓋性を表わすと見られる *yəi* と *yə* の二表記が記されている⁷⁰。

『伊路波』の *yəi* と *yə* について、河野 (1965) や浜田 (1970) は朝鮮音韻史やキリシタン資料との齟齬に鑑みて硬口蓋性を認めなかったが、ラング (1971) は複数の理由 (後述) から積極的に硬口蓋性を認め、エ段音節全体が硬口蓋化していたと推定した。

『捷解新語』に関しては解釈が分かれており、単独母音エのみに硬口蓋性を認める立場 (森田 1957) や、*yəi* に [-je], *yə* に [-e] を再構する立場 (李 2003) などがあるが一定の結論に達していないが、杉戸 (1989) に代表されるように、*yəi* と *yə* には朝鮮語の音声学・音韻論的制約が反映されている可能性があるため日本語の音価推定には考慮すべきではないという、外国語の干渉を憂慮した意見も少なくない⁷¹。

しかし上述のラング (1971) は、エ段音節全体が硬口蓋化していた根拠として、『伊路波』の諺文表記を挙げるほかに、次の2点も論拠として掲げている。

- (3) a. 鎌倉から室町期にかけて、*/e/ + /u/ > /yoo/* (例: *keu > kyoo* [今日]) という拗長音化があらゆる音節で生じている。
- b. 現代九州方言で、すべてのエ段音節を硬口蓋化音で発音する地域がある。

すなわち、『伊路波』が示すようにあらゆるエ段音節が硬口蓋化していたからこそ、鎌倉～室町期にかけてあらゆる音節で */e/ + /u/ > /yoo/* の拗長音化が生じたのであり (3a)、そして『伊路波』から約1世紀後のキリシタン資料までの間に、エ・セ・ゼ以外では硬口蓋性が消失したと推定する。キリシタン資料より後年の『捷解新語』に、消失したはずの硬口蓋化したエ段音節が記されているという矛盾については、これらが江戸期 (及びそれ以前の) 九州方言を写したためであると解釈し、今日の九州方言でもあらゆるエ段音節を硬口蓋化して発音する地域があること (3b) を根拠とする。

このようにあらゆるエ段音節に硬口蓋化を想定するラングの説は、*/e/ + /u/ > /yoo/* の拗長音化をより合理的に説明するものとして首肯する立場 (柳田 1993 他) も多い。

一方で柳田 (1993) は、ラングと同様、朝鮮資料のエ段音節すべてに硬口蓋性を想定する立場をとりながらも、文法現象も考慮に入れてエ段音節の変化を次のように想定する。

- (4) a. 院政期にサ行拗音 [*ja, fu, fo*] が生じたため、同音衝突を避けてサ・ス・ソが [*ja, fu, fo*] > [*sa, su, so*] と非硬口蓋化した。しかしセは拗音が生じなかったために [*je*] のまま中世に伝存した (ゼも同様)⁷² (1993: 1009-1010)。
- b. 中世に入り、連声のニエ (例: 玄恵^{ゲンニエ}⁷³) が生じたほか、ア・ヤ行下二段動詞で

⁷⁰ 音節表記は、河野 (1965) に従った。

⁷¹ 趙 (1997) も、*yə* と *yəi* の出現環境に韓国語の干渉があることを指摘している。

⁷² このサ行拗音の発生過程については浜田 (1964) の論が踏まえられている。

⁷³ 『日本大文典』(巻二, 177) に「*Guennhe fôin* (玄恵法印)」があり、ニエという連声のあったことを

エ [i̥e] の勢力が増大した。その結果、類推の働きによりケ [k̥i̥e], テ [t̥i̥e],
へ [ɸ̥i̥e] など他の音節にも硬口蓋化が拡大した (同上 : 1010-1012)

- c. しかしエの非硬口蓋化 ([i̥e] > [e]) に伴い、京畿では十分定着していなかった
[k̥i̥e] [t̥i̥e] [ɸ̥i̥e] などが衰退し、それに引かれてセ・ゼも近世期に非硬口蓋
化した (同上 : 1012-1014)。

柳田は、『伊路波』は (4b), キリシタン資料は (4c) の時期に成立したと推定しており、
後年の『捷解新語』があらゆるエ段音節を硬口蓋化した表記で記しているのは、ラングと
同様、九州方言を記録したためであると解釈する。エ・セ・ゼ以外の硬口蓋化が中世以降
に生じたとみる点がラングとは異なるものの、中世の一時期にエ段音節全てが硬口蓋化し
ていたと考える点や、『捷解新語』を九州方言の記録であるとみる点は等しい。

即ち、エ段音節すべてが硬口蓋化していたとする説は、朝鮮資料を主要論拠としつつも、
/e/ + /u/ の拗長音化や九州方言をも考慮に入れて説明しているところに特徴がある。

3.2 問題点

しかし上記二氏の仮説に関しては、次の2点の問題点が指摘できる。

1点目は、中世の一時期にあらゆるエ段音節が硬口蓋化していたのなら、なぜ日本語諸
方言に [k̥i̥e] [t̥i̥e] [ɸ̥i̥e] のような音節が広く残っていないのかという点である⁷⁴。エ・
セ・ゼ以外の硬口蓋化した音節が先に衰退した理由を、柳田は「十分定着していなかった」
(1993 : 1013) ことに起因するとみているが、発生の先後関係からみればむしろ古くから
ある音節 [je, ze] が先に衰退し、新しい音節の方が定着していくという過程の方があり得
べきものであり、なぜそれが生じなかったのかが説明されねばならない。

2点目の問題点は、現代九州方言におけるエ段音節の硬口蓋化についてである。確かに
九州ではエ段音節全体硬口蓋化している方言も報告されているが (長崎県口之津方言——
南 1959), 一方で、セ・ゼ以外はとくに注意深くなければ気付かないという指摘や (亀井
1964 : 308), セ・ゼ・テ・デ・ネの音節に偏って硬口蓋化が著しいという方言の報告も多
い (日高 1982, 木部 1992, 杉村 2010)。また、18C 薩隅方言を収めるゴンザ関連のロシ
ア資料でも、エ段音節では、各音節によって硬口蓋化の現れ方に異なりのあることが指摘
されている (駒走 2004, 江口 2006⁷⁵)。これらの点から考えると、九州方言は、エ段音節

窺わせる。『音曲玉淵集』(1727年)にも「輪廻 (ルビ:リンネ ニエトモ)」(巻一 13ウ)などの用例が見える。

⁷⁴ 奥村 (1972 : 136), 出雲 (1978 : 198) もこの点を疑問視している。

⁷⁵ ただし両氏は調査対象とした資料数の差により、解釈にやや相違がある。駒走 (2004) は当時薩摩でケ・ゲ・テ・ネなどの複数のエ段音節に音韻の区別があったとみるのに対し、江口 (2006) は音韻的区別とは見ず、-ai・-oiの連母音から生じたエ段音節と本来のエ段音節を区別しようとする過程が、各頭子音により異なっていたことを推定している。

全体が硬口蓋化したことを証するものであるよりも、硬口蓋化の偏在を示すものであり、特定の音節に偏って硬口蓋化が生じている点にむしろ注目すべきであるように思われる。

では九州方言のエ段音節の硬口蓋化は、通時的にどのような偏在の分布が確認できるのか。そして、その分布から中世日本語の硬口蓋化をいかに再構することができるか。以下ではその2点に着目しつつ考察を行いたい。

4. 文献および音声資料における様相

本節では、近世期以降の国内資料にみえる九州方言のエ段音節の様相を整理する。九州方言は大きく豊日・肥筑・薩隅の三方言に区分されるが、ここではすべてを観察対象とする。なお、セ・ゼは今日まで硬口蓋化が残ったままなので考察対象外とする。

4.1 文献

4.1.1 近世期資料

九州方言のエ段音節の硬口蓋化に関するもっとも早い記述は、谷川士清『倭訓栞』(1777-1887年刊)に見える⁷⁶。本書では、豊後方言のテが硬口蓋化音で現れる。

(5) 又豊後辞の哥に

きのふ見ちえきふ見んしひかくいしいに二日と見ずはうどうどうしやう

ちえ反て也きふはけふ也 (後略) (『和訓栞大綱』巻一, 19 オウ)

(6) △ちえ 豊後三詞に多しちえ反て也よててるをちえるといひ鉄鉦をちえつぼうといふ也 (『倭訓栞』後編巻十二, 1 ウ)

(5) の『和訓栞大綱』の最終的な成立時期は安永二(1773)年以後、(6) の『和訓栞』後編巻十二は明治二十(1887)年の刊行とされていることから(尾崎 1984 参照)、18世紀半ばにはすでに、特定の品詞に偏らずテが硬口蓋化音であったと推定される。長崎方言を中心に収める『筑紫方言』(1830頃か)でも、(7) のように「寺」のテが硬口蓋化音であったことを示す記述があり、江戸出身の著者(松田 1978 参照)にはそれが「唐言葉」のように聞えたことを伝えている。

(7) 寺 ちえら ちえを二字一音につめて ちえらと云 是も唐言葉のうつりたるものかしるへからず (「追加」15 オ, 翻刻 53 頁, 傍線ママ)

⁷⁶ 三ヶ尻(1937: 7), 『九州方言の基礎的研究』(1969: 612)などに既に指摘がある。

上記のようなテに平行して、デにも『倭訓栞』に硬口蓋化の記述がある。

- (8) たんと 俗語也多き意にいへり蒙^レ求の姜^レ維臆^レ斗の字也遠参にてでこといひ豊^レ後にてぢえこといふちえ反で也武^レ蔵にてはかうすといふ

(『倭訓栞』後編卷一一, 15 オ)

(8) では多量の意を表す「たんと」が、遠州・参州では「でこ」、豊後では「ぢえこ」と発音することを指摘している。「でこ」は『日葡辞書』(1603-04年)に卑語として収載されており、「Decoi (でこい) 大きな (もの)、または、大量の (もの)」, 「Decō (でかう) 副詞. ひどく.」が見える。前掲 (8) の「ぢえこ」は「でこ」のデが硬口蓋化したものであり、当時、すでにテとデが平行して硬口蓋化していたことをうかがわせる。

現在、このようなテ・デの硬口蓋化は、大分県や宮崎県といった旧豊後・日向地方に聞かれることが知られているが(九州方言学会 1965 : 246, 255 など)、近世期資料では肥後方言の一部にも確認される。安永九(1780)年写『肥後方言茶談』⁷⁷では、肥後国「阿蘇南郷」の方言で、(9)「手」や(10)終助詞デを硬口蓋化した例が見える。

- (9) ^{ツラア}面ニヤア^{グジャ}痘癩バツカリ、^{カミヤアアカシラウチカブツ}髪ハ赤頭打蒙テ、^{チエ}手^{ユビヤア}ノ指ハキヤアマガリ、^{アダア}足ノ跟ハアカガレ、グーハ^ンニウガキレテ見ユウ。(『肥後方言茶談』23ウ)

- (10) 「鯨を欲しがる兒とそれを咎める婆に対し」^ニ叟^{ソラ}ソラ^ノ御讀物ガハジマル^デエト。(『肥後方言茶談』20ウ)

本書は内容的にも言語的にも安永期の肥後方言を使用した法話と認められるもので、ロドリゲス『日本大文典』(1604-08年)における「肥前・肥後・筑後」の音韻・文法の諸特徴(例: ai・oiをae・oeと発音するなど)を複数伝える(米谷 2004)。ここから推定すると、テ・デの硬口蓋化は近世半ばに新たに生じたというよりも、中世末期頃から伝存してきた可能性も考えられる。またこのように肥後地方にも確認できるということは、テ・デの硬口蓋化が当時九州地方で相当に拡大していたことを推測させる。

さらに時代は下るが、文政十二(1829)年没の太田全斎『俚言集覽』では、薩摩地方でのネの特徴を次のように伝える。稿本の記述を(11)に挙げる。

⁷⁷書誌情報については米谷(2004)参照。著者は「隈本」の村井椿樹。本文末に「コレハ皆、肥後国ニテ阿蘇南郷ト云、至極田舎ノ言葉也」とあり、肥後方言であることが知られる。奥書に「安永九(注: 1780年)年庚子九月中旬於浄泉寺写之」とあることから近世中期の成立である。なお、九州方言の代表的資料である『久留米はまおき』、『菊池俗言考』、『長崎歳時記』、蒲原大蔵の戯作にはこうした記述は見られない。硬口蓋化は音声的なゆれとして存在していたので当地の話者には格別意識されなかったのかもしれないが、本書の著者は熊本出身であったため、阿蘇の硬口蓋化を他方言の音声的特徴として観察できたのかもしれない。

(11) ニエ 煮○薩摩にて子の音をニエと云舟をフニエと云り

(稿本『俚言集覧』仁部, 81)

近世薩摩地方の硬口蓋化の記述は、上記(11)以外に見当たらないが、これらは、セ・ゼ・テ・デの硬口蓋化に加えて、ネも硬口蓋化していたと理解される。18C 薩摩漂流民のゴンザが携わったとされるロシア資料では、テ・デを含む複数のエ段音節で硬口蓋化が確認されていることから(駒走, 江口前掲論文)、薩摩地方では他地域に比して硬口蓋化が著しく、特にネが顕著な特徴として聞かれていたと考えられる。

4.1.2 近代期資料

近代期も、近世期と同様に、テ・デ・ネに偏った硬口蓋化が確認される(以下、刊行年順に抄出。()は対応する標準語、あるいはその意味とされたもの)。

- (12) ガツチエン (合点) チエー (手) ドゲーシチエン (ドウシテモ) ウワヂエ (上手) ヂ^ニエル (出ル) ツイヂエ (序)

(『大分県方言類集』明治三五 [1902] 年)

- (13) ちえつ (鐵) なんでん・なんぢえん (それでも) ぢえる (出る) あにえ (姉) にえこ (猫) にえつから (絵) (『鹿児島方言集』明治三九 [1906] 年)

- (14) 若し又、父の怒り、猶解けず、母をも加て、叱りつくるに、『[前略] 鼻垂ガ、畜生、ナニユ、ホユレ (泣) か、一所に出チエ行きあがれ。』

(福岡県, 『築上郡志』上巻 41 頁, 明治四五 [1912] 年, 傍点ママ)

- (15) チエヌグイ (手拭) アサツチエ (明後日) チエツブ (鉄砲) ヂエキル (出来る) イツヂエン (いつでも) (宮崎県『児湯郡郷土誌』大正一四 [1925] 年)

- (16) チェミシケ (人手がなくて忙しい) ヒヂェル (栄華を極める, 秀でるの訛)

(『大隅肝属郡方言集』昭和一七 [1942] 年)

テ・デの硬口蓋化は、豊後地方に記述される例が目立ち((12), (14), (15)), 薩摩地方ではそれに加えてネも硬口蓋化している記述(13)が見える。ただし上記資料での各エ段音節は、前掲(13)「なんでん・なんぢえん」のように硬口蓋化していない音節との間でゆれがあることが多く、非硬口蓋化音で記されたテ・デ・ネも少なくないことから、これらはあくまで音声の揺れとして生じていることが窺える。

4.1.3 小結 1

上述のエ段音節を子音の調音点別に分類すると、硬口蓋化した音節はテ・デ・ネという

頭子音が歯茎音 [t, d, n] の音節に偏って生じていることがわかる。反対に、ケ・ゲの軟口蓋音 [k, g] やベ・メといった唇音 [b, m] の音節では硬口蓋化していることを示す記述が見当たらない。

実際、鹿児島県知覧町門之浦のエ段音節を調査した木部（1992）においても、テ・デ・ネの歯茎音では硬口蓋性の音が現れているが、それ以外の行では硬口蓋化が認められず、過去に硬口蓋化していたという「兆候も痕跡も見つけることはできず、何ともいえない」（113頁）と指摘する⁷⁸。すなわち九州方言のエ段音節では、歯茎音と、軟口蓋音・唇音との間で硬口蓋化に異なる傾向が現れており、前者では硬口蓋化が著しいのに対し、後者ではほぼ生じていないという非対称的な分布があることになる。

4.2 音声資料

本節では、音声資料をもとに、現代九州方言におけるエ段音節の硬口蓋化を観察し、前節までの調査で不可能であった数量的調査結果を示す。調査資料には『全国方言資料 九州編』（1954年採録）の「自由会話」を用いた。本資料は明治 - 大正生まれの話者を全16地点で調査したものである。なお、本資料で用例が不十分な場合には『全国方言談話データベースふるさとことば集成』18-20巻（2001年）のデータで補った。

4.2.1 調査方針

調査は、文字化資料を基に稿者が音声を再確認しつつ行った。エ段音節すべてを調査対象としたが、「へ」は中世日本語と子音の調音点が異なること、「ぺ」は用例数が僅少であることにより調査から除外した。また、[-ai] [-oi] の連母音が融合した [-(j)e(:)]、テ・デが [tʃi] [(d)ʒi] となった音節、助詞・間投詞、d と r の交替例などは調査の厳密性を考慮して除外した。硬口蓋化の判定は、(17) の基準に従った。

- (17) a. 硬口蓋化あり：拗音表記の音節であるか（例：/se/ を「シェ」）、脚注で硬口蓋化の旨が注記されている音節で、稿者にも硬口蓋化音が確認できたもの。
- b. 硬口蓋化なし：直音表記の音節（例：/se/ を「セ」）であり、稿者にも硬口蓋化音が聞き取れなかったもの。あるいは拗音表記であっても、稿者に硬口蓋化音が聞き取れなかったもの。

音節は、歯茎音 (/s, z, n, t, d/)、軟口蓋音 (/k, g/)、唇音 (/b, m/) の子音の調音点別に配置した。調査された16地点は「総説」（18頁）に従って4地域に区分した⁷⁹。

⁷⁸ ただし知覧方言ではセ・ゼは硬口蓋化していないことが報告されている（木部1992）。この2音節に関しては、独自の変化を遂げたようである。

⁷⁹ 地域の分類は次の通り。

④豊前豊後方言：③福岡・築上郡岩屋村鳥井畑，⑩大分・大分郡西庄内村，⑪大分・南海部郡上野村

4.2.2 調査結果

調査結果が【表1】である。表のうち、上段の「/」の左は硬口蓋化している音節数、右が硬口蓋化していない音節数を示す。下段はその音節のうちの、硬口蓋化した音節数が占める割合(%)である。

【表1】『全国方言資料』九州編におけるエ段音節の硬口蓋化

	県	㊤豊前豊後方言			㊤㊤の中間			㊤肥筑方言					㊤薩隅方言				
		福岡	大分		福岡	宮崎		福岡	佐賀		長崎		熊本		鹿児島		
調音点	郡・市・音節	③築上郡	⑩大分郡	⑪南海部郡	①福岡市	⑫日南市	⑬東臼杵郡	②三井郡	④佐賀郡	⑤東松浦郡	⑥南高来郡	⑦北松浦郡	⑧熊本市	⑨上益城郡	⑭鹿児島市	⑮枕崎市	⑯肝属郡
歯茎音	セ	-/4 0	9/4 69.2	15/7 68.2	6/7 46.2	10/ 100	7/4 63.6	-/10 0	6/5 54.5	2/3 40	3/ 100	22/1 95.7	5/7 41.7	-/2 0	2/21 8.7	4/5 44.4	13/2 86.7
	ゼ	-/2 0	-/4 0	8/ 100	1/ 100	4/ 100	6/ 100	-/2 0	2/ 100	- -	- -	2/ 100	1/1 50	-/4 0	-/2 0	-/1 0	- -
	ネ	1/6 14.3	-/6 0	-/4 0	-/1 0	-/8 0	-/11 0	-/7 0	-/2 0	-/7 0	-/5 0	-/6 0	-/2 0	- -	-/5 0	-/12 0	-/7 0
	テ	32/4 88.9	9/7 56.3	41/19 68.3	2/71 2.7	9/ 100	16/6 72.7	-/40 0	3/58 4.9	-/63 0	1/62 1.6	-/97 0	0/55 0	-/49 0	-/16 0	30/15 66.7	2/10 16.7
	デ	11/ 100	5/8 38.5	20/6 76.9	-/88 0	1/12 7.7	23/7 76.7	-/51 0	1/33 2.9	-/14 0	-/34 0	-/21 0	-/33 0	-/24 0	-/39 0	3/5 37.5	-/49 0
	レ	-/13 0	-/5 0	-/10 0	-/23 0	-/7 0	-/18 0	-/10 0	-/4 0	-/6 0	-/9 0	-/6 0	-/7 0	-/20 0	-/9 0	-/8 0	-/5 0
軟口蓋音	ケ	-/18 0	-/34 0	-/10 0	-/37 0	-/19 0	-/22 0	-/12 0	-/8 0	-/14 0	-/26 0	-/3 0	-/21 0	-/33 0	-/9 0	-/3 0	-/10 0
	ゲ	1/25 3.8	-/9 0	-/24 0	-/7 0	-/8 0	-/11 0	-/11 0	-/1 0	-/3 0	-/8 0	-/3 0	-/3 0	-/2 0	-/2 0	-/9 0	-/18 0
唇音	メ	-/3 0	-/13 0	-/11 0	-/13 0	-/7 0	-/15 0	-/23 0	-/8 0	-/6 0	-/4 0	-/7 0	-/2 0	-/25 0	-/12 0	-/19 0	-/2 0
	ベ	- -	-/2 0	-/1 0	-/2 0	-/4 0	- -	-/2 0	-/8 0	-/1 0	-/1 0	-/2 0	- -	-/6 0	-/1 0	-/1 0	-/1 0
	エ	-/8 0	-/2 0	-/3 0	1/16 5.9	-/8 0	-/7 0	-/8 0	-/7 0	-/4 0	-/3 0	-/5 0	-/5 0	- -	-/11 0	1/20 4.8	7/7 50.0

まず地理的な分布に関しては、㊤豊前・豊後方言を含む地域、および㊤薩隅方言で硬口蓋化が顕著にみられるが、㊤肥筑方言ではセ・ゼ以外はほとんど見られないという点が確認できる。豊前・豊後地方、薩隅地方に硬口蓋化が著しいという地域分布は、近世期からの諸方言書の記述(4.1.1-4.1.2節参照)と一致する。

音声的な分布では、次のような点が指摘できる。

- ㊤肥筑方言：②福岡・三井郡善導寺町，④佐賀・佐賀郡久保泉村川久保，⑤佐賀・東松浦郡有浦村，⑥長崎・南高来郡有家村，⑦長崎・北松浦郡中野村，⑧熊本・熊本市中唐人町，⑨熊本・上益城郡浜町
 ㊤㊤の中間：①福岡・福岡市博多，⑫宮崎・日南市飢肥町，⑬宮崎・東臼杵郡南方村
 ㊤薩隅方言：⑭鹿児島・鹿児島市，⑮鹿児島・枕崎市鹿籠，⑯鹿児島・肝属郡高山町麓

- (18) a. セ・ゼは3地点(②③⑨)を除き、ほぼ [je] [ʒe] と硬口蓋化している。
 b. セ・ゼが硬口蓋化している地域ではテ・デも硬口蓋化する場合が多い(④⑩⑪⑫⑬)。
 c. ネの硬口蓋化は、テやデも硬口蓋化している地域で生じている(③)。
 d. ケ・ゲが硬口蓋化している例は極めて乏しく(③)、ベ、メ、レ⁸⁰では硬口蓋化した例は確認できない。

(18a)は上野編(1989)「音韻総覧」でも指摘される九州方言の一般的な傾向である。(18b)も、セ・ゼの硬口蓋化に平行する現象として大分県や宮崎県北部の方言解説でしばしば指摘があるものであり、実際に、セ・ゼを硬口蓋化させた話者(19a)(20a)は、(19b)(20b)のようにテ・デも硬口蓋化させる。

- (19) a. シエツカクノ オジエンチャキー (せっかくの おぜんだから)
 b. コンハシヂェカ クチェミチュクリ (この はしでもって 食べてみてくれ)
 (⑬宮崎県東臼杵郡, a, b 共に話者 m₁, 413 頁)
- (20) a. キューワ ハッサクノ シエツクデ (きょうは 八朔の 節句で)
 b. コーユ コツモ アルモント オモチ キーチュー⁸¹ (こんな ことも あるものだと 思って行って)
 (⑥長崎県南高来郡, 話者 m₁, 共に 194 頁)

テ・デの硬口蓋化は概して助詞(て 124, ても 13, で 29)や接続詞(そして 13, それで 4)に目立つが、名詞(手拭 1, お寺 1), 動詞(出る 18, 出来る 3)にも現れる。

他方、ネの硬口蓋化は、本資料では③福岡県築上郡の(21a)のみに出現する。ネの硬口蓋化は、テ・デが硬口蓋化している地域に限られて出現しており、用例も乏しい。

- (21) a. ソイヂェ ホニエム⁸² オリヨッタヨ (それで 骨も 折ったものだよ)
 (③福岡県築上郡, 話者 m, 92 頁)
- b. ユーレイガ ヂェタ ユーレイガ ヂェタ チュチ (「ゆうれいが 出た、ゆうれいが 出た」と言って)
 (同上, 97 頁)

(21)の話者は計5回発声するネのうち、非硬口蓋音の [ne] を4回用いる。テでは計13回のうちわずか1回しか非硬口蓋音 [te] を用いないのと対照的であり、同じ歯茎音で

⁸⁰ ラ行が歯茎音でありながら硬口蓋化しにくいことは、Mester&Itô (1989)等のオノマトペ研究でも指摘されている。ラ行の硬口蓋化は議論の多い問題であるため以下の考察では除外する。

⁸¹ 194頁の脚注6「[ki:ʒe:]」。

⁸² 97頁の脚注2「[honɕemu]」。

あっても両者には差があることがわかる。

本資料ではネの硬口蓋化の例が乏しいので、補足資料として本資料から 23 年後に収録された『ふるさとことば集成』の鹿児島県揖宿郡穎娃町 1977 から補うと、“全部”を意味する「根から」のネに硬口蓋化が聞かれる。

(22) 185C : ニエツカイ モドラセダチュ (全部 戻らせたそうだ) (60 頁)

(22) の女性話者 (生年不明) のエ段音節は、以下の (23a-c) の通り、セ・テ・デでも硬口蓋化しており、大方の歯茎音を硬口蓋化させていることになる⁸³。

(23) a. 348C : シエネンクワイワ トーガナ (青年会は 10 日ね) (88 頁)

b. 183C : アー ソン チェサツチャッタ チュコツチャッタチュハラナ (ああ その手先だった ということだったそうだね) (60 頁)

c. 276C : コノマエモ ヂエダナー。(この前も [テレビに] 出たね) (76 頁)

こうした歯茎音の特色に対し、前掲 (18d) の通り、ケ・ゲやベ・メのように、軟口蓋子音 [k, g] や唇音子音 [b, m] が頭子音となるエ段音節では硬口蓋化した音節はゲの一例を除き⁸⁴聞かれない。⑮鹿児島県枕崎市のように歯茎音 (24a, b) を著しく硬口蓋化させる薩隅方言であっても、「飯」のメは (24c) の通り硬口蓋化しない。

(24) a. アン ツケデコンニュー キーモシエントオバ ハヂエ クレキシコヂエ (漬
け大根を 切りもしないのを 歯でかみ切って)

b. ソシチェ アトハ チェオ パシパシタテー (そして あとは 手を パチ
パチ たたいて)

c. メッシモ マ ムンノメツジガ マレケン アロカイ (御飯も まあ 麦
の 御飯が まれに)

(a-c すべて⑮, 話者 m, 475 頁)

⑪大分県南海部郡でも同様に、同一話者によるセ・テは硬口蓋化するが (25a), 「けれども」のケ (25b), 「鯛麺」のメ (25c) は非硬口蓋化音になる。

(25) a. オキューヂニンガ シエワシーニ (お給仕人が 忙しいのに) [中略] ソーシ

⁸³ 話者 C はゼを硬口蓋化させていないが、他の話者は硬口蓋化している。(例: 412B 「ワッジエ カツドーオ シチョッタタイバツ (たいへんな 活動を していたけれども)」 98 頁)。

⁸⁴ ゲの硬口蓋化は③の「ゲタン (げたが)」のゲの脚注に, 「[gɛtan] 「ヂエタン」に近い。」(92 頁) とあるのみ。この地域では歯茎音に硬口蓋化が著しいため、軟口蓋音にも一部生じたか。

- チェ シヨリマシタ (そうして やってました) (話者 f, 344 頁)
- b. ソンナ コター ナイケンド。(そんな ことは ないけれど) (f, 346 頁)
- c. タイメン チュテナー (たいめん [鯛麵] といってね) (f, 344 頁)

『ふるさとことば集成』18-20 巻の九州諸県でも、軟口蓋音や唇音では、少なくとも調音点を変えるような硬口蓋化や、[-iɛ] と発音するようなエ段音節の硬口蓋化は確認できない。すなわち現代九州方言でも、歯茎音の音節とそれ以外の音節においては、硬口蓋化の現れ方に異なりがあることが確認される。

4.2.3 小結 2

以上の近世から現代までの様相をまとめると、九州方言のエ段音節の硬口蓋化は【表 2】のようにまとめられる。

【表 2】九州方言のエ段音節の硬口蓋化 (概略)

歯茎音		軟口蓋音		唇音	
/se/	[ʃe]	/ke/	[ke]	/me/	[me]
/ze/	[ʒe]	/ge/	[ge]	/be/	[be]
/te/	[te~tʃe]				
/de/	[de~dʒe]				
/ne/	[ne~ne]				

※母音 /'e/ は省略した。

セ・ゼでは [ʃe] [ʒe] がほぼ専一に用いられ、テ・デ・ネにおいても [tʃe] [dʒe] [ne] という硬口蓋化した音節が生じる場合がある。ただしテ・デ・ネの硬口蓋化は同一語あるいは同一話者においても [te~tʃe] [de~dʒe] [ne~ne] のようにゆれることから、音便のような形態音韻論的な規則性があるのではなく、音声的なゆれとして偶発的に出現していると考えられる。ただしネの硬口蓋化は、テ・デの硬口蓋化が生じる頻度より低い。一方、軟口蓋音 [k, g] や唇音 [b, m] では調音点を変えるような硬口蓋化は確認できず、硬口蓋化そのものもほとんど生じていない。

【表 2】から明らかなように、上記のような硬口蓋化の非対称的な生じ方は子音の調音点の相違により生じていることがわかる。すなわち歯茎音 (coronal) という前舌子音と、非前舌子音である軟口蓋音 (dorsal), 唇音 (labial) では硬口蓋化のパターンが異なっており、前者では主要調音点を変える硬口蓋化が生じているのに対し (例: [t] → [tʃ]), 後者ではそのような例が生じていないことが窺える。

5. 考察

5.1 硬口蓋化の非対称性——通言語的傾向——

前節で指摘したような、調音点の差によって生じる硬口蓋化の非対称性は、九州方言に限らず、通言語的に確認できることが近年明らかにされている (Kochetov2002・2011, Bateman2007・2011)。子音を labial・dorsal・coronal の調音点別に分類して、それぞれの硬口蓋化の特徴をまとめると、次のようになる。

- (26) a. labial の硬口蓋化は、coronal のそれよりも有標であり、生じることが極めて稀である (Kochetov2002 : 52)。硬口蓋化を 2 種 (full palatalization (完全硬口蓋化) / secondary palatalization (不完全硬口蓋化)⁸⁵) に分類して観察しても、諸言語で同様の結果が得られる (Bateman2011 : 591-593)。
- b. 子音の調音点を変える完全硬口蓋化は coronal と dorsal の両方に生じるが (例 : /t/ → [tʃi], /k/ → [tʃi]), coronal で生じている言語の方が多い (Bateman2011 : 592, Kochetov2011 : 1671)
- c. 完全硬口蓋化は調音法によっても生じやすさが異なっており、閉鎖音や摩擦音にもっとも生じやすく、流音、鼻音、放出音がそれに次ぐ (Bateman2011 : 593)。

上記の諸特徴は、九州方言の硬口蓋化の分布とよく合致する。九州方言では唇音 /b, m/ にはほぼ硬口蓋化が生じておらず ((26a) と合致)、歯茎音 /s, z, t, d, n/ の音節にのみ子音の調音点を変える硬口蓋化が生じる ((26b) と合致)。しかしそうした完全硬口蓋化の中でも、鼻音 /n/ の頭子音をとるネには硬口蓋化が生じにくい ((26c) と合致)。

すなわち硬口蓋化は、あらゆる音節で等しく生じることよりも、coronal とそれ以外の音節で異なって生じる方が、より通言語的傾向に沿うものであることがわかる。

5.2 硬口蓋化の非対称性——キリシタン資料での現れ——

では上記のような硬口蓋化の分布は、中世期資料には確認できないものであるのか。

前掲 (1) の通り、現存するキリシタン資料のエ段音節には、上記の硬口蓋化の分布が現れていない。しかし、エ段音節と同様、硬口蓋化という現象を生じているオ段拗長音の音節には、前節で言及したような硬口蓋化の非対称的な分布が認められる。

キリシタン資料におけるオ段拗長音のローマ字綴りは、【表 3】の通りである。

⁸⁵ 本研究では、Full palatalization を「完全硬口蓋化」、Secondary palatalization を「不完全硬口蓋化」と称して両者を区別した。以下言及の際はこの日本語の名称を用いる。

【表3】キリシタン資料（『日葡辞書』）のオ段拗長音表記

行	バ	ハ	マ	ラ	カ	ガ	サ	ザ	タ	ダ	ナ
開拗長音	biö beö	fiö feö	miö meö	riö reö	qiö (qeö)	guiö [gheö]	xö	jö	chö	giö	—
合拗長音	beô biô	feô fiô	meô miô	reô riô	qeô (qiô)	(gueô) guiô	xô	jô	chô	giô	nhô
調音点	唇			歯茎	軟口蓋		歯茎				
硬口蓋化	不完全硬口蓋化					完全硬口蓋化					

※注1 上段が本則表記，下段が異例表記。

注2 () は『日葡辞書』で用例数が僅少の例。他資料では多数現れる場合もある。

[] は『日葡辞書』には見えないが他資料に僅かに見える例（竹村 2012）。

開拗長音（開音の拗長音）と合拗長音（合音の拗長音）の双方において、二様の表記をとる音節と一様の表記しかとらない音節が、エ段音節と同様、子音の調音点の差によって区分されていることがわかる。二様の表記（-iö と -eö, -eô と -iô）は、調音点が /b, f, m, r, k, g/ という唇音や軟口蓋音、ラ行歯茎音の音節に偏って生じており、反対に一様の表記は、ラ行を除く歯茎音 /s, z, t, d, n/ の音節にしか見られない。前者の二様の表記には音声的な差異があると想定されることから、オ段拗長音には、二様に聞こえた音節と一様にしか聞こえなかった音節があったことになる（竹村 2011・2012，本書第2・3章参照）。

橋本（1928：260-261）は、早くから合拗長音の -eô と -iô に音声差があることを指摘しており、特に「-eô」の表記は、/e/ + /u/ から /yoo/ へ拗長音化が完了せず未だエ段音を残存させたものであることを指摘している。この説に基づくと、beô, feô, meô, reô, qeô, gueô の唇音や軟口蓋音の音節では、歯茎音の音節より拗長音化が遅れていたことになる。ではなぜこのように、音節により拗長音化の遅速が生じているのだろうか。

/e/ + /u/ の拗長音化では、硬口蓋化したエ段音節がその進行に関与したであろうことが指摘されてきた（ラング前掲論文）。その過程においてエ段音節の硬口蓋化が次のように影響を及ぼしたと考えると、両者の相関性がより合理的に説明される。

【表4】合拗長音表記とエ段音節の硬口蓋化の対照

合拗長音 表記	beô biô	feô fiô	meô miô	reô riô	qeô (qiô)	(gueô) guiô	xô	jô	chô	giô	nhô
エ列音節	[be]	[fe]	[me]	[re]	[ke]	[ge]	[je]	[ʒe]	[te~ tje]	[de~ dze]	[ne~ nje]
調音点	唇			歯茎	軟口蓋		歯茎				

※注 () は【表3】注2に同じ。

まず、【表4】の通り、キリシタン資料の合拗長音表記と、エ段音節の硬口蓋化の分布は、平行的に現れている。硬口蓋化を生じにくい唇音や軟口蓋音のエ段音節では未だ拗長音化

を完了していない *-eô* が残っているのに対し、硬口蓋化を生じている歯茎音のエ段音節では、完全に拗長音化した表記しか現れない。

即ち、ベ [be]・メ [me]・ケ [ke] のような唇音や軟口蓋音の音節では、エ段音節そのものに硬口蓋化が生じにくかったために /e/ + /u/ > /yoo/ の拗長音化も進行しにくく、結果、エ段音節を残存させた音声 (*-eô*) が中世末期まで残ったと推定される。一方でセ [je]・ゼ [ze]・テ [te~tje] といった歯茎音では、エ段音節自体がすでに硬口蓋化していた（あるいは頻繁に硬口蓋化を生じていた）ために、拗長音化が先駆けて進行し、キリシタン資料でも完全な拗長音を表わす表記が採られたものと考えられる。

エ段音節の硬口蓋化の分布は、直接的にはキリシタン資料には現れていない。しかし上記のようにオ段拗長音との相関性を考慮すれば、その分布が潜在的に存在していた可能性が高いと考えられるのである。

6. まとめ

本稿では、九州方言のエ段音節の硬口蓋化を考察し、以下の結果を得た。

- (一) 九州方言のエ段音節では、セ・ゼのほかに、テ・デ・ネという歯茎音の音節も [tje, dʒe, ne] と硬口蓋化する例が少なからずある。しかしベ・メの唇音やケ・ゲの軟口蓋音の音節ではそうした例が見られない⁸⁶。
- (二) 子音の硬口蓋化には、調音点の差による非対称的な分布が通言語的に確認されており、歯茎音に生じやすく、唇音で生じにくい傾向がある。九州方言の硬口蓋化はこの傾向に沿っており、中世期のエ段音節でも、歯茎音とそれ以外の音節では硬口蓋化の生じ方が異なっていたと推測される。
- (三) 上記の硬口蓋化の非対称的な分布は、キリシタン資料の合拗長音（オ段合音の拗長音）の表記に現れている。合拗長音が、/e/ + /u/ > /yoo/ の過程を経て生じたものであることを考えると、エ段音節での硬口蓋化の非対称性が、合拗長音の成立の遅速に影響し、非対称的な分布の現れにつながったものと思われる。

以上の結果から、中世末期の九州方言、あるいは中央方言のエ段音節でも、(一) のような硬口蓋化の分布が実現音声として現れていたこと可能性は高い。

⁸⁶ なお南 (1959) は「(口之津方言の) /e/ の前の子音はすべて東京方言、名古屋方言などに於けるものよりも著しく口蓋化して発音されるのが普通」(4頁)と述べているが、/c, z, s/ で始まるモーラの子音は /e, i, j/ の前で [tʃ, dʒ, ʃ] という硬口蓋性の子音になることも報告している (3-4頁)。つまり、セ・テ・デの歯茎音の音節では、他のエ段音節より硬口蓋化が著しいということであり、この点が本稿の主旨と合致する結果となっている。

では仮に存在していたのならば、なぜキリシタン資料では **nhe** (ニエ) や **che** (チェ) のような硬口蓋化したエ段音節表記を常用しなかったのか。その要因は、亀井 (1964) が推定するように、これらが音声的なゆれに過ぎなかったことにあるのかもしれないが、残念ながら本稿ではその点については十分説明できない。

しかし少なくとも、本稿で明らかにしたエ段音節の非対称的な硬口蓋化は、柳田 (1993) の問題点 (3.2 節参照)、「後年生じたはずの硬口蓋化したエ段音節 (例: [kje]) が、なぜ諸方言に残っていないのか」という疑問に対して次の回答を提供できる。

即ちこれら唇音 /b, m/ や軟口蓋音 /k, g/ が頭子音の音節は、中世期から硬口蓋化がほとんど生じることがなかったために、諸方言にもその硬口蓋化した音節が残っていないのである。

第6章 音声と形態の相克——teô, deô, neô を中心に——

1. はじめに

第2-4章で論述した通り、キリシタン資料のオ段拗長音表記には、二様の表記が現れる音節と、一様の表記しか現れない音節がある。この表記様式の数値は、音節頭子音の差によって決定しており、唇音と軟口蓋音、及びラ行歯茎音の音節では二様の表記が現れ、ラ行以外の歯茎音の音節では一様の表記が現れる。簡略にまとめると、【表1】のようになる。

【表1】キリシタン資料のオ段拗長音表記（『日葡辞書』を中心に作成）

拗長音\表記	2 表記							1 表記				
	べう	めう	ぺう	へう	けう	げう	れう	でう	てう	ねう	せう	ぜう
合拗長音	beô	meô	peô	feô	qeô	gueô	reô	giô	chô	nhô	xô	jô
開拗長音	biô	miô	piô	fiô	qiô	guiô	riô	giô	chô	nhô	xô	jô
	beô	meô	—	feô	qeô	[gheô]	reô					
調音点	唇			軟口蓋			歯茎					

※ 2段ある表記は、上段が本則表記、下段が異列表記に相当する。

※ [] は『日本大文典』に1例のみ現れる表記。『日葡辞書』では、gu- の-eô に相当する表記は現れない。

しかし厳密にみると、合拗長音では、本来、一様の表記しかとらないはずの音節で、別の表記が用いられることがある。合拗長音の「てう」「でう」「ねう」の音節（網掛け太字）に用いられる「teô」「deô」「neô」の表記である⁸⁷。

- (1) a. *Vtateô* (うたてう) (『日葡辞書』本篇「Vtatei」)
 b. *vma uo fiqiyoxe deôto*, (馬を引き寄せ出うと) (『平家』巻三 184)
 c. *tare caua tazzuneô zo?* (誰かは尋ねうぞ?) (『平家』巻二 104)

(1a) は、本来 *chô* と記されるはずの音節に「teô」が当てられた例、(1b) は、*giô* と記されるはずの音節に「deô」が当てられた例、(1c) は、*nhô* と記されるはずの音節に「neô」が当てられた例である。これらは、*beô*、*meô* と同じように *-eô* の形式で記されているものの、*beô* のように本則表記として用いられているのではないので、「本則ではない *-eô*」と、以下では称する。

これらの表記について、先行研究では、(A) 本則表記 *chô*、*giô*、*neô* との間に音声差が

⁸⁷ 「せう」に *xeô*、「ぜう」に *jeô* が現れることもある。ただしこれらは『日本小文典』の動詞活用部分を中心に現れる。(例: *saxeô* (させう), *majeô* (交ぜう) —— 巻一, f.20)。『日本小文典』の活用表記は、日本語の「五音」と「仮名遣」に関連させたものであることが冒頭(巻一, f.18)に明記されているので、*xeô*、*jeô* は意識的に仮名遣に合わせたものであると理解し、本章では考察に取り上げない。

あるのかどうか、そして、(B) どのような理由によりこれらが用いられたのか、といった点を中心に考察が行われてきた。本章では、これら (A) (B) の点について再検討を行うと共に、本則ではない・eô の語音構造が、中世末期以降どのように変遷したのかを硬口蓋化の一現象と関連付けて説明する。

本章の構成は以下の通りである。まず、本則ではない・eô の出現箇所を確認して、先行研究とその問題点を指摘した後 (2 節)、調査結果を示し (3 節)、本則ではない・eô と本則表記との間には音声差が認められること、またこれらは形態音韻論的理由から生じたと推測されることを述べる (4 節)。さらに、本則ではない・eô の語音構造の変遷を追及し (5 節)、「下二段動詞+助動詞ウ・ウズル」の位置に生じていた・eô が脱硬口蓋化の現象と関連していることを指摘する (6 節)。

2. 出現箇所と先行研究での解釈

2.1 本則ではない・eô の出現箇所

本則ではない・eô は、次の (2) のうち、(2b-1) (2b-2) (2c) に現れる。

- (2) a. 字音語 (例 : mimeô [微妙])
 - b. ウ音便
 - b-1. 語幹末が e の形容詞 (例 : Amaneô [遍う])
 - b-2. 語幹末が e のバ・マ行四段動詞 (例 : soneôda [嫉うだ])
 - b-3. ベシ (例 : arubeômo [あるべうも])
 - c. 下二段動詞の語幹末と助動詞「ウ・ウズル」との形態素境界 (例 : deô [出う])
 - d. その他 : 動詞「愁ふ」(例 : vreô)、連語「てふ」(例 : Vomôchô [思ふてふ])

上記の分布からわかるように、本則ではない・eô は、和語である活用語の語幹末部分に集中して出現する。この特徴から、本則ではない・eô は、語幹末という形態部分に要因があって、あえて用いられたことが推測される。

2.2 先行研究とその問題点

先行研究でも、本則ではない・eô は、語幹末に頻出することが注目され、それらと関連付けた解釈が行われてきた。森田 (1980・1993) は、これらの・eô が語幹末に現れるのは、日本語の仮名表記 (例 : ねう = エ段 + う) に合わせるためか、あるいは、他の語幹と形態を同一に保つために使用されたものと推定している。

- (3) a. ナ行拗長音は nhô で写すのが普通であるのに、ことさらに neô を用いた理由は

はかりがたい。Feiqe (稿者注——『天草版平家物語』) に faneôzuru (勿ねうずる) (p.189) がある一方に fanhô (勿ねう) (p.379) とも書かれているし、日葡辞書 DE (で) の条にも De nhô (で寝う) の例があることから、neô は仮名表記にひかれた表記であるかもしれない。また、いづれも用言の活用形との形態的同一性を保つために語幹の形を保存する綴り方をしたとも考えられる。

(森田 1980 : 851)

- b. これら (稿者注——deô, neô, teô) は大部分が動詞の未来形の例で、その多くを占める~eô の形は、他の活用形との形態的關係を保つように語幹保存の綴り方をしたものと見られる。」(森田 1993 : 183-184)

しかしまた一方で、ロドリゲス『日本大文典』には、teô の表記が音声的要因から生じていることを示す記述があることから、「neô, teô とともに nhô, chô の発音とは微妙な差があつて、そのような音声的事実を反映したのではないか」(森田 1980 : 851) とも指摘している。その『日本大文典』の記述とは、次の (4) である。

- (4) ○ここで注意を要するのは、Chô (チャウ), giô (ヂョウ)、が c に少しく触れて T, D で発音されねばならないのであつて、日本語としての正しい発音は、Chô (チャウ), giô (ヂョウ), chôzu (チャーズ), chôfô (チャウホー) の代りに、Teô, deô, teôzu、又は、Theôfô, Teôfô のやうに、Theô, dheô と言はれるべきだといふことである。(『日本大文典』巻二、「その他の音節及び文字に関する第四則」178)

ここでは、chô, giô, chôzu の表記は teô, deô, teôzu などのように発音する方が正しいと述べている。

亀井 (1984) は主にこの記述を踏まえて teô と chô の間に音声差を認め、teô, theô などは、形態音韻論的理由から生じた音声を写したものではないかと推測した。

まず亀井は、上記 (4) の記述のうち、chô, giô, chôzu が「落ちう (ず)」「捨てう (ず)」「恥ぢう (ず)」「出う (ず)」のような動詞の未来形の活用語尾を挙示したものと推定し、その上で、

- (5) 室町時代の末において、「ちよう」「てふ」「てう」の類は、既に一般に [chô] (= [tʃo:]) であつたとしても尚ままだ完全にアフリカータ化し得ぬ場合があつたと推定されよう。殊に動詞の活用語尾の如きは、何時までも語幹意識が働いてゐて、ややもすると、ロドリゲスの所謂 theô, dheô の発音にひかれやすかつたのではなからうか。 (亀井 1984 : 286)

と述べて、teô (又は theô), deô (又は dheô) は、語幹保持という形態音韻論的理由によ

って語幹末の子音の発音が残された「口蓋化した t, d」, すなわち, [tʃ] [dʒ] ではなく, 若干 [t], [d] の音声を残した発音が行われたのではないかと推測した⁸⁸。

実際, 亀井の推測通り, 『日本大文典』(巻一, 7v) ではタ行下二段動の語幹末が teô と chô の間で揺れていたことが記されている。したがって語幹保持の要因で teô, deô の発音が生じたとみる解釈は首肯されるものである。

- (6) ○語根に ô (エウ), ôzu (エウズ), 又は, ôzuru (エウズル) を加へる。例へば, Ague (上げ), Agueô (上げう), agueôzu (上げうず), 又は, agueôzuru (上げうずる)。Te (て) に終る語根は teô (てう), 又は, chô (ちょう) に, ye (え) は yô (えう) に, gi (ち) は giô (ちょう) に, je (ぜ), ji (じ) は jô (ぜう) に, xe, (せ), xi (し) は xô (せう) になる。

(『日本大文典』巻一 7v 「肯定第一種活用 未来」)

しかし同時に亀井は, 本則ではない-eô には, 国語の仮名遣いに牽かれた部分もあるのではないかと指摘した(亀井 1984 : 287)。その理由は, 『平家物語』で, 当時, 同音であったはずの音節——ダ行上二段動詞の語幹末(例: 恥じう)とダ行下二段動詞の語幹末(例: 出でう)——が giô と deô で書き分けられていること, また『日葡辞書』の例言に仮名遣いを反映させている旨が記されていること(第2章(12)参照)を挙げる。したがって, deô は, 発音を反映させつつも, 仮名遣いに妥協した部分があることを指摘する。

- (8) 清音の場合に平行する所の、完全に giô になり切れない動揺状態が存したればこそ、一方仮名遣に妥協しつつ、他方実際の発音とも背馳しない表記法として、反って deô を採用したと考へられる。(亀井 1984 : 287-288, 傍点ママ)

亀井の解釈は大方首肯されるものの, 仮名遣いを反映させたという主張にはやや賛同しかねる。本研究の第2-4章で考察した通り, キリシタン資料のローマ字表記には, 日本語の仮名遣いの影響が実質的には現れていないことを繰り返し述べてきた。したがって, 本則ではない-eô においても, 仮名遣いよりも音声的な要因を想定する方が適当と思われる。

亀井は, ダ行上二段・下二段動詞での giô と deô の書き分けを, 仮名遣いに合わせた根拠としているが, では他の場合, 例えば「落ちう」「捨てう」では書き分けがあるのかどうかについては言及していない。そこで以下では, これらの書き分けに注目しつつ, 仮名遣いの影響について考察したい。

⁸⁸ 具体的な発音については次のように説明している。「もしこれを発音部位に関して述べるなら, 舌尖のみならず中舌に近い部分を以て閉止を作る所の, [tʃ] [dʒ] における [t] [d] 音, 少なくともそれに近似の音であったといへるのではあるまいか。(亀井 1985 : 286)」。つまり, 本研究でいうところの不完全硬口蓋化を生じた t, d, すなわち [tʃ] [dʒ] に相当する音声を指しているものと思われる。

3. 調査結果

3.1 『天草版平家物語』

本則ではない-eô は、口語的要素の強い資料に現れやすいため、調査では『平家物語』を主に調査する⁸⁹。『平家物語』での用例は、【表 2】の通りである。

【表 2】『天草版平家物語』

	てう		ねう		でう		用例
	teô	chô	neô	nhô	deô	giô	
ウ音便(動)	-	-	-	-	-	-	—
ウ音便(形)	-	-	-	-	-	-	—
助動詞ウ	-	10 4/6	4 0/4	2 0/2	9 0/9	1 1/0	chô10 : (上二 4 : 落ちう (ずる) 4) (下二 6 : 捨てう 3, 育てうずる, 果てうずる, 立てう) nhô2 (下二 : 勿ねう, 寝う) neô4 (下二 : 尋ねう 3, 勿ねう) deô9 (下二 : 出う (ずる) 5, いでうずる 2, 走り出う) giô1 (上二 : 恥じうず)
その他	-	-	-	-	-	-	—

※1 上段は総数，下段は「上二段動詞 / 下二段動詞」に後接する用例数。

※2 (動) はバ行・マ行四段動詞，(形) はク活用形容詞を表す。

当資料では、「下二段動詞+助動詞ウ・ウズル」に本則ではない-eô が頻出する。しかし、行によって、その出現には偏りがある。

まずダ行は、亀井 (1984) の指摘通り、上二段動詞の語幹末を giô，下二段動詞の語幹末を deô で記し、両者を記し分けている。

- (9) a. imasara fagiôzu cotode (今さら恥ぢうずことで) (『平家』巻四 301)
 b. Miyaco no foca ye deô to yûte, (都の外へ出う) と言うて)
 (『平家』巻二 103)

ところがタ行の「てう」では、上二段動詞と下二段動詞の語幹末を両方とも chô で記しており、ダ行のように書き分けた形跡が見られない。

- (9) a. saicocu ye vochôto (西国へ落ちうと) (『平家』巻三 177)
 b. miuomo sodachôzuru cato yûte, (身をも育てうずるか) と)
 (『平家』巻一 90)

⁸⁹ なお『伊曾保物語』では deô が 2 例 (出う 1, 出でう 1), 『金句集』では chô が 1 例 (立てう), giô が 1 例 (慚ぢう) 現れる。いずれも『平家物語』の結果と相反しない。

また一方、ナ行の「ねう」では、「勿ねう」の語幹末部分を *nhô* と *neô* の両方で記す例が見られ、ここでも上二段動詞と下二段動詞を *nhô* と *neô* で記し分ける傾向が見られない。

- (10) a. *cubiuo fanhôtô môxeba*, (「首を勿ねう」と申せば) (『平家』巻四 379)
 b. *cubi uo faneôzuruto* (首を勿ねうずると) (『平家』巻三 189)

以上のように、『平家物語』では、各行によって、本則表記と、本則ではない表記の用い方が異なっていることがわかる。また、動詞の語幹末を動詞の種類によって厳密に書き分けているのも、ダ行でしか行われていないことがわかる。

亀井のいうように「仮名遣に妥協し」て記し分けていたのならば、なぜダ行に限って行う必要があったのかが説明されねばならないが、以上の例からは積極的な理由が見出しがたい。仮名遣いを反映させるならば行に偏りなく行われるはずであるが、ダ行という特定の行に限定しているからこそ、反対に、何らかの音声的な理由があると考えられる。

3.2 『日葡辞書』

『日葡辞書』での用例をまとめたのが【表3】である。全用例は(11)(12)の通り。補遺の用例には末尾に「*」を付す。

【表3】『日葡辞書』(見出し語、本文の区別なし)

	てう		ねう		でう		用例
	teô	chô	neô	nhô	deô	giô	
ウ音便(動)	-	-	2	-	-	-	Soneôda (嫉うだ), maneôda (学うだ)
ウ音便(形)	1	-	2	-	-	-	Amaneô (遍う), Suneô (拗ねう) Vtateô (うたてう)
助動詞ウ	-	-	-	1	-	-	nhô (下二:寝う)
その他	-	3	-	-	-	-	chô3 (てふ)

※1 「chô (てふ)」の用例は、次の通り。補遺「Chô. (てふ) Toyû (と言ふ) の意味を示す助辞。例, Vomôchô, yumechô, &c. (思ふてふ, 夢てふ, など)」。

※2 (動) はバ行・マ行四段動詞, (形) はク活用形容詞を表す。

- (11) a. *Sonemi, u, neôda* (嫉み, む, うだ) (本篇見出し語)
 b. *Manebi, u, ôda** (まねび, ぶ, うだ) (本篇見出し語)
 (12) a. *Vtateô* (うたてう) (本篇「Vtatei. (うたてい)」)
 b. *Suneô** (拗ねう) (補遺見出し語)
 c. *Amaneô* (遍う) (本篇「Amanei. (遍い)」)

『日葡辞書』では、ウ音便に本則ではない-eô が頻出する。上記の用例だけを見ると、森田の指摘(前掲(3a-b))通り、語幹末の形態を揃えるために-eô が用いられたように見

える。しかし、下二段動詞に助動詞ウ・ウズルが後接する「寝う」の例では、nhôの表記が用いられており、語幹末を-eôで揃えようという意識が見られない。

(13) 例, De nhô (で寝う), など. さあ寝ようよ. (本篇「De (で)」)

第3章でも指摘した通り、キリシタン資料では、助動詞ウ・ウズルが後接する例をすべて-eôで揃えようとする指向がなく、動詞の語幹末子音の差によって、-eôを用いる例と、用いない例に分けている。

(13) a. Ide mono mixô. (いでもの見せう) (本篇「Ide (いで)」)

b. Vochitçuçiqini nanzo agueôzu. (落着きに何ぞ上げうず)

(本篇「Vochitçuçiqi (落着き)」)

(以上, (15a-b) は, 第3章 (14) (15) から一部再掲)

あらゆる語幹末に一律に-eôが用いられていれば、語幹末形態を表記で揃える目的があったと見なせるが、それが行われていない点から推測すると、本則ではない-eôは、仮名表記ではなく、むしろ別の要因——音声的要因によって記されたと考えるのが妥当ではないかと思われる。

4. 本則ではない-eôに音声を認め得る根拠

前節では、本則ではない-eôが、仮名遣いよりも音声的要因によって記されたものであると見る方が適当であることを述べた。本節ではさらに、本則ではない-eôと本則表記(giô, chô, neô)の間に音声差があることを指摘した上で、なぜteô, deô, neôのような音声が見れる結果となったのかという点について言及する。

4.1 『日葡辞書』でのniù, niû表記

本則表記(例: chô)と本則ではない-eô(例: teô)との間に音声差を認め得る第一の傍証は、『日葡辞書』のウ段拗長音にも類似例があり、それが、音声的要因によって記されていることが明らかな点である。

『日葡辞書』では、本来一表記しか用いないはずの「nhũ(にう)」の音節に、「niù」「niû」を宛てた例がある。

- (14) a. Cuniùdo⁹⁰ (国人) (本篇『日葡辞書』)
 b. Xutniû⁹¹ (出入) (本篇『日葡辞書』)

『邦訳』の注(脚注4・5参照)でも指摘されているように、これらの niù, niû はウ段拗長音の表記としては異例である。(14a) は和語であるが、(14b) の「出入」は明らかに字音語であり、字音語で何らかの形態を揃える必要があつて niû が用いられたとは考えがたい。また、この語に限って「にう」の仮名表記に揃える必要性があつたとも考えにくく、したがって、『邦訳』の注で指摘されるように、あえて niù・niû を用いたのは nhũ とは異なっていた当時の発音を示す目的があつたと推定される。

上記の例を敷衍すれば、オ段拗長音のタ・ダ・ナ行に、あえて teô・deô・neô が使用されたのも、chô・giô・nhô と異なる発音を示す目的があつたためと考えられるのである。

4.2 九州方言での動詞の未来形

第二の傍証は、中世末期日本語の特徴を残す九州方言で、「deô (出う)」の表記に近い発音が現在も行われていることである。博多方言の調査を行った早田(1985)によると、未来形の語幹末が「-てう」「-でう」となる下二段動詞では、[t] [d] が硬口蓋化して発音されることがない(早田 1985: 49-50)。

- (15) /yo/ の前の子音は一般に口蓋化するが、それぞれ /te-o // de-o/ に由来する [tjo] [djo] の [t] [d] は聊かも口蓋化しない。(中略) この [t] [d] は一寸でも口蓋化すると、インフォーマント⁹²に違ふと言われる。このモーラを片仮名ではそれぞれ下のように「テョ」「デョ」と表すことにする。(早田 1985: 2)

早田(1985: 49-50)で挙げられた下二段動詞の未来形の語形を、キリシタン資料での例と対照させたのが【表5】である。

⁹⁰ 『邦訳』注「ウ段拗長音の表記としては異例のもの。普通は Cunhũdo と綴る。」

⁹¹ 『邦訳』注「本書の一般表記法では Xutnhũ とあるべきもの。特にこの綴り方をしているのは、当時の発音を反映したものか。類例に Cuniùdo がある。」

⁹² 安川ハル(明治29年生、博多区上呉服町在住、当時86歳)、斧田フジ(明治43年生、博多区中呉服町在住、当時72歳)、安川充子(大正15年生、博多区御供所町在住、当時56歳)。

【表 5】博多方言（早田 1985）とキリシタン資料（『平家物語』）との対照

行	博多方言（早田 1985）		キリシタン資料	
	語形（形態素表記）	意味	語形（ローマ字 本の表記）	仮名に直した形
サ	syoo（ショー）	〈為るだろう〉	xô	せう
ザ	mazyoo（マジョー）	〈交ぜるだろう〉	xinjôzu	進ぜうず
タ	atyoo（アテョー）	〈当てるだろう〉	suchô	捨てう
ダ	yudyoo（ユデョー）	〈茹でるだろう〉	※1	
	deyoo（デョー）	〈出るだろう〉	deô	出う
ハ※2	kangayoo（カンガョー）	〈考えるだろう〉	vttayôzuru	訴よう
マ	miyoo（ミョー）	〈見るだろう〉	miyô	見よう

※1 キリシタン資料では、ダ行下二段動詞の未来形は「出る」以外には現れない。『日本小文典』（巻一 f19）の活用表でも、ダ行の Medzuru（愛づる）ではこの語が欠陥動詞であるために未来形の語形を欠くことが指摘されている。

※2 「考える」は、中世語との対応を考えてハ行に分類した。

対照表の通り、博多方言とキリシタン資料では、語幹末から助動詞にかけての部分似通った音形で現れている。サ行やダ行では、完全な拗長音で現れるのに対し、ハ行やマ行（上一段）では「ョウ」という非拗音の語形を分出させている。

この博多方言では、タ行・ダ行を、硬口蓋化しないで「アテョー」「ユデョー」のように発音する（前掲（15）参照）。【表 5】では「出る」だけが「デョー」と非拗音形になっているが、明治生まれのインフォーマント⁹³が子供の頃には、人が「デョー」というのを聞いていたので（早田 1985 : 49-50）、一時代前には「ユデョー」と同じ発音形であったと思われる。すなわち、deô の表記に近い、完全に拗長音化せず、助動詞ョウを分出させるのでもない語形で発音されていたと考えられるのである。

このように、中世末期日本語に近い状態を残す方言に teô, deô に近い発音が残存しているところからも、これら本則ではない-eô は、その表記形に近い発音がなされていたと推測される。

4.3 形態音韻論的解釈

では前述までのように、teô, deô, neô が音声上の理由から生じていたのなら、なぜ用言の語幹末において、このような発音が生じやすかったのであろうか。

この理由を推測する上では、既述した亀井（1984）の形態音韻論的解釈が重要になると思われる。先述（本章 2.2 節）の通り、亀井は、語幹を保持するという作用が働いた結果、teô, deô のような発音が行われたと推定した。この見解は、さらに、“字音語には本則ではない-eô が現れない”という事実と併せて考えると、より説得力を増すと思われる。以

⁹³ 脚注 6 に同じ。

下に、字音語と和語の間における、表記・形態・実現音声の違いを示す。

【図 1】字音語と和語との違い

	語例	表記	形態	実現音声
字音語	「 <u>帰朝</u> 」	qichô	//kityoo//	[kitʃo:]
和語	「 <u>捨てう</u> 」	suteô*	//sute=u//	[sutʃio:] [sutʃeo:]

※『日本大文典』（巻一 7v）の記述をもとに作成。

キリシタン資料での「てう」は、字音語では chô, 語幹末をもつ和語では teô となる。形態素分析をしてみると、両者では、拗音節内における形態素の境界が異なる。字音語の場合は、「てう」の中に形態素の区切れ目が存在しないが、和語では、語幹と接辞の間に形態的境界が存在する。したがって、実現音声として現れる場合、字音語では [tʃo:] のような拗長音になるのに対し、和語では [sutʃio:] 又は [sutʃeo:] のような完全に拗長音化しない形で現れたものと考えられる。すなわち、拗長音の内部に形態素の区切れ目があるという形態音韻論的理由により生じた音声は、teô の表記を生み出したと推測されるのである。

その音声は、ちょうど湯沢 (1982: 279) が指摘するように、「(稿者補——「見う」「出う」の)「ミ」「デ」を発音するに当っては、今日のように正確に一音節だけの時間を費やさぬうちに「ヨー」に移つたのではなからうか。言わば今日のわれ等の発音の「妙」「条」と「見、よう」「出、よう」の間のものであつたらしく思う」という発音に近かったものと予想されよう。実際、キリシタン資料では、「ヨウ」という非拗音形の助動詞が現れている箇所では yô という表記を用いている (例: vtta^{yô}zuru (訴^{よう}ずる)) (『平家』巻四, 225)。yô でもなく、完全な拗長音の表記を採るのでもないという点から推測すると、deô, teô, neô はそれらの中間に位置するような音声で発音されていたと考えられるのである。

5. 本則ではない-eô の変遷

では、本則ではない-eô は、中世末期以降、完全な拗長音に転じていったのであろうか。

興味深いことに、これら本則ではない-eô をもつ例 (前掲 (2) 参照) は、すべて、中世末期から近世期にかけて、衰退、または別の語形へ変化している。では、それらの衰退・変化過程ではどのような特徴が見られるのだろうか。拗音節である以上、硬口蓋化が何らかの形で関与したと考えられるが、それらと子音の間ではどのような干渉が生じていたかという点を、本節では検討する。

まず、前掲 (2b-1) (2b-2) で挙げた語幹末が -eô となるウ音便は、中世末期以降、動詞、形容詞ともに衰退の一途をたどる。本則ではない-eô が現れる形容詞のウ音便は、キ

リシタン資料の時点ではすでに、「Amaneô (遍う)」「Vtateô (うたてう)」の2語しか見えない。北原(2010)は、ウ音便に限らず、このような語幹末がeの形容詞が中世期に衰退した理由について、「うたてい」のような活用語尾の-eiの語音構造が日本語で許容されにくかったためであると推定している。また工藤(1978)も、語幹末がeの形容詞で、ウ音便(例：イカメウ)がイ音便(例：イカメイ)よりも先んじて衰退していることに注目し、これらは、語幹末が拗長音化して語幹保持が危うくなったために先に衰滅したと推測している⁹⁴。いずれも、語音構造が衰退の要因に関わったとする説である。

ここから推測すると、バ・マ行四段動詞のウ音便(例：嫉^{そね}うだ)の衰退も同理由であったと考えられる。奥村(2005)は、キリシタン資料に前後して成立した覚一本平家物語(1371年成立)と尾崎家本平家正節(江戸中期成立)を調査し、次のような音便の結果を提示している。

【表6】奥村(2005:10-11)より、覚一本平家物語、尾崎家平家正節の音便

		ア列音	イ列音	ウ列音	エ列音	オ列音	合計
ウ音便	覚一本	21(60%)	3(20%)	3(4%)	0%	23(32%)	50(24%)
	尾崎家本	12(48%)	1(8%)	0%	0%	18(30%)	31(20%)
撥音便	覚一本	10(29%)	5(33%)	62(90%)	19(100%)	28(39%)	124(59%)
	尾崎家本	9(36%)	11(85%)	43(93%)	14(100%)	35(58%)	112(71%)
非音便	覚一本	4(11%)	7(47%)	4(6%)	0%	21(29%)	36(17%)
	尾崎家本	4(16%)	1(8%)	3(7%)	0%	7(12%)	15(9%)

表から窺える通り、語幹末がエ段音の動詞では、ウ音便が避けられ、撥音便が選択されている。エ段音に撥音便が多い理由について奥村(2005)は言及していないが、ウ段音が/uu/という母音連続を忌避して撥音便になっていたことを考えると⁹⁵、エ段音も、拗長音になる/eu/の語音構造を避けて撥音便を選ぶ傾向があったものと推測される。

しかし、ウ音便が以上のように衰退するのに対し、前掲(2c)のような、下二段動詞に助動詞ウ・ウズルが後接する例では、一旦、拗音節を生じた後、助動詞「ヨウ」を分出する方向へと変化している。すなわち拗長音という語音構造を受容して、一度硬口蓋化を生じた後、再びその性質を失ったといえるのである。

ではその硬口蓋化が失われる過程では、どのような音声的作用が働いたのだろうか。次節ではその点について考察を行う。

⁹⁴ 矢島(1986)も、近松世話物浄瑠璃での形容詞のウ音便を調査し、語幹末の母音とウ音便の融合によって音形変化を生じにくい方が、ウ音便として多く残っていることを指摘している。

⁹⁵ 大塚(1955)参照。

6. 下二段動詞における助動詞「ヨウ」の成立

6.1 先行研究——助動詞ヨウの成立について——

助動詞ヨウの成立については、大塚（1959, 1962, 1975）や福島（1969, 1975）らにより、その発生過程がほぼ解明されており⁹⁶、それらの結果によれば、ヨウは中世末期、ヤ行上一段動詞「いる（居・射）」から発生し、以後、徐々に他の動詞への接続を拡大したとされている⁹⁷。その成立順序については、以下のように推定されている。

- (16) I 母音でできている語幹一音節語 (1)イル（居・射） (1')ウル（得）
II それ以外の一音節語 (2)上一段語 (2')下一段語およびフル（経）、ヅル（出）等
III 右以外の語 (3)上二段語 (3')右以外の下二段語
(大塚 1966 : 376⁹⁸)

ヨウは、発生当初は、「ミュウ（見う）」のようなウ段拗長音で用いられていたが、当時甚だしかったユウ・ヨウ韻の交替現象の影響をうけて⁹⁹、「ミョウ（見う）」のようなオ段拗長音に転じ、中世末期から近世初期にかけて、すべての上・下二（一）段動詞に確立するようになったと推定されている。このように、助動詞ヨウの成立については、「- ユウ」から「- ヨウ」への移行を論じたものが中心となっており、「- ヨウ」という拗音の形から、非拗音の「- ヨウ」という形へといつ頃どのように移っていったのかを論じるものは未だ見ない。特に、下二段動詞の場合は、非拗音形の成立が最も遅れたと言及されるのみで、その過程はいかなるものであったかという詳細な調査はない。

ここで注意されるのは、文献を観察する限り、語幹末が e の下二段動詞に、一律に非拗音形のヨウが成立したのではなく、語幹末の子音によって遅速があったと推測される点である。例えば上方咄本『滑稽邯鄲枕』（文政四 [1821] 年）では、次の (17a)「浮かれる」では拗音形で記されているのに対し、(17b)「始める」では非拗音形で記されている。

⁹⁶ キリシタン資料を用いた坂口（1981）のほか、中世期資料全般を用いた調査に高宮（1953）がある。他に洞門抄物を用いた外山（1961）、樋渡（1978）などがある。

⁹⁷ 下二段動詞での - eu > jo: の変化には、中世の硬口蓋化したエ段音節（ラング 1971）が影響し、ヨウの成立を促進したとする見解もある（柳田 1993）。なお奥村（1972）では、- eu > jo: の変化はキリシタン資料からみて中世末期以前に完了したとする。

⁹⁸ 論考内容に従い、助動詞「ヨウ」の成立順に番号を付した。(1) → (1') → (2) のように進む。

⁹⁹ 吉川（1954）は、中近世のユウ・ヨウ韻の交替現象を網羅的に挙例し、こうした現象は「明暦萬治あたりを以てほとんど衰退した（吉川 1954 : 358）」と述べる。山田・大田（1963）も元亀二年本運歩色葉集に「女御（ニウゴ）」「迦陵頻伽（カリウヒンカ）」「料（リウ）」等の交替例が多く見られることを指摘し、「-yû とも -yô ともつかぬ、曖昧な中途半端な発音なるが故に表記に躊躇・ためらいが生じ、或は中途に分かれたものではないか」と述べる（山田同上 : 633）。その他、この交替現象に言及するものに高松（1971）、迫野（1973）などがある。

- (17) a. こちらもあのねきでうかりよふじやナイカ (『滑稽邯鄲枕』150)
 b. マア \はじめよふ。 (『滑稽邯鄲枕』150)

(17) の動詞の語幹音節数は同じであるから、語幹末子音の差 ((17a)は r, (17b)は m) の差によって、拗音形と非拗音形の差が現れたものと思われる。ではより詳細に見ると、どのような子音の差によって生じているのだろうか。以下ではその点を考察する。

6.2 調査方法

調査には、近世前期資料として近松世話物浄瑠璃 24 作品を、近世後期資料として宝暦 [1751 年] 以降の上方洒落本、咄本を用いた (具体的な資料名は調査資料参照)。

近世では、一つの音声を複数の表記であらわす仮名表記システムが通行しており、一見、異表記の範囲は無限であるかのように見える。しかし屋名池 (2011) は、近世通行仮名表記は、多表記性の表音表記システムであって、仮名の異表記は有限であると指摘する。例えば、/jor/ (yô) ならば次のような異表記が許容されている。

- (18) $\left. \begin{array}{l} \text{(い列の仮名) + やう・やふ} \\ \text{/jor/} \\ \text{(い列の仮名) + よう・よふ} \\ \text{(え列の仮名) + う・ふ} \end{array} \right\} \text{(屋名池 2011 : 169-170 参照)}$

したがって、/kjur/ ならば、「きやう」「きやふ」、「きよう」「きよふ」、「けう」「けふ」が許容される表記である。よってこれから外れる表記 (例: 「掛けよう」) は、拗音以外を表していると良いと考えられる。以下、上記 (18) に適合する表記 (及びその短呼形) が採られている例を「拗音形」の助動詞ヨウと判断し、適合しない表記が採られている例を「非拗音形」の助動詞ヨウの例を判断する。なお、下二段動詞に助動詞ルが後接している例は除外した。

6.3 調査結果

6.3.1 近世前期

近松世話物浄瑠璃で下二段動詞に助動詞ウが後接する例の一覧が【表 7】である。

【表 7】の通り、近世前期では、拗音形のヨウがほぼすべての動詞に用いられている (19)。ただ (20) の「呉る」の 1 例のみが、「くれよ」で出現する。

- (19) a. 暇をくれた、出て失せう (『五十年忌』中, 32)
 b. 先立つて埒明けう (『丹波与作』下, 391)
 (20) 竹の先に小刀でも結ひつけて。夫の手にかけて、殺してくれよ
 (『薩摩歌』中, 317)

ただし (20) の「くれよ」は、「クリヨ」という拗短音で発音されていた可能性もあり、非拗音形の確例とはいえない。したがって、近世前期の下二段動詞では、語幹末がどのような子音であっても、拗音形のヨウが中心に用いられていたと考えられる。

【表 7】 近松世話物浄瑠璃

拗音形「ヨウ」			非拗音形「ヨウ」		
語幹末子音	延べ(異)	上接動詞	語幹末子音	延べ(異)	上接動詞
r	49(14)	くる(呉) 21, なさる 7, 入る 4, 忘る 4, 逃る 2, 別る 2, 下さる 2, 顕る, 生まる, 折る, 切る, 濡れる, 離る, 紛る	r	1	くる(呉)
s	66(21)	見す 23, 失す 12, さす 7, 聞かす 4, 添わす 3, 見知らす 2, 上げさす, 戴かす, 言わす, 動かす, 疎ます, 斬らす, 食わす, こます, 取らす, 吸わす, 取らす, 脱がす, 乗す, 伏す, やらす	s	-	-
d	-	-	d	-	-
n	5(3)	尋ぬ 3, -かぬ 2	n	-	-
t	8(3)	立つ 4, 捨つ 3, 育つ	t	-	-
k	38(11)	退く 14, 掛く 7, 受く 6, 明く 4, 生く, 片付く, 砕く, 焼き付く, 付く, 更く, 見付く	k	-	-
g	5(5)	上ぐ, 下ぐ, 告ぐ, 投ぐ, 申し上ぐ	g	-	-
m	10(8)	止む 3, 温む, 黒む, 責む, 染む, ねじゆがむ, 褒む, やすむ	m	-	-
b	-	-	b	-	-
y	2(2)	甘ゆ, 冷ゆ	y	-	-
小計	183	-	小計	1	-

※「答ふ」「堪ふ」などは語幹末子音が発音されないため、除外した。

6.3.2 近世後期

近世後期資料である上方洒落本・滑稽本での調査結果が【表 8】である。

近世後期から、非拗音形の「ヨウ」が徐々に成立しつつあるが、それらの上接動詞をみると、次の (21) のように、語幹末子音が k, g, m といった非前舌子音（唇音・軟口蓋音）の語に偏っていることがわかる。

- (21) a. ヲ、お袖やお柳よんでなめよふとねぶろとこつちやこつち
 (寛政九 [1797] 年『うかれ草紙』 61)
- b. 酒あがるかへかんつけよ坎
 (寛政六 [1794] 年『酔のすじ書』 132)

【表 8】上方洒落本・滑稽本

拗音形「ヨウ」			非拗音形「ヨウ」		
語幹末子音	延べ(異)	上接動詞	語幹末子音	延べ(異)	上接動詞
r	16(8)	くる(呉)6, なさる4, 入る, 隠る, 下さる, 離る, 忘る, 浮かる	r	3(1)	くる(呉)3
s	5(4)	見す2, 失す, 乗る, 飲ます	s	-	-
d	-	—	d	-	-
n	-	—	n	-	-
t	-	—	t	1	当つ
k	17(7)	-掛く7, 出掛く3, つく2, 開く2, 明く, 助く, 届く	k	4(3)	付く2, こく, 出掛く
g	7(1)	上ぐ7	g	3(1)	-上ぐ3
m	-	—	m	5(4)	やむ ^ム 2, 醒む, 舐む, 始む
b	2(1)	たぶ2	b	-	—
y	-	—	y	-	—
小計	47(21)		小計	16(10)	

※「答ふ」「堪ふ」などは語幹末子音が発音されないため、除外した。

反対に, r や s といった, 語幹末子音が前舌子音(歯茎音)の動詞(22)では, 近世前期と同様, ヨウは拗音形のまま保たれているものが大半を占める。

- (22) a. をのれ此腹いせに、あいつもやつてこまさう、こいつもやつてくれう
 (寛政七[1795]年『粋包丁』252)
- b. ことがすんだら見しよわいな
 (安永七[1778]年『風流裸人形』281)

特に, s と m の語幹末子音では明確な差異があり, s が語幹末子音の語は全例が「見せう」のような拗音形で出現するのに対し, m が語幹末子音の語はすべて非拗音形で現れる。

- (23) a. わしそのお茶や。さして見せうか
 (文政五[1822]年『箱枕』122)
- b. イヤ最^も昼のがさめよや
 (享和四[1804]年『当世嘘之川』60)

またこの時期には, 前掲(17)のように, 一作品内で拗音形と非拗音形が現れる例もあり, これらも語幹末子音の異なりで現れていることが窺える。

- (24) a. こちらもあのねきでうかりよふじやナイカ
- b. マア\／ははじめよふ。
 (a,bとも文政四[1821]年『滑稽邯鄲枕』150)
 (前掲(17)再掲)

以上のように, 下二段動詞に助動詞ウが後接する例では, 語幹末子音が/m b k g/ のよう

な非前舌子音（唇音，軟口蓋音）の動詞から，非拗音形のヨウが先だって成立していることがわかる。先に上一・二段動詞で成立した非拗音形のヨウが，類推によって，下二段動詞にも徐々に下接するようになったとする解釈では，なぜ /m b k g/ が語幹末の動詞から先に成立するようになったのかが説明できない。子音の差によって成立に遅速があること考えると，むしろ，非拗音形のヨウは，拗音節が成立しにくいという子音の特徴によって，非前舌子音から徐々に非拗音形が成立し始めたと考えられる。

7. 解釈——脱硬口蓋化の関与について——

ではなぜ下二段動詞では，語幹末子音が唇音や軟口蓋音の動詞から非拗音形のヨウが生じ，反対に歯茎音の動詞では遅れたのか。この点を推察する上では，脱硬口蓋化（depalatalization）という硬口蓋化の一つの現象を想定することが必要であると思われる。

脱硬口蓋化とは，一旦，硬口蓋化した音節（例：/pj/）が，語頭や語末で，硬口蓋性を失う現象を指す（例：/pj/ > /p/, /pj/ > /pj/）。Kochetov（2002：24，28）によると，この脱硬口蓋化は，唇音に先がけて生じやすく，反対に，歯茎音では強く抵抗を示して，生じにくい傾向があるという。

下二段動詞における非拗音形のヨウの成立も，前節での結果から考えると，この脱硬口蓋化の通言語的な傾向に従うものであると思われる。「食べる（語幹：tabe）」「止める（語幹：yame）」のような唇音や軟口蓋音の語幹末をもつ動詞では，「食べう」「止めう」のような拗音節を一旦生じたものの，先駆けて脱硬口蓋化が生じ，[b]，[m] から [bj]，[mj] へ変化した結果，非拗音形の助動詞ヨウがいち早く生じたものと思われる。反対に，歯茎音の動詞では脱硬口蓋化を生じにくく，後年まで拗音形のまま残ったものと考えられる。

この上記のような，脱硬口蓋化の様相は，資料性の異なる近世期資料においても断片的に確認できる。

例えば，京都大学文学部蔵本の写本『交隣須知』では，迫野（1998：265）が指摘するように，ヨウが「見る」「出る」等の一音節語幹の上下一段動詞と，複音節語幹の上・下二段動詞に確認できる。そのうち，下二段動詞では，ほとんどが「ヤフリヨフ（破）」「ツカレフ（疲）」「オリヨフ（折）」「ナサリヨフ」のように拗音形で表記される中で，末尾音が m と g の上記 2 例だけが非拗音形であるのは注目される¹⁰⁰。

- (25) a. 排 ツキノケテ イツテユケハ タレガ トガメヨフカ (咎) (巻四 3 丁オ)
 b. 結 シバツテヲイタラハ ドコラヘ ニケヨウカ (逃) (巻四 35 丁オ)

¹⁰⁰ ただし，m や g が語幹末の動詞でも，「モトメフ（求）」「ニキヨウ（逃）」のように拗音形で記されている例もある（各 1 例）。拗音形と非拗音形の間で，助動詞ヨウが揺れていたことを示していると考えられる。

もちろん、仮名表記と音声を直結させて解釈するのは危険を伴うが、(25)のような例は、脱硬口蓋化の現れの一端を示しているとみてよいだろう。

以上のように、非拗音形の「ヨウ」の成立には、語幹保持や類推といった従来の解釈の他にも、脱硬口蓋化という音声的な要因も関与していたと想定する必要があると考える。

8. まとめ

本節では、以下の点を明らかにした。

- (一) キリシタン資料の合拗長音にみえる、*deô*, *teô*, *neô* という表記は、キリシタンの文典や九州方言と対照させる限り、本則表記の *giô*, *chô*, *nhô* とは異なる音声を備えていたと考えられる。
- (二) *deô*, *teô*, *neô* は、字音語ではなく、和語の語幹末部分でしばしば表記される。これは、1つの拗音節の中に、「語幹+接辞」という形態素の区切れ目があるために、形態音韻論的な解釈の働きによって発音されたためであると考えられる。
- (三) *Amaneô* (遍う), *Soneôda* (嫉うだ) のような、形容詞・動詞のウ音便は、中世末期から近世期にかけて衰退する。これは、*/eu/* という語音構造から生じる拗音節を避けるためであったと推定される。
- (四) 助動詞のヨウは、拗音節部分を衰退させず、非拗音形のヨウを一語形として成立させたが、その過程では、脱硬口蓋化という音声的な要因も介在したと考えられる。下二段動詞の場合、「食べヨウ」のような非拗音形の助動詞ヨウは、語幹末子音が */m, b, g/* の非前舌子音の動詞から成立している。これは、唇音は脱硬口蓋化に抵抗しやすいという一つの特徴が現れていると考えられる。

以上から、キリシタン資料の表記には、音声だけでなく、形態音韻論的な要素も潜んでいることが明らかになった。また、従来注目されにくかった、拗音から非拗音への変化においても、脱硬口蓋化という一種の音声的な要因が関与していることが示された。

キリシタン資料のローマ字綴りは、極めて音声を正確に写していると考えられるが、その背景には「形態」という観念が色濃く残っていることを考慮して読み取る必要があると思われる。

第7章 拗音節の体系的整理と派生する問題について

1. はじめに

ここまで、ローマ字本キリシタン資料の表記を基に、日本語拗音節における硬口蓋化の分布について言及を行ってきた。本章では、各章で扱った内容を再度整理し、各章で取り上げた硬口蓋化の諸現象が、体系的に把握できることを指摘する。また、そこから派生する問題として、キリシタン資料のオ段拗長音と上代特殊仮名遣いのイ列・エ列における表記区分に一つの共通点があることを指摘する。

2. 拗音節における諸現象の体系的整理

第2-5章で扱ったそれぞれの現象を、硬口蓋化と音節頭子音の差に基づいて整理すると、【図1】のようになる。

【図1】硬口蓋化の諸現象の整理

扱った章	硬口蓋化	不完全硬口蓋化						完全硬口蓋化				
	調音点	唇			歯茎	軟口蓋		歯茎				
	頭子音（表記） 五十音の行	b バ行	m マ行	f ハ行	r ラ行	q カ行	gu ガ行	g ダ行	x サ行	j ザ行	ch タ行	nh ナ行
2	開拗長音表記	biö beö	miö meö	fiö feö	riö reö	qiö qeö	guiö (gheö)	giö	xö	jö	chö	nhö
3	合拗長音表記	beô biô	meô miô	feô fiô	reô riô	qeô qiô	(gueô) guiô	giô	xô	jô	chô	nhô
3	/-eu/ > /-yoo/ の拗長音化	遅						早				
5	エ段音節の硬口蓋化	[be ~bie]	[me ~mie]	[fe ~fie]	[re ~rie]	[ke ~kie]	[ge ~gie]	[dʒe]	[ʃe]	[ʒe]	[tʃe]	[ne]
6	下二段動詞での助動詞ヨウの成立	早			遅	やや早		遅				

※1 頭子音（表記）は、ローマ字本キリシタン資料のオ段拗長音表記で用いられるものを挙げた。

※2 開拗長音・合拗長音における（ ）付きの表記は、『日葡辞書』において用例数が僅少な例。開拗長音の gheö は『日本大文典』より補った。

全体を概観すると、第2-6章で扱った諸現象は、「不完全硬口蓋化」と「完全硬口蓋化」の別によって、様相が二分していることがわかる。またその硬口蓋化の別は、音節頭子音

が、非前舌子音（唇音・軟口蓋音・ラ行歯茎音¹⁰¹）か、前舌子音（歯茎音）かの差によって決定していることもうかがえる。

まず第2章で扱ったキリシタン資料の開拗長音では、表記様式が二様になる音節と、一様しかない音節とに二分していることが明らかになった。この表記様式の数、その音節頭子音が、「不完全硬口蓋化」と「完全硬口蓋化」のいずれを生じるかによって決定している。具体的にいうと、不完全硬口蓋化を生じる子音（唇音・軟口蓋音・ラ行歯茎音）では二様の表記が現れるのに対し、完全硬口蓋化を生じる子音（歯茎音）では一様の表記しか現れない。すなわち、子音の調音点が硬口蓋化の別を決定しており、また、その硬口蓋化の別が表記様式の数を決めていることが明らかになった。

第3章で扱ったキリシタン資料の合拗長音でも、開拗長音と平行的な分布が確認された。二様の表記が現れる音節は、不完全硬口蓋化を生じる子音に偏っており、対して、一様の表記しか現れない音節は、完全硬口蓋化を生じる子音に限定されている。このように表記様式が平行的であるということは、硬口蓋化という音声的な現象が、開拗長音・合拗長音の双方に等しく生じていたためであると推定される¹⁰²。

この第3章では併せて、/eu/ > /yoo/ の拗長音化に遅速があったことも明らかになった。/eu/ の拗長音化した音節である合拗長音は、歯茎音の音節では完全な拗長音表記であるのに対し（例：xô, chô）、唇音・軟口蓋音等の音節ではエ段音を残存させた表記になっている（例：beô, qeô）。すなわち、完全硬口蓋化を生じる音節ではいち早く拗長音化が進んだが、不完全硬口蓋化を生じる音節ではその進行が遅れたと考えられる。

そしてその遅速の要因は、第5章で扱ったエ段音節の硬口蓋化にあると推測される。九州方言資料から推定する限り、中世末期日本語のエ段音節は、歯茎音の音節（例：セ、ゼ、テ、デ、ネ）では硬口蓋化を生じて、[je] [ze] [tje] [dʒe] [ne] のような拗音節で発音されていたのに対し、唇音や軟口蓋音の音節（例：ベ・メ・ケ・ゲ）では硬口蓋化がほとんど生じず、ほぼ [be] [me] [ke] [ge] のような非拗音で発音されていたと考えられる。したがって、エ段音節自体がすでに硬口蓋化していた歯茎音では、/eu/ > /yoo/ の拗長音化も、先駆けて生じやすく、反対に、唇音・軟口蓋音の音節ではエ段音節そのものに硬口蓋化が生じにくかったため、拗長音化も歯茎音に比べて相対的に遅れたものと推定される。

さらに第6章では、-eô の拗長音を生じる「下二段動詞+助動詞ウ・ウズル」の部分で、非拗音形の助動詞ヨウ（例：食べ・ヨウ）がどのように成立したかを追究した。結果、語幹末子音が唇音の動詞（例：tabe= [食べ]、yame= [止め]）では非拗音形のヨウが先に成立したのに対し、語幹末子音が歯茎音の動詞（例：mise= [見せ]）では遅れたとみられることが文献調査結果から窺えた。これには、硬口蓋化した子音を非硬口蓋化音にする「脱

¹⁰¹ r は、厳密には前舌子音の一つであるが、t, d, s, z などとはやや性質が異なるため、不完全硬口蓋化を生じる。そうした特殊な性質を踏まえて、本章では非前舌子音に含めておく。

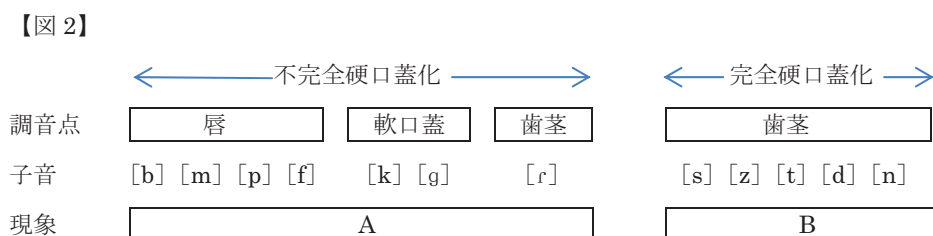
¹⁰² なお開拗長音・合拗長音に現れる二様の表記（-iô~eô, -eô~iô）には、音声的な差異のあることも複数の観点から証明された。

硬口蓋化」という現象が関わっており，脱硬口蓋化を生じやすい唇音では先に非拗音形のヨウが成立したのに対し，脱硬口蓋化に抵抗する性質をもつ歯茎音では，遅れたものと予想される。これも子音の調音点の別によって，硬口蓋化の関わる現象の結果が，異なる方向へ進んだ一例といえよう。

さて，以上のように，硬口蓋化の諸現象が関わる例では，「完全硬口蓋化」と「不完全硬口蓋化」という 2 種の硬口蓋化の別によって，様相が二分していることが明らかになった。

硬口蓋化の 2 種のうち，いずれを生じるかは，子音の調音点により決定している。したがって，どのような現象であれ，硬口蓋化が関与する現象では，完全硬口蓋化を生じる子音（歯茎音）の音節と，不完全硬口蓋化を生じる子音（唇音・軟口蓋音・ラ行歯茎音）の音節とで異なる結果が現れることになる。

関係性を簡略化すると，【図 2】のようになる。



※ただし [r] は，稀に B の様相を示すことがある。

【図 2】の通り，日本語拗音節における硬口蓋化の関わる種々の現象は，各子音が不完全硬口蓋化を生じるか，完全硬口蓋化を生じるかによって，生じる現象は「A」「B」の二通りに分かれる。「A」「B」の各現象は，次のように相反する特徴を示すと予測される。

- (1) a. **現象 A**: 硬口蓋化そのもの，及び，拗長音化する連母音融合（例：/eu/ 等）を生じにくい。また，一旦硬口蓋化しても，脱硬口蓋化が先駆けて起こりやすい。
- b. **現象 B**: 硬口蓋化そのもの，及び，拗長音化する連母音融合（例：/eu/ 等）を生じやすい。また，一旦硬口蓋化すると，脱硬口蓋化は起こりにくい。

上記 (1a) (1b) の特徴は，少なくとも中世～現代日本語においては適応される。また，上記以外の例を生じる場合においても，この調音点の差に基づく分布は保持され，二つの異なる様相が確認されることになると予測される。

3. 派生問題——上代特殊仮名遣いイ列・エ列との表記区分の近似性——

では、キリシタン資料の拗音節から明らかになった硬口蓋化の分布は、さらにどのような問題を派生させるのだろうか。本節ではその一例として、キリシタン資料のオ段拗長音表記と上代特殊仮名遣いのイ列・エ列との間に、表記区分の近似性があることについて言及する。

3.1 表記区分の対照

第2・3章で指摘してきた通り、キリシタン資料のオ段拗長音表記には、二様の表記をとる音節と一様の表記しかとらない音節がある。その表記様式の数値は、音節頭子音の差によって決定しており、不完全硬口蓋化を生じる子音（唇音・軟口蓋音・ラ行歯茎音）では二表記が用いられるのに対し、完全硬口蓋化を生じる子音（歯茎音）では一表記しか用いられない（下記【表1】参照）。

【表1】キリシタン資料のオ段拗長音表記（『日葡辞書』を中心に作成）

拗長音\表記	2表記							1表記				
	バ行	マ行	パ行	ハ行	カ行	ガ行	ラ行	ダ行	タ行	ナ行	サ行	ザ行
開拗長音	^{びやう} biô beõ	^{みやう} miô meõ	^{ぴやう} piô —	^{ひやう} fiô feõ	^{きやう} qiô qeõ	^{ぎやう} guiô [gheõ]	^{りやう} riô reõ	^{ぢやう} giô chõ	^{ぢやう} chõ nhõ	^{しやう} xõ	^{じやう} jõ	^{じやう} jõ
合拗長音	^{べう} beô biô	^{めう} meô miô	^{ぺう} peô piô	^{へう} feô fiô	^{けう} qeô qiô	^{げう} (gueô) guiô	^{れう} reô riô	^{でう} giô	^{てう} chõ	^{ねう} nhõ	^{せう} xõ	^{ぜう} jõ
調音点	唇音				軟口蓋		歯茎音					

※1 上段が本則表記，下段が異例表記。

※2 [] は、ロドリゲス『日本大文典』に1例のみ現れる表記。() は『日葡辞書』には僅少だが他資料に多く見られる表記。

ところで、このオ段拗長音の表記様式の区分を見ていると、二表記をとる音節の子音と、一表記しかとらない音節の子音が、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列における例と似通っていることに気が付く。

上代特殊仮名遣いとは、周知の通り、本居宣長が『古事記伝』（明和4 [1767] 起稿～寛政10 [1798] 年完成）にて初めて言及し、弟子の石塚龍麿が『仮名遣奥山路』（寛政10 [1798] 年序）で精密に調査したものを、戦後、橋本進吉が再発見した、上代日本語に見られる仮名遣いの規則性のことである。

当然のことながら、上代特殊仮名遣いは、万葉仮名によって記されたものであり、ローマ字表記のキリシタン資料とは、文字も、成立年代も、資料性も全く異なるものであるが、今、試みに両者を比較すると次のような表記区分の近似性が認められる。

【表2】上代特殊仮名遣い（イ・エ列）とキリシタン資料（オ段拗長音）の表記対照

頭子音の調音点		唇			軟口蓋		歯茎						
\行		ハ	バ	マ	カ	ガ	サ	ザ	タ	ダ	ナ	ラ	
上代特殊 仮名遣い	イ列	甲類	比	鼻	美	吉	芸	斯	自	知	治	尔	理
		乙類	斐	備	微	紀	疑						
	エ列	甲類	幣	弁	売	祁	下	勢	是	豆	伝	尼	礼
		乙類	閑	倍	米	気	宜						
キリシタン 資料のオ段 拗長音表記	開拗 長音	本則	fiō	biō	miō	qiō	guiō	xō	jō	chō	giō	nhō	riō
		異例	feō	beō	meō	(qeō)	[gueō]						reō
	合拗 長音	本則	feô	beô	meô	qeô	(gueô)	xô	jô	chô	giô	nhô	reô
		異例	fiô	biô	miô	qiô	guiô						riô

※1 上代特殊仮名遣いは『古事記』で用いられている文字を中心に挙げた。

※2 () は『日葡辞書』において僅少な表記。他の資料では、qeōは一定量、gueôは多数見られる。

※3 [] は『日葡辞書』において皆無の表記。他資料でも出現は極めて稀。

【表2】の通り、双方では、表記が二通りに区分される行と、区分されない行が、ほぼ一致する（ラ行を除く）。上代特殊仮名遣いのイ列・エ列で、甲類・乙類の別が存在する行（ハ・バ・マ・カ・ガ行）は、キリシタン資料でも表記様式が二つに分かれており、反対に、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列で甲類・乙類の別がない行では、キリシタン資料でも一様にしか記されていない。つまり両者はともに、音節頭子音が非前舌子音（唇音・軟口蓋音）か、前舌子音（歯茎音）かの違いにより、表記区分が決定していることになる¹⁰³。

上代特殊仮名遣いとキリシタン資料のローマ字綴りの間には、多くの相違点があるにも関わらず、なぜこのように表記区分の点において、一致を見出せるのだろうか。たとえそれが偶然であるにしても、その要因には何かしらの共通点が見出されなければならない。その共通点とは何か。

資料性がまったく異なる両者において、共通点として見出せるものは、「硬口蓋化」という現象だけである。では双方ではどのように硬口蓋化が関与しているのだろうか。

3.2 書き分けの要因

上代特殊仮名遣いの書き分けの要因については、オ列では未だ議論があるものの、イ列・エ列ではおおよそ次の(2)のような見解に落ち着いているとみてよい。以下、キ・ケの音節を例に、「甲類：乙類」の順に整理する。

- (2) a. /ki/ : /kī/ , /ke/ : /kē/ (橋本 1950, 大野 1976)
 b. /kji/ : /ki/ , /kje/ : /ke/ (服部 1976, 松本 1995)
 c. /ki/ : /k₁/ , /ke/ : /kəë/ (森 1991)

¹⁰³ r だけが、唯一、表記区分の食い違う子音である。既述の通り、rの子音に関しては問題が多いため、本節でも考察から除外する。

(2a) は、イ列・エ列及びオ列の甲・乙類が、すべてが母音の相違であると推定する、いわゆる 8 母音説である。ここではイ列・エ列の甲・乙類の書き分けは、*i* と *i̥*、*e* と *e̥* という母音の差に基づくと推定されている。

対して (2b) は、イ列・エ列の甲・乙類の相違は、先行子音の硬口蓋化の有無にあるとみる説である。ここでは母音音素はそれぞれ *i* と *e* の各 1 つであると見なされている。服部 (1958) は奄美群島の方言を基に、松本 (1995) は音声学的見地からそれぞれこの説を提唱しているが両者の見解はほぼ等しい。ただし、服部と松本ではオ列に対する解釈が異なっており、服部はオ列甲・乙類が音韻的対立をもつ */o/* と */ö/* であるとして 6 母音説を唱えるのに対し、松本はオ列の別は異音であるとみて、母音は */o/* の 1 つとする 5 母音説を主張する。

(2c) は、『日本書紀』歌謡 α 群の仮名を材料に、唐代北方音や『切韻』を踏まえて考察を行った森 (1991) の 7 母音説である。森は、イ列・オ列は母音の差 (*/i/* と */i̥/*、*/o/* と */ə/*) とみるが、エ列は甲類が */e/*、乙類が */æ̥/* の二重母音であると推定するので、合計 7 母音があったことになる。

現在では (2a) の 8 母音説を主張する立場は少なく、(2b) か (2c)、とりわけ (2b) を支持する研究者が多いように思われる。服部・松本のこの硬口蓋化の説については、母音の体系的整理を優先した理論であり、実証的でないという反論 (木田 2011) もあるが、むしろ甲類・乙類の分布を音声学的に整合するよう説明を行っている点に支持も多い。

橋本・松本説では、イ列・エ列の甲・乙類の別が */k g p b m/* という非前舌子音の音節にのみ生じ、*/t d n s z/* という前舌子音の音節には現れていないという、体系性に着目して説明を行っている。服部は、

- (3) 一般音声学的に言って、前舌母音 *i* 或いは *e* の前に子音が立って音節を形成するとき、*t d n s z* などにおけるより、*k g p b m* などにおいて音韻的区別 (対立) として利用され易いのは子音の口蓋化と非口蓋化の特徴である。(服部 1976 : 8)

と述べ、*/k g p b m/* の子音の方が、硬口蓋化した音節とそうでない音節の「音色の差異を大きくすることが容易である」(服部 1976 : 8) と指摘し、これらの音節では甲類と乙類の別を保ちえたと推定する。松本 (1995) も、これらの子音では口蓋化音 (「拗音」) と非口蓋化音 (「直音」) の区別が音声学的にみて容易であったとし、イ列・エ列の甲・乙類は「母音の相違というよりも、むしろ先行する子音に付随する音声的特徴に基づくと見る方が自然な解釈」(松本 1995 : 113) であって、服部と同様に、甲類に */ji/* と */je/*、乙類に */i̥/* と */e̥/* を推定する。反対に、前舌子音では子音の硬口蓋化・非硬口蓋化の区別が保ちにくかったために早い時期に両者が合流したと考えられている (松本 1995 : 113) ¹⁰⁴。

¹⁰⁴ 生成音韻論の観点から上代特殊仮名遣いの崩壊を論じる研究 (金井 1985) もある。

上記のような、子音と硬口蓋化の関係性を考慮に入れた説明は、キリシタン資料のオ段拗長音表記の解釈にも適応可能と考えられる。前述の通り、オ段拗長音のローマ字綴りは、上代特殊仮名遣いと同じく、/b, m, f, k, g/の非前舌子音の音節で二様に表記され、反対に、/s, z, t, d, n/の前舌子音の音節で一様に表記されている。このように、非前舌子音か、前舌子音かの異なりで分布が二分されるのは、やはり、上代特殊仮名遣いの場合と同様、前者の子音群では硬口蓋化の区別が保ち得たのに対し、後者の子音群ではその区別が保てなかったためと考える方が、蓋然性が高いと考えられる。

3.3 相違点

しかし、硬口蓋化によって表記区分を等しくしているものの、両者間には数多くの相違点がある。

まず決定的な相違は、音韻としての在り方である。キリシタン資料のオ段拗長音では、二様に記される表記の間に音韻的弁別性がない。ただ、音声上のゆれを表すだけである。そのため『日葡辞書』では、-iō と -eō, あるいは -eô と -iô を用いて同語を記している。

- (4) a. Biōqi / Beōqi (病^{びやうき}気) (『日葡辞書』本篇見出し語)
 b. Qeôsocu / Qiôsocu (脇^{けうそく}息) (『日葡辞書』本篇見出し語)

これに対して、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列では、甲類・乙類の別が音韻的弁別性を担っている。そのため、kami_甲 (上), kami_乙 (神) のようにミの甲類・乙類が異なるだけで、語彙が全く異なることとなる。

さらに、上代特殊仮名遣いの甲類・乙類は、数多くの万葉仮名の文字群が二類に分かれているのであって、キリシタン資料のローマ字綴りのように、ある固定した表記が二つ使用されているのとは異なる。この点も、上代特殊仮名遣いが音韻で書き分けられているのに対して、キリシタン資料では音声のゆれを示している一つの証といえよう。

さらに、二つに区分された各音節の音声的内実も、両者の間では相違する。上代特殊仮名遣いのイ列・エ列では、甲類・乙類の別が、/j-i/と/i/, /j-e/ と/e/ のように硬口蓋化の有無にあると推定されているが(服部・松本前掲論文)、オ段拗長音は、拗音節である以上、一方に硬口蓋化が生じていないとは考えられない。したがって、-iō・-eō, また-eô・-iôの差は、硬口蓋化の程度差(すなわち強弱)が現れているものと予想され、-iōと-iôのように「i」の表記をとる音節は、-eōや-eôなどの「e」をとる表記よりも、相対的に硬口蓋化が強かったものと考えられる。

以上のような相違点があることから考えても、キリシタン資料のオ段拗長音と、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列との間には、歴史的な関係性は認められない。中世末期日本語のエ段音節でも、各子音における硬口蓋化の違いが上代特殊仮名遣いのイ列・エ列と似通った分布で現れていたが(第5章参照)、それは各共時態での硬口蓋化の様相が等しく現れ

ただけであって、音声現象の一種の普遍性を示すことにはなるものの、両者に直接的な関係があることを示すことにはならないのである。

3.4 解釈——表記区分が共通する理由——

ではなぜ、上代特殊仮名遣いとキリシタン資料では、上記のように数多くの相違点があるにもかかわらず、前掲【表 2】のような、硬口蓋化に起因した表記区分の一致が見られるのだろうか。音声現象は一種の普遍性を備えるため、異なる言語や異なる時代において同一の結果が現れることは往々あるものだが、それが表記上に現れるからには、表記する際の動機・手段にも何らかの共通点があったと考えるべきである。

そこで両者に見出される共通点は、「外国の文字を借りて、日本語の音節を表音的に写そうとした」という点である。

上代とは、中国の漢字を基とした一字一音の万葉仮名によって、日本語の音声を書き表す試みがなされた時代である。当時、「万葉仮名で書く」と試みは、中国という外国の文字（漢字）を借りて、日本語の音声を一音節単位で写し取る営みに近いものであったと考えられる。それはちょうど、中世において、ポルトガルという外国で使用されている文字（ローマ字）を以て日本語の音声を正確に写し取ろうとした試みに、少なからず通じるところがあるといえるのではないだろうか。使用する文字は異なれども、日本語の音声を、一音節単位で、可能な限り表音的に写そうとしたという動機は両者に共通するのである。

そしてその際、用いられた文字（漢字・ローマ字）が、日本語よりも音素数の多い言語の文字であったという点も、両者に共通する。

中国語が日本語よりも音素の多い言語であることは言うまでもないが、ポルトガル語においても、少なくとも母音においては、日本語より音素が多かったことが指摘されている。池上（1984：123）によると、キリシタン資料が作成された近代ポルトガル語第 I 期（16 世紀中葉 - 18 世紀中葉）では、強勢のある位置及び強勢のない位置に起こり得る口母音は、8 母音であったという。8 つの母音音素をもつ話者（ポルトガル人）が、5 つの母音音素しか持たない話者（日本人）の拗音節を聞いたとき、どのようになるか。おそらく、発音時の硬口蓋化の程度差によって微妙に異なる音声を、日本人が聞き分ける「イ」や「エ」よりも、数多く聞き分けることができたものと考えられる。開拗長音で、「びやう」の音節を音声の異なりによって *biō* と *beō* で書き分けたのは、ポルトガル人の音声観察が鋭かったことはもちろんだが、彼らの持つ母音音素が日本人よりも多かったからこそ可能になった結果といえよう。

このように、音素数の違いによって、日本の仮名表記と、キリシタン資料のローマ字表記との間に食い違いがもたらされる例は少なくない。その一例には、撥音表記がある。日本語の撥音は、「ん（または「む」）」の一字で表記されるが、キリシタン資料では、撥音の

音的環境によって、「n」と「m」で写し分ける（例：varambe [童]『平家』巻一 26, xenzo [先祖]『平家』巻一 3）。これらを見ると、外国人によって記された日本語のローマ字綴りは、結局は、日本語非母語話者（主にポルトガル人）が耳にした音声を、自身の音韻に照らし合わせて表記したものであって、日本人の音韻と必ずしも一致するわけではないということがわかる。有坂（1955：194）が、中国人の日本語音訳例について言及する中で、「但し外国人によつて写されるものは、音韻そのものではなく、実現された個々の音声であるから、一時的偶然的な性質を誇張して表してゐるやうな場合が無いともいへない。」と述べているのは、まさにキリシタン資料の表記においても該当するであろう。

以上のように、上代特殊仮名遣いと、キリシタン資料のローマ字綴りが表記された背景を考慮すると、両者の表記区分の一致は全くの偶然とは言えないと思われる。音素数の多い外国の文字を借りて、日本語を、一音節ずつ表音的に写そうとした結果もたらされのであり、ある種の必然と言っても良いのではないだろうか。

5. まとめ

本章では、本研究の内容を整理するとともに、キリシタン資料のオ段拗長音におけるローマ字綴りが、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列における表記区分とほぼ一致することを指摘した。言及した内容は次の通りである。

(一) 日本語における硬口蓋化の諸現象は、その子音が、「完全硬口蓋化」を生じるか、「不完全硬口蓋化」を生じるかによって、現象が二分する。完全硬口蓋化を生じる前舌子音（歯茎音）では、硬口蓋化そのものや、/eu/>/yoo/ のような拗長音化を生じやすく、また硬口蓋性が失われる脱硬口蓋化も生じにくい。反対に、不完全硬口蓋化を生じる非前舌子音（唇音・軟口蓋音・ラ行歯茎音）では、硬口蓋化そのもの、及び/eu/>/yoo/ のような拗長音化も生じにくく、また脱硬口蓋化が先駆けて生じやすい。

(二) キリシタン資料のオ段拗長音のローマ字綴りと、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列では、その表記区分がほぼ一致する。これは、両者の書き分けに硬口蓋化という音声現象が関与しているためと考えられる。また、両者は、日本語の音声を、音素数の多い言語の文字で、一音節ずつ表音的に写そうとするという共通の動機があったことから、このような一致が見られるものと思われる。しかし両者は、音声的・音韻的内実が大きく異なっているため、直接的な関連性は見いだせない。

上代特殊仮名遣いイ・エ列の甲・乙類の書き分けについては、今なお議論が多く、完全な見解の一致には達していない。しかし本稿の考察は、硬口蓋化の有無を主張する服部・松本説を、従来とは異なる角度から支持する一助になると考えられる。

終章

本稿では、ローマ字本キリシタン資料にみえる日本語拗音節（特にオ段拗長音）を考察し、これらの音節には、硬口蓋化の2種（完全硬口蓋化、不完全硬口蓋化）の別が現れていることを明らかにした。そして、これら硬口蓋化2種の別は、子音の調音点の差によってどちらを生じるかが決定しており、歯茎音では「完全硬口蓋化」が、唇音・軟口蓋音・ラ行歯茎音では「不完全硬口蓋化」が生じることを明らかにした。この硬口蓋化2種の別によって、日本語での硬口蓋化の諸現象は、様相が二通りに区分されることも指摘した。

以下に、各章の概要をまとめる（各章の相互関連については第7章参照のこと）。

第1章では、本研究の枠組みを提示した。先行研究において、日本語の拗音節は2つに分類できることが指摘されていたが、本章では、「完全硬口蓋化」「不完全硬口蓋化」という枠組みで拗音節を分析する方法を提唱した。この硬口蓋化の2種は、子音の調音点の差によってどちらを生じるかが決定していることから、拗音節の様相もそれらに付随して二分すると予測されることを指摘した。また「開拗長音」「合拗長音」など、本研究で用いる用語の定義も行った。

第2章では、ローマ字本キリシタン資料の開拗長音にみえる「-iö」と「-eö」の表記を音節頭子音別に考察し、この二表記には音声の異なりがあることを指摘した。異例表記の-eöは、不完全硬口蓋化を生じる音節に偏って出現するが、完全硬口蓋化を生じる音節には生じない。このように音声現象に対応した表記分布が見られることと、『日葡辞書』の内部徴証から、-iöと-eöには音声差があることを指摘した。しかしこれらは日本語の表記には反映されないことから、音韻的区別のない音声差であることを述べた。

第3章では、同じくキリシタン資料の合拗長音にみえる「-eô」と「-iô」について考察を行い、この二表記にも音声の異なりがあることを指摘した。『日本大文典』等の諸記述から、-eôはエ段音、-iôはイ段音に聞こえていた音節であることを証すると共に、これら二表記が、硬口蓋化2種の別と照応して出現していることを明らかにした。また、二表記の分布から、/eu/の拗長音化には、音節頭子音の差によって遅速があったと推定されることも述

べた。

第4章では、第2・3章で検討した刊本での調査結果が、バレット写本でも同様に確認できることを指摘した。刊本と写本での結果が一致することから、キリシタン資料の拗音節表記が硬口蓋化という音声的要因に基づいて記されていることをさらに強く裏付ける結果となった。

第5章では、中世日本語のエ段音節で、硬口蓋化がいかにかに生じていたかを再検討するため、近世～現代九州方言におけるエ段音節の観察を行った。結果、エ段音節は、子音の調音点の差（すなわち、完全硬口蓋化を生じるか、不完全硬口蓋化を生じるかの差）によって硬口蓋化の様相が二分していることが明らかになった。この二分している様相は、第2・3章で扱ったオ段拗長音（開拗長音・合拗長音）の様相と平行している。この結果により、/eu/ の拗長音化から生じていた合拗長音に、音節頭子音の差による遅速のあったこと（第3章参照）が、より合理的に説明されるようになった。

第6章では、合拗長音に現れる *teô*, *deô*, *neô* のような“本則ではない-eô”について考察を行い、これらは和語の語幹末で頻用されていることから、形態音韻論的な理由により生じていた可能性が高いことを指摘した。さらに、このような-eôの音節を生じる「下二段動詞+助動詞ウ・ウズル」の変遷についても追及し、下二段動詞で非拗音形の助動詞ヨウ（例：食ベヨウ）が生じるには、脱硬口蓋化という音声現象が関与していた可能性があることを、近世資料の結果から示した。

第7章では、本研究の内容を整理し、日本語における硬口蓋化の諸現象が体系的に把握可能であり、硬口蓋化2種の別によって、実現様相が二分されることを指摘した。また、キリシタン資料のオ段拗長音表記と、上代特殊仮名遣いのイ列・エ列の表記区分が近似していることも指摘し、この共通点が生じた要因は硬口蓋化という音声現象にあるだけでなく、音素数の多い外国の文字で、音素数の少ない日本語の音声を表音的に写そうとした、動機と表記手法の点における共通点も関わっていることを述べた。

以上が、本稿の概要である。

日本語の拗音節について、また硬口蓋化について、幾分かの新たな解釈は提示したと思われるものの、今後に残された課題も多い。

その一つは、歴史的な「硬口蓋化」においても、本研究の成果が適応できるかという点である。硬口蓋化は、琉球方言の /ki/ における [ki] → [tʃi] のような、歴史的な音変化も指す場合もある。この場合にも、子音の調音点の差によって様相に異なりが現れているかどうか、という点が問題となる。現在のところ、部分的には確認できるようだが¹⁰⁵、より多くのデータを以て証明していくことが必要になるだろう。また、本研究では、子音の調音点の相違（前舌子音／非前舌子音）が、現象を二分する結果を生んでいたが、この調音点の区分が、音声・音韻だけでなく形態論の分野にも適応可能かどうかも今後追究していかなければならない。すなわち今後は、子音の性質を主軸に据えて、音声学・音韻論や形態論の分野に議論を進めていく必要があると思われるのである。

¹⁰⁵ たとえば趙（2005）では、『琉球譯』におけるエ段音節の硬口蓋化が、/me/ > /mi/ では遅れていたことを指摘している。

【参考文献】

- Bateman, N. (2007) A crosslinguistic investigation of palatalization. Ph. D. dissertation, University of California, San Diego.
- (2011) On the Typology of Palatalization. *Language and Linguistics Compass*, 5: pp.588–602. doi: 10.1111/j.1749-818X.2011.00294.x
- Bhat, D.N.S. (1978) A General Study of Palatalization. in Greenberg, Ferguson, and Moravcsik *Universal of Language, vol.2: Phonology*. Stanford University Press, Stanford, California, pp.47-92
- Chen, M. Y. (1973) Predictive power phonological description. *Lingua* 32. Pp173-191
- Hall, T. A. (2000) Typological generalizations concerning secondary palatalization. *Lingua*110. pp.1-25
- Kochetov, A. (2002) *Production, perception, and emergent phonotactic patterns—A case of contrastive palatalization*. New York & London : Routledge
- (2011) “palatalization” in Oostendorp, Mark van, Colin J. Ewen, Elizabeth V. Hume, Keren Rice (eds.) *The Blackwell companion to phonology* 3, Wiley-Blackwell, pp.1666-1690
- Lahiri, A. and V. Ever. (1991) Palatalization and coronality. in Paradis and Prunet *The Special Status of Coronals: Internal and external evidence*. San Diego: Academic Press, pp.79-100
- Mester, A., and J. Itô. (1989) Feature predictability and underspecification : Palatal prosody in Japanese mimetics. *Language*63(2). pp.258-293
- Schourup L. and I. Tamori (1992) Japanese Palatalization in relation to theories of restricted underspecification, *Gengo Kenkyu* 101, pp.107-145
- Schütte, S. J. Josef Franz (1962) 「ヴァチカン図書館所蔵バレット写本について」キリシタン文化研究会編『キリシタン研究第七輯 (別冊共)』吉川弘文館, pp.3-29
- Teyssier, P. (1980) *Histoire de la langue portugaise*, Imprimé en France, à Vendôme: Imprimerie des Presses Universitaires de France
- 有坂秀世 (1955) 『上代音韻攷』三省堂
- (1957) 『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂
- 池上岑夫 (1984) 『ポルトガル語とガリシア語—その成立と展開—』大学書林
- 石井久雄 (1977) 「中世日本語のオ段長音の渉り音」『国語学研究 (東北大学)』16, pp.34-42
- 出雲朝子 (1961) 「成算堂本論語抄におけるオ段拗長音の表記について」『未定稿』9, pp.99-121
- (1978) 「第四章 中世Ⅱ」春日和男編『新編国語史概説』有精堂, pp.188-222
- 今泉忠義 (1951) 「日葡辞書を通して見た字音と語法と」『国語学』6, pp.11-28
- (1968) 『日葡辞書の研究 音韻』桜楓社
- 上野善道編 (1989) 「音韻総覧」尚学図書編『日本方言大辞典 下巻』小学館, pp.1-77
- 江口正弘 (2010) 『天草版平家物語影印編』進典社
- 江口泰生 (2006) 『ロシア資料による日本語研究』和泉書院
- 榎木久薫 (1993) 「中世片仮名文における字音語の拗音表記について」『鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学』44-1, pp.1-8
- 太田亨 (1999) 「『杜詩続翠抄』について」岡村貞雄博士古稀記念中国学論集刊行会編『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』白帝社, pp.269-285
- 大塚光信 (1959) 「「ダ」とある種の抄物」『国文学攷 (広島大学)』21, pp.22-32
- (1982) 「開合音—キリシタン版の表記をめぐる—」『文学』50-1, pp.1-11
- (1996) 「第八章 助動詞—形態の変化を中心に」『抄物きりしたん資料私注』清文堂出版,

pp.344-390

- 大友信一 (1963) 『室町時代の国語音声の研究』 至文堂
- 大野晋 (1974) 『日本語をさかのぼる』 岩波書店
- 岡田薫 (2012) 『室町時代末期の音韻と表記』 おうふう
- 奥村和子 (2005) 「平家物語におけるバ行マ行四段動詞の音便について」『女子大文学 (国文篇)』56, pp.1-11
- 奥村三雄 (1972) 「古代の音韻」 中田祝夫編 『音韻史・文字史』 大修館書店
- (1989) 『九州方言の史的研究』 桜楓社
- (1990) 『方言国語史研究』 東京堂出版
- 小倉肇 (2011) 『日本語音韻史論考』 和泉書院
- 尾崎知光 (1984) 「解説」『和訓栞大綱』 勉誠社, pp.1-11
- 川口敦子 (2000) 「バレット写本の「四つがな」表記から」『国語学』 51-3, pp.1-16
- 川瀬一馬編 (1992) 『お茶の水図書館蔵 新修成篁堂文庫善本書目』 (財) 石川文化事業財団, お茶の水図書館
- 金井由充 (1985) 「上代日本語におけるイ段・エ段の甲・乙消失について——生成音韻論の視点から——」『群馬大学教養部紀要』 19, pp.47-58
- (1987) 「室町時代におけるエ段音の口蓋化と非口蓋化」『群馬大学教養部紀要』 21, pp.77-86
- 上村観光 (1937) 「論語抄解題」『論語鈔』 成篁堂叢書第十篇別冊, 民友社, pp.1-32
- 上村孝二 (1983) 「九州方言概説」『講座方言学 九州地方の方言』 国書刊行会
- (1998) 『九州方言・南島方言の研究』 秋山書店
- 神山孝夫 (1995) 『日欧比較音声学入門』 鳳書房
- 亀井孝 (1973) 「日葡辞書 “にせよ (facsimile) 版” 印行始末記」『日葡辞書』 勉誠社, pp.1-8
- 編 (1964) 『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』 平凡社
- (1984a) 「室町時代末期における多行音の口蓋化について」『亀井孝論文集 3 日本語のすがたところ (一) 音韻』 吉川弘文館, pp.283-290 (初出: 1937年)
- (1984b) 「「オ段の開合」の混乱をめぐる一報告」『亀井孝論文集 3 日本語のすがたところ (一) 音韻』 吉川弘文館, pp.221-264 (初出: 1962年)
- 岸本恵実 (1999) 「キリシタン資料の拗音および連母音を表す-ia について」『京都大学国文学論叢』2, pp.1-11 (左開き)
- 木田章義 (2011) 「上代特殊仮名遣のエ列乙類・イ列乙類の問題」『国語国文』 80-1, pp.35-49
- 北原保雄 (2010) 『日本語の形容詞』 大修館書店
- 木部暢子 (1992) 「知覧方言の音の特徴——エ列音・ウ列音の口蓋性をめぐって」『知覧文化』29, pp.105-113
- 木村秀次 (1983) 『日葡辞書』における漢語の「ゆれ」——「A. l, B.」の形の場合——『国文学 言語と文芸』 94, pp.91-117
- (1991) 「長崎版『日葡辞書』における読みの「ゆれ」——‘A. l, B.’形以外の漢語の場合」『東京成徳短期大学紀要』 24, pp.1-18
- 九州方言学会編 (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』 風間書房 (初版: 1969)
- 工藤力男 (1978) 「中世形容詞の終焉」 浜田啓介編 『論集日本文学・日本語 3 中世』 角川書店, pp.298-311
- 河野一郎 (1965) 「「伊路波」の諺文標記に就いて——朝鮮語史の立場から——」 京都大学文学部国語学国文学研究室編 『弘治五年朝鮮板伊路波 本文・釈文・解題』 京都大学国文学会, pp.33-42

- 小松英雄 (1980) 「拗音」国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版
- 小林芳規 (1963) 「訓点における拗音表記の沿革」『王朝文学』9
- 駒走昭二 (2004) 「『露日単語集』に基づく18世紀薩隅方言のエ列音」『国語学』55-2, pp.45-58
- 坂口至 (1981) 「助動詞ヨウの成立以前」『文献探究』8, pp.1-14
- (1986) 「紀海音の用語意識—韻律の観点から— (上)」『文献探究』18, pp.7-17
- 阪田雪子 (1955) 「天草本伊曾保物語におけるオ段拗長音のローマ字綴字法をめぐって」『東京女子大学日本文学』3-5, pp.28-38
- 佐久間鼎 (1963) 『日本音声学』風間書房
- 迫野虔徳 (1968) 「仮名文における拗音仮名表記の成立」『語文研究 (九州大学)』26, pp.52-64
- (1973) 「『京大図書館蔵元亀二年本』運歩色葉集』について」『国語国文』42-7, pp.44-55
- (1975) 「オ・ウ段拗長音表記の動揺」『国語国文』44-3, pp.29-43
- (1998) 『文献方言史研究』清文堂出版
- 城田俊 (1993) 『日本語の音—音声学と音韻論—』ひつじ書房
- 神保格 (1933) 『国語音声学』(国語科学講座Ⅱ音声学) 明治書院
- (1940) 『国語音声学綱要』明治図書
- 菅原範夫 (1984) 「日葡辞書の引用文におけるローマ字綴りの改変について」『高知大國文』15, pp.14-21
- (1989) 「キリシタン版ローマ字資料の表記と読み—ローマ字翻字者との関係から—」『国語学』156, pp.15-26
- 杉戸清樹 (1989) 「原刊本『捷解新語』のエ段音節母音部への音注について」野村先生受章記念刊行会編『野村正良先生受章記念言語学論集』野村先生受章記念刊行会, pp.143-158
- 杉村孝夫 (2010) 「九州方言音声の諸相」『福岡教育大学紀要 第一分冊』59, pp.49-64
- 高見三郎 (1977) 「杜詩の抄のことば—表記・音韻を中心に—」『国語国文』46-4, pp.95-109
- (1992) 「『杜詩統翠抄』について」大塚光信編『統抄物資料集成 (全十巻) 第十巻 解説・索引』清文堂
- 高羽五郎 (1950) 「附録」『サントスの御作業 翻字編 2巻 2』国語学資料刊行所, pp.1-32
- 高松政雄 (1970) 「オ段拗長音の一問題」『国語学』83, pp.22-31
- (1971) 「オ段拗長音」『国語国文』40-7, pp.16-29
- (1993) 『日本漢字音論考』風間書房
- 高宮正夫 (1953) 「推量の助動詞『よう』の成立について—キリシタン文献の表記から—」『上毛国語』3, pp.30-36
- 高山知明 (1992) 「日本語における接続母音の長母音化—その歴史的意味と発生の音声的条件—」『言語研究』101, pp.14-34
- 竹村明日香 (2011) 「ローマ字本キリシタン資料におけるオ段合拗長音表記—抄物の表記との対照を通して—」『語文』96, pp.57-70
- (2012) 「『日葡辞書』の開拗長音」『国語国文』81-3, pp.1-26
- 多和田眞一郎 (1997) 『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』武蔵野書院
- (2004) 「沖縄語音韻史—口蓋化・破擦音化を中心として—」『音声研究』8-2, pp.58-68
- 趙綱熙 (1997) 「朝鮮時代の日本語学習書におけるエ段音節母音部表記について」『広島大学教育学部紀要 第二部』46, pp.175-184

- 趙志剛 (2005) 「『琉球譯』エ段音の漢字表記について」『国文学攷』187, pp.1-13 (左開き)
- 鄭炫赫 (2003) 「『落葉集』の字音仮名遣」『早稲田日本語研究』11, pp.25-36
- 土井忠生 (1934) 『近古の国語』明治書院
- (1942) 『吉利支丹語学の研究』靖文社
- (1960) 「解題」『日葡辞書』岩波書店
- (1962) 「バレット手記の書写に関する私見」キリシタン文化研究会編『キリシタン研究第7集(別冊共)』吉川弘文館, pp.31-46
- (1963) 『吉利支丹文献考』三省堂
- (1982) 『吉利支丹論攷』三省堂
- 外山映次 (1961) 「洞門抄物に見える助動詞「ヨウ」について」『国語学』46, pp.16-26
- 豊島正之 (1984) 「『開合』に就て」『国語学』136, pp.152-140 (左開き)
- (1989) 「ロドリゲス大文典から小文典へ」『国語国文研究(北海道大学)』83, pp.79-61 (左開き)
- 長澤規矩也・川瀬一馬 (蘇峰先生古稀祝賀記念刊行会編) (1932) 『成實堂善本書目』民友社
- 那須昭夫 (2005) 「オノマトペの音韻構造に見る非対称性」『音声研究』9-1, pp.20-29
- 根岸亜紀 (2003) 「ローマ字表記と音韻論——天草版平家物語を資料として——」『日本文学研究(大東文化大学)』42, pp.106-96 (左開き)
- (2004) 「キリシタン文献における日本語のローマ字表記の意義」『日本文学研究(大東文化大学)』43, pp.148-134 (左開き)
- 橋本進吉 (1950) 『国語音韻の研究』(橋本進吉博士著作集第4冊) 岩波書店
- (1961) 『キリシタン教義の研究』(橋本進吉博士著作集第11冊) 岩波書店 (初版: 『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』東洋文庫, 1928年)
- 橋本友子 (1984) 「日本語の拗音について」『音声学会会報』175, pp.1-2,9
- 長谷川千秋 (1997) 「直音と拗音を書き分ける仮名文字遣」『国語国文』66-7, pp.36-52
- 服部四郎 (1951) 『音声学』岩波書店
- (1958) 「奄美群島の諸方言について——沖縄・先島諸方言との比較——」『日本語の系統』岩波書店, pp.275-294
- (1972) 「上代日本語の母音音素は六つであって八つではない」『月刊言語』5-12, pp.69-79
- (1976) 「上代日本語の体系と母音調和」『言語』5-6, pp.2-14
- 浜田敦 (1964) 「拗音」『国語国文』33-5, pp.1-12
- (1970) 「弘治五年朝鮮板『伊路波』諺文対音攷——国語史の立場から——」『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店, pp.77-88
- (1983) 「国語史の諸問題——四十年の総括——」『続朝鮮資料による日本語研究』臨川書店, pp.16-34
- 早田輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会
- 日高貢一郎 (1982) 「宮崎県宮崎郡清武町大字今泉」国立国語研究所編『方言談話資料(6)——鳥取・愛媛・宮崎・沖縄——』国立国語研究所資料集10-6, 秀英出版
- 肥爪周二 (2001) 「ウ列開拗音の沿革」『訓点語と訓点資料』107, pp.1-16
- (2005) 「音韻史——拗音をめぐる」『国文学 解釈と教材の研究』50-5, pp.52-60
- (2009) 「拗音の分布からあぶり出す日本語音韻史」『東京大学文学部文化交流研究紀要』22, pp.37-41

- (2010) 「日本漢字音における拗音・韻尾の共起制限」『訓点語と訓点資料』127, pp.200-209
- 樋渡登 (1978) 「洞門抄物における助動詞ヨウについて」『国学院雑誌』79-9, pp.33-47
- 蛭沼芽衣 (2010) 「近代上方の/se/と/ze/の変遷について」『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』pp.119-126
- 福島邦道 (1973a) 「キリシタン資料による音韻研究」『文学・語学』66, pp.21-29
- (1973b) 「第八章「見ゅう」と「見ょう」の交替」『キリシタン資料と国語研究』笠間書院, pp.189-206
(初出: 1969 年)
- 解説 (1979) 『サントスの御作業 翻字・研究篇』勉誠社
- (1983) 『続キリシタン資料と国語研究』笠間書院
- 松本宙 (1977) 「拗音」飛田良文監修『日本語学研究事典』明治書院, p.102
- 松本克己 (1974) 「古代日本語母音組織考——内的再建の試み——」『金沢大学法文学部論集 文学篇』22, pp.83-152
- (1995) 『古代日本語母音論 上代特殊仮名遣の再解釈』ひつじ書房
- 松田正義 (1978) 『古方言書の追跡研究』明治書院
- 馬淵和夫 (1984a) 『増訂 日本韻学史の研究 I』臨川書店 (初版: 1965 年)
- (1984b) 『増訂 日本韻学史の研究 II』臨川書店 (初版: 1965 年)
- 丸田博之 (1996) 「日葡辞書の編者とその周辺」『国語国文』65-5, pp.473-491
- (2001) 『『日葡辞書』の「拗音表記」・管見』『姫路獨協大学外国語学部紀要』14, pp.260-270
- 丸山徹 (1981) 「中世日本語のサ行子音——ロドリゲスの記述をめぐって——」『国語学』124, pp.103-95 (左開き)
- (1984) 「ロドリゲス日本文典におけるポルトガル語正書法——/āw/の表記について——」『南山国文論集』8, pp.1-9 (左開き)
- (1991) 「ポルトガル語正書法小史 補説」『南山国文論集』15, pp.1-6
- 三ヶ尻浩 (1937) 『大分縣方言の研究』朋文堂
- 溝口博幸 (2000) 「天草版“FEIQQE MONOGATARI”における長音・音便・合拗音・句読点について」『研究会報告 (大東文化大学)』21, pp.7-25
- 南不二男 (1959) 「長崎県口之津方言の音韻体系」『国語学』36, pp.1-14
- 森田武 (1955) 「吉利支丹資料のローマ字綴——日葡辞書・ロドリゲス大文典を中心として——」『国語学』20, pp.28-40
- (1967) 「日葡辞書成立に関する一考察」山田忠雄編『本邦辞書史論叢』三省堂, pp.1-33
- (1976) 『天草版平家物語難語句解の研究』清文堂出版
- (1980) 「補説」土井忠雄・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店, pp.847-862
- (1993) 『日葡辞書提要』清文堂出版
- 森博達 (1991) 『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店
- 矢島正浩 (1986) 「近松世話浄瑠璃における形容詞連用形のウ音便化について」『国語学』147, pp.14-27
- 矢野文博 (1955) 「三重方言に於ける口蓋化音について」『三重大学学芸学部教育研究所紀要』13, pp.59-72
- 屋名池誠 (2011) 「「近世通行仮名表記」——「濫れた表記」の冤を雪ぐ——」金沢裕之・矢島正浩編『近代語のパースペクティブ 言語文化をどう捉えるか』笠間書院, pp.153-181
- 柳田征司 (1985) 『室町時代の国語 (国語学叢書 5)』東京堂出版
- (1993) 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院

- (2004) 「拗音」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』23, 和泉書院, pp.19-37
- 山田忠雄・大田栄太郎 (1963) 「法明童子」山田忠雄編『山田孝雄追憶史学語学論集』八木書店
- 湯沢幸吉郎 (1925) 『室町時代言語の研究』風間書房
- (1982) 『徳川時代言語の研究』風間書房
- 吉川泰雄 (1974) 「近古国語に於ける長拗音「ゆう」と「よう」の相関」『古典の新研究 第2集』, pp.353-378
- 吉田澄夫 (1938) 『天草版金句集の研究』東洋文庫
- (1966) 「天草版金句集の発音について」『日本語の音声』6, pp.265-277 (初出: 1937)
- 吉町義雄 (1976) 『九州のコトバ』双文社出版
- 米谷隆史 (2004) 『(石見) 方言茶話』と『肥後方言茶談』をめぐって——近世の肥後語文献について続貂
第219回近代語研究会発表資料
- ラング・ローランド (1971) 「文献資料に反映した中世日本語エ列音節の口蓋性」『国語学』85, pp.36-42
- 李東郁 (2003) 「『捷解新語』のエ段音表記について—原刊本の「-joi」・「-jo」表記を中心として—」『広島
大学大学院教育学研究科紀要第二部』52, pp.261-270

【調査資料】(一部, 傍線部を略称として用いた)

[キリシタン資料]

- 天草版伊曾保物語: 福島邦道解説『天草版伊曾保物語』(1976, 勉誠社)
- 天草版平家物語: 福島邦道解説『天草版平家物語(上)』『天草版平家物語(下)』(1976, 勉誠社)
- 日葡辞書: 亀井孝解説『日葡辞書』(1973, 勉誠社), 土井忠生・森田武・長南実編『邦訳日葡辞書』土井
忠生・森田武・長南実編(1980, 岩波書店)
- ヒイデスの導師: 鈴木博編『キリシタン版ヒイデスの導師』(1985, 清文堂出版)
- 天草版金句集: 福島邦道解説『金句集四種集成』(1977, 勉誠社)
- 懺悔録: 大塚光信翻字『コリヤード懺悔録』(1957, 風間書房)
- コンテムツス・ムンヂ: 松岡洗司・三橋健解題『コンテムツス・ムンヂ』(1979, 勉誠社)
- サントスの御作業: H.チーリスク・福島邦道・三橋健解説『サントスの御作業』(1976, 勉誠社)
- スピリツアル修行: 林田明著『スピリツアル修行の研究 影印・翻字篇』(1975, 風間書房)
- ドチリナ・キリシタン(1592年刊): 橋本進吉『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究 別冊』(1928, 東洋
文庫)
- ドチリナ・キリシタン(1600年刊): 小島幸枝編『どちりなきりしたん総索引』(1971, 風間書房)
- 日本大文典: 土井忠生訳註『日本大文典』(1955, 三省堂), 土井忠生解題・三橋健書誌解説『日本文典 ARTE
DA LINGOA DE IAPAM』(1976, 勉誠社)
- 日本小文典: 日埜博司編訳『日本小文典』(1993, 新人物往来社)
- 羅葡日対訳辞書: 福島邦道・三橋健『羅葡日対訳辞書』(1979, 勉誠社)
- バレット写本: キリシタン文化研究会編『キリシタン研究第七輯別冊』(1962, 吉川弘文館), キリシタン文
化研究会編『キリシタン研究 第七輯』(1962, 吉川弘文館)

[抄物]

- 成實堂本『論語抄』: 『論語鈔』成實堂叢書第十篇(1917, 民友社)。底本: お茶の水図書館成實堂文庫蔵本
- 杜詩続抄: 大塚光信編『續抄物資料集成 第一巻 杜詩続抄翠抄(一)』(1980, 清文堂出版), 『同(二)』
(1980, 清文堂出版), 『同(三)』(1981, 清文堂出版)。以上, 底本: 国立国会図書館蔵本(巻1-2),
建仁寺両足院蔵本(巻3-19)

[洒落本・滑稽本]

近松世話物浄瑠璃 24 作品：鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之校注・訳『近松門左衛門集①』『同②』新編日本古典文学全集 74・75 (1997-1998, 小学館)。調査した作品は、『五十年忌歌念仏』、『淀鯉出世滝徳』、『冥途の飛脚』、『博多小女郎波枕』、『女殺油地獄』、『薩摩歌』、『丹波与作待夜のこむろぶし』、『夕霧阿波鳴渡』、『長町女腹切』、『山崎与次兵衛寿の門松』、『曾根崎心中』、『心中二枚絵草紙』、『卯月紅葉』、『心中重井筒』、『心中万年草』、『心中刃は氷の朔日』、『今宮の心中』、『生玉心中』、『心中天の網島』、『心中宵庚申』、『堀川波鼓』、『大経師昔暦』、『鍮の権三重帷子』

上方洒落本：洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』(1978-1988, 中央公論社)。調査した作品は、『原柳巷花話』(宝暦年間)、『浪華色八卦』(宝暦 7)、『陽台遺編妣閣秘言』(宝暦 7)、『月下余情』(宝暦 8 カ)、『郭中奇譚 (異本)』(明和 8)、『浪華今八卦』(安永 2)、『虚辞先生穴賢』(安永 9)、『短華薬葉』(天明 6)、『当世粋の源』(天明 7)、『言葉の玉』(寛政 5)、『酔のすじ書』(寛政 6)、『北華通情』(寛政 6 序)、『粋庖丁』(寛政 7)、『裸百貫』(寛政 8)、『廓の池好』(寛政 8)、『戯言浮世瓢箪』(寛政 9)、『うかれ草紙』(寛政 9)、『十界和尚話』(寛政 10)、『阿蘭陀鏡』(寛政 10)、『粋学問』(寛政 11)、『南遊記』(寛政 12)、『善玉先生大通論』(享和元)、『後涼東訛言』(享和 2)、『当世嘘之川』(享和 4)、『こゝろの外』(文化 3)、『一文塊』(文化 4)、『竊潜妻』(文化 4)、『粋の曙』(文政 3)、『箱まくら』(文政 5)、『色深狹睡夢』(文政 9)、『北川蜷殻』(文政 9)、『老楼志』(天保 3)、『興斗月』(天保 7)、『風俗三石土』(弘化元)、『千歳松の色』(嘉永 6)

上方咄本：肥田皓三・大橋正叔・浜田啓介編『上方咄本集』上方藝文叢刊 9 (1982, 八木書店)。調査した作品は、『粋のみちづれ』(寛政 10)、『列々波奈志』(文化 2)、『はなし大全』(文政 7)、『滑稽邯鄲枕』(文政 4)、『滑稽笑顔種』(文政 10)、『落嘶桂の花』(江戸後期カ)、『落嘶桂の花』(江戸後期カ)
武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』全 20 巻 (1975-1979, 東京堂出版)。調査した作品は、『軽口福おかし』(元文 5 年)、『軽口新歳袋』(元文 6)、『軽口耳過袋』(寛保 2)、『軽口へそ巡礼』(延享 3)、『軽口瓢金苗』(延享 4)、『軽口笑布袋』(延享 4 年)、『軽口浮瓢箪』(寛延 4)、『軽口腹太鼓』(宝暦 2)、『軽口福德利』(宝暦 3)、『軽口豊年遊』(宝暦 4)、『口合恵方袋』(宝暦 5)、『軽口東方朔』(宝暦 12)、『軽口扇の的』(宝暦 12)、『軽口片頬笑』(明和 4)、『軽口はるの山』(明和 5)、『絵本軽口福笑』(明和 5)、『春帖咄』(天明 2)、『歳旦話』(天明 3)、『軽口四方の春』(寛政 6)、『滑稽即興離』(寛政 6)、『軽口筆彦咄』(寛政 7)、『鳩灌雑話』(寛政 7)、『大寄嘶の尻馬初編』(嘉永頃)

[辞書・方言書 (大正期以前, 成立順に配列)]

音曲玉淵集：浜田敦編並開題『音曲玉淵集』(1975, 臨川書店)

和訓栞：木村晟・三澤成博編『版本和訓栞』(1998, 青空社)

和訓栞大綱：尾崎知光編『和訓栞：大綱』(1984, 勉誠社)

筑紫方言：佐藤武義ほか編『筑紫方言 久留米はまおき 菊池俗言考 長崎歳時記 幡多方言』(1999, 港の人)

俚言集覧 (稿本)：ことわざ研究会監修『俚言集覧 自筆稿本版』(1992-1993, クレス出版)

俚言集覧 (刊本)：村田了阿編, 井上頼罔・近藤瓶城増補『増補俚言集覧』(1978, 名著刊行会)

大分県方言類集：土井健之助著『大分県方言類集』(複製 1975, 国書刊行会)

鹿児島方言集：鹿児島県教育会編『鹿児島方言集』(複製 1975, 国書刊行会)

築上郡志：木村晟・古瀬順一・田中宣廣編『近代日本方言資料集〔郡誌編〕第8巻／九州・沖縄』（2007，
港の人）

児湯郡郷土誌：同上

大隅肝属郡方言集：野村傳四著・柳田国男編『大隅肝属郡方言集』（1942，中央公論社）

[辞典類（昭和以降）]

国語学大辞典：国語学会編『国語学大辞典』（1980，東京堂出版）

日本語学研究事典：飛田良文ほか編『日本語学研究事典』（2007，明治書院）

音声学大辞典：日本音声学会編『音声学大辞典』（1976，三修社）

日本国語大辞典第二版：日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典第二版』全15巻（2000-2002，
小学館）

時代別国語大辞典：上代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典 上代編』（1999，三省堂）

[音声録音資料]

全国方言資料：日本放送協会編『CD-ROM版全国方言資料』全12巻（1999，日本放送協会）

全国方言談話データベース：『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全20巻（2001，
国書刊行会）

[言語地図]

日本言語地図：国立国語研究所編『日本言語地図』全6集（1966-1974，国立国語研究所）

初出一覧

第1章 書き下ろし

第2章 「『日葡辞書』の開拗長音」(『国語国文』81-3, 2012年, pp.1-26)

第3章 「ローマ字本キリシタン資料におけるオ段合拗長音表記——抄物の表記との対照を通して——」(『語文』96, 2011年, pp.57-70)

第4章 書き下ろし

第5章 「九州方言から再検討する中世日本語のエ段音節——硬口蓋化の非対称性に着目して——」(『日本語の研究』に条件付き採用決定済, 2012年12月現在)

第6章 書き下ろし

第7章 書き下ろし